妖怪談義
柳田國男
講談社
学術文庫

妖怪談義

柳田國男

講談社学術文庫

カバーデザイン　平野甲賀

妖怪談義

柳田國男

講談社学術文庫
135
300

われわれの畏怖というものの、最も原始的な形はどんなものだったろうか。何がいかなる経路を通って、複雑なる人間の誤りや戯れと結合することになったでしょうか。幸か不幸か隣の大国から、久しきにわたってさまざまの文化を借りておりましたけれども、それだけではまだ日本の天狗や川童、又は幽霊などというものの本質を、解説することはできぬように思います。国が自ら識る能力を具える日を気永く待っているより他はない……（自序より）

0139-581354-2253 (0)

300円

講談社学術文庫のシンボルマークは、古代エジプトにおいて、知恵の神の象徴とされていたトキをデザインしたものです。

●特製ブックカバー贈呈
右のマークを10枚集めて、封書でお送りください。（葉書は不可）
●宛先
講談社　文庫販売部ブックカバー係

キリトリ線

135

妖怪談義

柳田國男

講談社学術文庫

妖怪談義

柳田國男

講談社学術文庫

妖怪談義

柳田國男

講談社学術文庫

本書は、著作権者の了解を得て、原文を新漢字・新かなづかいに改め、一部の漢字をひらがなに直しました。

（編集部）

自序

どうして今頃このような本を出すのかと、不審に思って下さる人のために、言っておきたいことが幾つかあります。第一にはこれが私の最初の疑問、問えば必ず誰かが説明してくれるものと、あてにしていたことの最初の失望でもあったことであります。私の二親は幸いにあの時代の田舎者の常として、頭から抑え付けようともせず、又笑いにまぎらしてしまおうともしませんでした。ちょうど後年の井上圓了さんなどとは反対に、「私たちにもまだ本とうはわからぬのだ。気を付けていたら今に少しずつ、わかって来るかも知れぬ」と答えて、その代りに幾つかの似よった話を聴かせられました。平田先生の古今妖魅考を読んだのは、まだ少年の時代のことでしたが、あれではお寺の人たちが承知せぬだろうと思って、さらに幾つもの天狗・狗賓に関する実話というものを、聴き集めておこうと心がけました。

川童を私などの故郷ではガタロ即ち川太郎と申しました。家が市川の流れと渡しに近かったために、その実害は二夏と途絶えたことはなく、小学校の話題は秋のかかりまで、ガタロで持切りという姿でありました。それから大きくなって三十年余、ずっと続けてというとうそこになりますが、旅に出たり本を読んだりして、その頃を思い出すことがますます多く、と

うとう持ち切れなくなって大正三年、世間が全く改まろうとする頃にはいって、川童駒引という古風な一冊の本を世に出すことになりました。今となって考えると、これが適当な時節であったとは言われませんが、少なくとも問題の保存には役立ちました。私などのうっかり見過そうとしていたすずみの事実が、各地の同志者によって注意せられ、又報告せられるようになりました。うすうすは自分もそうでないかと思っていたことが、もう今日ではほぼ確かになった例が幾つかあります。

たとえば川童の地方名は、どこへ行ってもたいていはカワの童児、そのカワは水汲み場又は井堰のことでありました。沖縄の諸島に行くと、こちらの川童即ちカワラワとよく似た霊物を、インカムロとカーカムロとの二つに分けております。即ち海の童と井の童で、かつては海中の尽きぬ宝と、次々耕されて来た陸上の富とが、共にこの幼ない神たちの管理に属したことを、語るものかと思います。日本の古典の中の珍しい文字使い、遠い航路を守る神で、同時にみそぎという厳重な神事に立ち会いたまう神が、しばしば少童という漢語を以て表現せられてあるのも、恐らくこの方面からでないと説明ができぬかと思います。

こんな話をつづけると、いよいよ序文らしくなくなりますが、終りにもう一つだけ付け加えたいことは、最初この本に入れるつもりで、後に削ってしまった砂まき狸の話であります。これは説明があまりにあくどいので、いちおう引っ込めておいたのですが、あれにもなつかしい思い出が永くつきまとうております。私がたしか十四歳の年、両親に離れて遠く利根川の

岸の町に住んでいた頃、始めてこの話を聴いて大きな印象を受けました。話をしてくれたのは四十ばかりの女性で、そう巧妙であったわけではありませんが、問題の樹というのがこんもりと、たった一本だけ堤のつい目のさきに見えているので、渡し小屋の床几に腰を掛けるたびに、何回でもその折の光景を胸に描いて見たのであります。月の明るい夏の晩の宵の口に、下から土手づたいに帰って来たある人が、ちょうどこの近くまで来ると一匹の小さな獣が、土手を飛び越えて水の岸まで走って行くのを見ました。砂場の広さは二三十間で、何も植えてはなかったといいます。この近くには農家も一軒あるので、そこの猫だろうとは思ったのですが、少し挙動が変っているので、歩みをゆるめて遠くから見ていますと、いったん浅瀬の水の中をあるいてから、すぐに砂地の上をころころと転げまわりました。そうして引き返して来て土手の上の、そのこんもりとした一本木の梢に、かき登ってしまったというのであります。そこで漸く猫ではないと心づいて、用心をしいしいその樹の下を通って来ると、果せるかなたくさんの砂が降って来ましたが、楽屋を見ているから、声を立てる程には驚かなかったという話。これを私が戸川残花先生の編集せられた「たぬき」という本に、全部実話のつもりで報告してしまったのであります。今から心付くと、あれは狸のためには迷惑な、軽妙なこしらえ話でありました。

戸川さんは、今でも覚えている人が多いと思いますが、半生を江戸会誌の事業にささげられた老学者で、この頃は紀州の徳川侯などと共に、今いう文化財の保存事業に手を着けてお

られました。だんだん生物学方面の人の話を聴いてみると、狸くらい耕作者のために、蔭の援助をつづけている野獣は少ないのに、よしなき「かちかち山」などの昔話が流布したばかりに、居れば必ず捕って食われるまでに、農家の同情を失ってしまい、近年はめっきりと数を減じ、野鼠や害虫の害がこのために非常に多くなったということだ、これは何でも一つ、心ある人たちの協力の下に、この狸の真実を世に明らかにしなければならぬという趣意から、最初に先ず喚びかけられたのが狸の会という、数年前からできていた有力な団体でありまして、それがこの珍しい一巻の書の、発行にも参与していたのであります。

東京にも以前は確に狸屋敷という評判の家がありました。現に私なども中学生の頃に、二年足らずもそういう家に、兄と共に住んでいたこともありますが、よほどびくびくしていても、かつてそれらしい形跡がなく、たまたま二階の雨戸にさわる音を聴いて、がらりと開けて見たら尾の長い猫だったので、兄が狂歌を詠んだというぐらいが思い出であります。あれから又ざっと六十年、地下にはいろいろの人の掘った横穴が縦横に通り抜けている世の中に、いくら理解があり趣味が豊かな人たちであろうとも、これで狸の真相を究めさせようとしたことは、戸川先生の無理な望みでした。しかも考えてみなければならぬことは、こうしたきらめくような新しい文化の中に於て、なお且つ古風きわまる化け物を信じたり怖れたり、たまたまおまけだ誤解だということがわかっても、それを噂にして人に話してみたり、自分も時々はもしやと思ったり、更に巧者な人は新たにこしらえて世に伝え、こればかりはいつも

舶来の更に精妙なるものを以て、さし換えて置こうとする者のないことであります。

私は幼少の頃からだいぶこの方面にむだな時間を費やしましたけれども、今となってはもう問題を限定しなければなりません。われわれの畏怖というものの、最も原始的な形はどんなものだったろうか。何がいかなる経路を通って、複雑なる人間の誤りや戯れと、結合することになったでしょうか。幸か不幸か隣の大国から、久しきにわたってさまざまの文化を借りておりましたけれども、それだけではまだ日本の天狗や川童、又は幽霊などというものの本質を、解説することはできぬように思います。国が自ら識る能力を具える日を、気永く待っているより他はないようであります。

昭和三十一年十二月

目　次

妖怪談義

妖怪談義

一

化け物の話を一つ、出来るだけきまじめに又存分にしてみたい。けだしわれわれの文化閲歴のうちで、これが近年最も閑却せられたる部面であり、従ってある民族が新たに自己反省を企つる場合に、特に意外なる多くの暗示を供与する資源でもあるからである。私の目的はこれによって、通常人の人生観、わけても信仰の推移を窺い知るにあった。しかもこの方法をやや延長するならば、あるいは眼前の世相に歴史性を認めて、徐々にその因由を究めんとする風習をも馴致し、迷いも悟りもせぬ若干(じゃっかん)のフィリステルを、改宗せしむるの端緒を得るかも知れぬ。もしそういう事ができたら、それは願ってもない副産物だと思っている。

私は生来オバケの話をすることが好きで、又至って謙虚なる態度を以て、この方面の知識を求め続けていた。それが近頃はふっとその試みを断念してしまったわけは、一言で言うならば相手が悪くなったからである。先ず最も通例の受返事(うけこたえ)は、一応にやりと笑ってから、全体オバケというものはあるものでございましょうかと来る。そんな事はもう疾(とっ)くに決してい

るはずであり、又私がこれに確答し得る適任者でないことは判っているはずである。すなわち別にその答が聴きたくて問うのではなくて、今はこれより外のあいさつのしようを知らぬ人ばかりが多くなっているのである。偏鄙な村里では、怒る者さえこの頃はできて来た。なんぼわれわれでも、まだそんな事を信じているかと思われるのは心外だ。それは田舎者を軽蔑した質問だ、という顔もすれば又勇敢に表白する人もある。そんならちっとも怖いことはないか。夜でも晩方でも女子供でも、キャッともアレエともいう場合が絶滅したかというと、それとは大ちがいの風説はなお流布している。何の事はない自分の懐中にあるものを、出して示すこともできないような、不自由な教育を受けているのである。まだしも腹の底から不思議のないことを信じて、やっきとなって論弁した妖怪学時代がなつかしいくらいなものである。ないにもあるにもそんな事は実はもう問題でない。われわれはオバケはどうでもいるものと思った人が、昔は大いにあり、今でも少しはある理由が、判らないので困っているだけである。

二

都市の居住者の中には、今はかえって化け物を説き得る人が多い。これは一見不審のようであるが、その実は何でもないことで、かれらはほとんど例外もなく、幽霊をオバケと混同しているのである。幽霊の方ならば、町の複雑した生活内情の下に発生し易く、又少々は心

当りのある人もあって、次々の噂は絶えず、信じて怖れおののく者も出て来るので、これをわが同志者と心得て意見を交換しようとすると、がっかりする場合ばかり多いのである。幽霊もそれ自身討究されてよい現象であり、又最初の聯絡と一致点はあったかも知らぬが、近世は少なくともまるで物がちがっていて、此方は言わばお寺の管轄であった。それをオバケとはいう者はあっても、化け物というとまだ何だか変に聞こえる。お岩も累も見覚えがあるからこそこわいので、これを化けて出るというのは言葉の間違いである。へんぐえというからには正体が一応は不明で、しまいに勇士に遭って見顕わされるものときまっている。それを平知盛幽霊なりなどと、堂々と自ら名乗って出たものと一つに見るのは、つまりは本物の種切れとなって後まで、なおこの古い名前に対する関心の、失せていなかった証拠とも見られる。

誰にも気のつくようなかなり明瞭な差別が、オバケと幽霊との間にはあったのである。第一に前者は、出現する場処がたいていは定まっていた。避けてそのあたりを通らぬことにすれば、一生出くわさずにすますこともできたのである。これに反して幽霊の方は、足がないという説もあるにかかわらず、てくてくと向うからやって来た。かれに狙われたら、百里も遠くへ逃げていても追い掛けられる。そんな事は先ず化け物には絶対にないと言ってよろしい。第二には化け物は相手をえらばず、むしろ平々凡々の多数に向かって、交渉を開こうとしていたかに見えるに反して、一方はただこれぞと思う者だけに思い知らせようとする。従

うて平生心掛けが殊勝で、何等やましい所のないわれわれには、聴けば恐ろしかったろうと同情はするものの、前以て心配しなければならぬような問題ではないので、たまたま真っ暗な野路などをあるいて、出やしないかなどとびくびくする人は、もしも恨まれるような事をした覚えがないとすれば、それはやはり二種の名称を混同しているのである。最後にもう一つ、これも肝要な区別は時刻であるが、幽霊は丑みつの鐘が陰にこもって響く頃などに、そろそろ戸をたたいたり屏風を掻きのけたりするというに反して、一方は他にもいろいろの折がある。器量のある化け物なら、白昼でも四辺を暗くして出て来るが、先ず都合のよさそうなのは宵と暁の薄明りであった。人に見られて怖がられるためには、少なくとも夜ふけて草木も眠るという暗闇の中へ、出かけて見た所が商売にはならない。しかも一方には晩方の幽霊などというものは、昔から聴いたためしがないのである。大よそこれほどにも左右別々のものを、一つに見ようとしたのはよくよくの物忘れだと思う。だからわれわれは怪談と称して、二つの手をぶらさげた白装束のものを喋々するような連中を、よほど前からもうこちらの仲間には入れていないのである。

三

そこで話はきっすいの晩方のオバケから始めなければならぬのだが、夕をオオマガドキだのガマガドキだのと名づけて、悪い刻限と認めていた感じは、町では既に久しく亡びている。

私は田舎に生まれ、又永い間郊外の淋しい部落に住んでいるために、まだ少しばかりこの心持を覚えている。古い日本語で黄昏をカハタレといい、もしくはタソガレドキといっていたのは、ともに「彼は誰」「誰ぞ彼」の固定した形であって、それも唯単なる言葉の面白味以上に、もとは化け物に対する警戒の意を含んでいたように思う。現在の地方語には、これを推測せしめるいろいろの称呼がある。例えば甲州の西八代で晩方をマジマジゴロ、三河の北設楽でメソメソジブン、その他ウソウソとかケソケソとかいっているのは、いずれも人顔のはっきりせぬことを意味し、同時に人にあっても言葉もかけず、いわゆる知らん顔をして行こうとする者にも、これに近い形容詞を用いている。歌や語り物に使われる「夕まぐれ」のマグレなども、心持は同じであろう。今でも関東ではヒグレマグレ、対馬の北部にはマグレヒグレという語がある。東北地方で黄昏をオモアンドキというのも、やはりアマノジャクが出てあるく時刻だというから、「思わぬ時」の義であったらしく考えられる。

村では気をつけて見るとこういう時刻に、特に互いに挨拶というものを念入れて、できる限り明確に、相手の誰であるかを知ろうとする。狭い部落の間ならば、物ごし肩つきでもたいていはすぐに判るはずだが、それでも夕闇が次第に深くなると、そうだと思うが人ちがいかも知れぬという、気になる場合が随分ある。最も露骨なのが何吉かと呼んでみたり、又はちがってもよいつもりで、丁寧に「お晩でございます」といったりする。それもしないのはもう疑われているので、すなわちいわゆるうさん臭いやつである。だからこのような時刻に

里を過ぎなければならぬ他所者(よそもの)は、見られるために提灯を提げてあるく。その前は恐らく松の火であったろう。見馴れぬ風体(ふうてい)で火も無しにあるくというのは、化け物でなくともよくない者にきまっている。そう取られても致し方のない所に、旅の夕のかなしさというものは始まっている。それがこの節は町の子供などに、もう提灯は火事か祝賀会か、涼み舟ぐらいの聯想しか浮ばなくなった。そうして又白昼にも知らぬ人同志が、互いにウソウソと顔を見てすれちがうようになった。化け物の世界も一変しなければならぬわけである。

四

この見たことのない他所者のことを、肥前の上五島などではヨシレンモンといっている。今では小児の間にしか用のない語かも知れぬが、昔の無事太平の田舎では、それが通っただけでももう一つの事件であった。私などの小さい頃には、ヨソの人という語にこの不安を託していたが、少し西へ行くとボウチという語がある。岡山県でもStrangerを意味する語を、面と向かってはボーッツアン、陰ではやはりボウチといっている。同じ呼び方は備後から安芸、あるいはもっと西へも及んでいるようだが、その起りは未だ明らかでない。越中の氷見(ひみ)地方では、以前賤しめられたある部落をボーシ、遠江(とおとうみ)ではこれをホチ・ポチ、又はポチロク、三河では下級の職工にホチと呼ばれる者があるから、事によると法師という語からの分化かも知れぬが、とにかくに子供たちには気味の悪い、普通の通行人とは全く別なものに、感じられていたことはほぼたしかで、少なくとも中国地方のボウチには、薄暮の影響があったかと思う。九州の南部は日向(ひゅうが)でも大隅(おおすみ)でも、ヤンボシといえば化け物のことである。夜分山路をあるくとときどき出逢うもの、坊主が首をくくった処には必ず出るという、ぼうとした大きな人影のような妖怪だそうで、ただの山伏もヤンボシ又ヤンブシといって通ずるが、この方は通例ヒコサンといわれている。

だから黄昏に途を行く者が、互いに声を掛けるのは並(なみ)の礼儀のみでなかった。言わば自分が化け物でないことを、証明する鑑札も同然であった。佐賀地方の古風な人たちは、人を呼ぶときは必ずモシモシといって、モシとただ一言いうだけでは、相手も答えをしてくれなかった。狐じゃないかと疑われぬためである。沖縄でも以前は三度呼ばれるまでは、返事をしてはならぬという、甚だ非社交的なる俗信があった。二度までは化け物でも呼び得るからと言ったが、無論これは夜分だけの話であろう。加賀の小松附近では、ガメという水中の怪物が、時々小童に化けて出ることがある。誰だと声をかけてウワヤと返事をするのは、きっとそのガメであって、足音もくしゃくしゃと聞えるという。能登でも河獺(かわうそ)は二十歳前後の娘や、碁(ご)盤縞(ばんじま)の着物を着た子供に化けて来る。誰だと声かけて人ならばオラヤと答えるが、アラヤと答えるのは彼奴(あいつ)である。又おまえはどこのもんじゃときくと、どういう意味でかカハイと答えるともいう。美濃の武儀郡でも狸が今晩はといって戸を開けたりすることがあるが、誰じゃと声かけるとオネダと答えるそうだ。オレダということができぬので、化けの皮があらわ

れるのである。土佐の幡多郡でも、狸には誰じゃときくと必ずウラジャガと答えるという。すなわちオラとはいい得ないのである。そこで此方でも「ウラならもとよ」と言い返してやると、もう閉口して化かすことはないという。人の至って多い都会のまん中にも、今なお「今晩は」・「どなた」・「あのわたくし」などという問答はよく行なわれ、あぶない話だがこれだけで直ちに承認される。それほどまでにわれわれは、互いの語音を記憶し合っているので、従って己をウラという地方の人々は、うっかり土佐の幡多郡へは行けなかった。しかしそんなに近づいてからでは、遁げるにも実は骨が折れる。これは先ず一つの噂であって、人々はそれよりももっと遠くから、用心していたに違いないのである。陸中大槌地方の小児等は、狐は人に化けても手頸のクロコボシがないからすぐわかる。だから狐らしいと思ったら、手を出して見せろというがよいなどというが、そんな大胆な事はいよいよできそうにもない。

五

親たちが日暮に子供の外に遊んでいるのを、気にすることは非常なものであった。子供も臆病なのから順々に、まだ蝙蝠も飛び出さぬうちから、家の近くへ近くへと戻って来るし、そうでなくとも心の内では、ご飯だよと捜しに来られるのを待っている。そういう中に僅ばかり、誰も呼びに来ぬ児がまじっていた。

　親のない児は入日を拝む

　おやは入日のまん中に

という子守唄があるが、奉公に来た者でなくとも、何か家の様子で飯時にも自分の方から、そろそろ還って行かねばならぬ児はあった。こういうのがしばしば神隠しに遭ったのである。東京では「蛙が鳴くからかえろッ」という田舎じみた童言葉が、今でも町なかに唱えられているが、田舎ではかえってそういう口合いは聴かない。佐渡の島には「あとの子は貉の子」という諺があると、中山徳太郎翁は書留めておられる。これも多分は遅れた子をからかう語であろうが、そういう不安は少しは伴のうていたと思う。小児を夕方に誘うて行く怪物を、多くの地方では隠し神といっている。沖縄人はこれを物迷いと名づけ、神という土地でも今はただ怖れるばかりである。丹波の夜久野では暗くなるまで隠れんぼをしていると、隠し神さんに隠されるといい、若狭の名田荘でも、又ずっと離れた肥後の玉名郡にも、同じ言葉がある。栃木県の鹿沼辺では、カクシンボといっている。隠れんぼは今は単なる遊戯であるが、最初或は信仰と関係のあったものかと私は想像している。秋田県雄勝郡ではカクレジョッコ、夜分隠れん坊をすると、カクレジョッコにさらわれるという点は同じである。

　神戸市ではこれをカクレババという者がある。小児は夕方に隠れんぼをすることを戒められる。路次の隅や家の行きつまりなどに、隠れ婆というのがいてつかまえて行くからという。島根県その他ではこれをコトリゾといっていた。子取りは本来は産婆のことだが、はやくそういう名を以てこの妖怪を呼んだのである。足利時代にも臥雲日件録か何かに、丹波から子

取尼という者が出て来た風説が載せられ、実際またそういう悪党もなかったとは言えぬが、今ある名称に至っては空想の産物である。出雲の子取りなぞは子供の油を絞って、南京皿を焼くために使うなどと、丸で纐纈城かハンセル・グレッツェルのようなことを伝えており、東北では現にアブラトリという名もあって、日露戦争の際にも一般の畏怖であった。東京では普通にヒトサライというわかり易い語を使うが、信州の埴科地方ではフクロカツギが通称で、大きな袋を持ってあるいているように想像せられる。これも夕方に隠れ鬼をしていると隠すのである。親が子供の「なぜ?」に答えるために、こんな急ごしらえの名前をお化けに附した例は多い。私などの幼ない頃には、泣くとやって来るのはチンチンコワヤであったが、これなどはよく考えてみると夜蕎麦売りの声色であった。名前がでたらめだから怖いのまで虚誕であったと、いうことはできぬようである。

六

この事はずっと以前、「山の人生」の中にも説いておいたが、秩父の山村では五月高麦の頃に、小児の神に隠される者が最も多く、その怪の名をヤドゥカといっていた。ところがヤドゥカとは高野聖のことであって、迂散くさい旅人には相違ないが、要するにただの人間に過ぎない。だから怖くはないとも言われぬのは、それにもかかわらず子供が隠されたからである。不思議の根源はもう少し底にあったように思う。隠し神は子どもを取り匿すからそう

名づけたと見てよいが、神戸の隠れ婆や秋田県のカクレジョッコなどは、もう一度どうしてそんな名ができたかを、考えてみなければならぬ。関東では子供が隠れ座頭に匿されるということを、半ばは戯れにだろうが近頃まで説く人があった。あるいは夜中に踏唐臼の音をさせ、又は箕を屋外に出しておくと借りて行く怪物だなどともいっていたが、さて子供を取ってどうしてしまうのかは全くわからない。つまりは子供の時々見えなくなる事実と、こんな名前とを結びつけたまでである。羽後の横手では、隠れ座頭は踵のない盲人だというが、これには害をした話はなく、かえって市の日にこの座頭を見つけると、福を授かるなどと伝えていた。北海道でも江差と松前の間の海岸に、昔は隠れ座頭という化け物が出る場処があったそうだが、見た人はもちろんなくて、ただそういう名の岩窟があるのみであった。だんだん考えて行くと、座頭と解したのは全くの思い違いで、これだけは古くからある隠れ里の口碑が、少しずつ化け物話に変って行く過程らしいのである。茨城県のどの地方かには、隠れ座頭の餅を拾えば長者になるという説があった。その餅は山野の草の間などに、ゆくりなく見出されるものであるという。そうかと思うとその隣県の芳賀郡あたりには、隠れ里の米搗きという話があり、たまたまその音を聴いた者は、長者の暮らしをすると伝えている。ちょうど鼠の国の昔話にもあるように、昔の米搗きは三本の手杵で、唄をうたって賑やかなものであった。それが地面の下などから聴えて来るのである。あるいは又シズカモチとも称して、夜中にこつこつと遠方で餅を搗くような音を、人によって聴いたり聴かなかったりする。

静か餅を搗き出されるというのは、その音がおいおい遠くなって行くことで家の衰える前兆、これに反してだんだん近く聴えると、搗き込まれたといって運が開ける。その音を聴いた人は後向きに箕を突き出すと、その箕へ財宝が入って来るとまで言われている。諸国里人談その他の近世の見聞録に、隠れ里の話は余るほど出ているが、それはことごとくめでたい瑞相とあって、人に災いしたという言い伝えなどは一つもない。しかもこまごまとした内容が忘れられて、名称ばかりが後に残ることになると、とかく人はこれをお化けの方へ引き付けたがる。信仰は世につれて推し移り又改まるが、それが最初から何もなかったのと異なる点は、こういう些細な無意識の保存が、永い歳月をへだててなお認められることである。その中でも殊に久しく消えないものは畏怖と不安、見棄てては気がとがめるという感じではなかったかと思う。もしそうだとするとこの隠し神の俗信などは、前期の状態の殊に不明に帰した場合である。私の方法以外には、これを遡り尋ねて行く道は恐らくあるまい。

七

もとより一つや二つの事実に拠って、大きな断定を下すことは許されない。ゆえに私たちは他にもこれと同じような過程をとって、進化して来たらしい化け物があるか否かを、探してみようとしているのである。一つの類例は本所の七不思議などととなえて、オイテケ堀という怪談がある。魚釣りの帰りなどに「置いて行け置いて行け」と路傍から呼びかける声ば

かりのオバケで、気がついてみると魚籠はからっぽになっていたという類の評判がある。しかしこれは江戸以外には稀にも聴かぬ話で、狐や山猫はよく携えている食物を奪うというけれども、闇の横合いから声をかけるということはない。声を掛ける各地の路の怪は、むしろ反対に持って行けというのが普通である。多くの昔話に伝わっているのは、昔正直な爺様が夜の山路を通ると、しきりに路脇から「飛びつこうか引ッつこうか」と呼ぶ者がある。あまり何度もいうので「飛びつくなら飛び付け」とつい答えると、どさりと肩の上へ重い物が乗りかかった。家へかついで戻って燈の下でひろげて見れば、金銀一ぱいの大きな袋で、これによってたちまち長者になる。それを大いに羨んで隣の慾ばり爺が、同じ時刻に同じ処を通ると例のごとく、これに答えて「引っつくなら引っつけ」というや否や、どさりと背一面に落ちかぶさったのは松脂であった云々。こういう話が僅かずつ形を変えて、今もまだ多くの女子供の記憶に活きている。

運は生まれる時から一人一人に、定まったものがあって動かせない。もしくは善心の男に授かるべき福分は、どんなに真似ようとも横着者には横取りができない。しいて真似るとかえって災いを受ける、というような教訓が昔話にはよくついてまわっている。不思議は誠に不思議だが、これには少しでも化け物の分子は伴なわぬ。従って他日そういう事件の起こりそうな夜路をあるいても、怖しくもこわくもならなかったわけである。ところがこのごとき現実は当然に夙く信じられなくなって、しかもその全部を丸々の作り話とは認めない人々が、

何とかしてその要点だけでも保留しようとするらしいのである。薩摩(さつま)の阿久根(あくね)近くの山の中に、半助がオツと称する崖がある。地名の起りは明治十年頃の出来事だというそうだが、四助と三助という二人の友だちがあった。或日四助は山にはいって雨にあい、土手の陰(かげ)みたような処に休んでいると、どこからともなく「崩(く)ゆ崩(く)ゆ」という声が聞こえ、あたりを見まわしても人はいない。四助はこの声に応じて「崩(く)ゆなら崩(く)えて見よ」というと、たちまちその土手がくずれて、沢山の山の薯(いも)が手もかけずに取れた。三助はこの話を聴いて大いにうらやみ、やはり同じ山に往って松の木の下を通ると、又どこからともなく「流る流る」という声がする。「流るるなら流れてみよ」と答えたところが、今度は松脂がどっと流れて来て、三助がからだを引き包んで動けなくなった。三助の父の半助、炬火(たいまつ)を持って山へ捜しに来て、おーいと喚(よ)ばわるとおーいと答えるので、近よって松の火をさしつけたら、たちまち松脂に火が移って三助は焼けてしまい、父の半助は驚いて足を踏みはずして落ちた。それで半助がオツと称するというのは、歴史のように見えるが、疑いなく改造せられたる昔話である。これと下半分だけ似かよった話は、濃尾の境には伝説となって多く残っている。いずれも木曾の川筋にあるから、源流はすなわち一つであろう。尾張の犬山でもヤロカ水、美濃の太田でもヤロカ水といって、大洪水(だいこうずい)のあったという年代は別々でも、この名の起りは全く同じであった。それは大雨の降りつづいていた頃の真夜中に、対岸の何とか淵のあたりから、しきりに「遣(や)ろうか遣(や)ろうか」という声がする。土地の者は一同に気味を悪がって黙っていたのに、たった一

人が何と思ったか、「いこさばいこせ」と返事をしたところが、流れは急に増して来て、見る間に一帯の低地を海にしたというのである。これと同様の不思議は明治初年に、入鹿池(いるかいけ)の堤の切れた時にもあったというが、それも一種の感染としか思えない。木曾の与川の川上では古い頃に、百人もの杣(そま)がはいって小屋を掛けてとまっていると、この杉林だけは残しておいてくれという、山姫様の夢の告(つげ)があった。それにもかかわらず伐採に取りかかると、やがて大雨が降って山が荒れ出した。そうしてこれも闇の夜中に水上の方から、「行くぞ行くぞ」としきりに声をかけた。小屋の者一同が負けぬ気で声を合わせ、「来いよー」と遣(や)り返すとたちまち山は崩れ、残らず押し流されてたった一人、この顛末(てんまつ)を話し得る者が生き残った。話はこういう風にだんだんと怖ろしくなって来るのである。

八

伝説と昔話とは、今でもごっちゃにして喜んでいる人があるが、二者の堺目(さかいめ)はかなり截然(せつぜん)としていて、説く者聴く者の態度が共に全く別であった。すなわち昔話はどうせ現世の事でないと思っているから、できるだけ奇抜な又心地よい形にして伝えようとしているに反し、伝説は今でも若干(じゃっかん)は信ずる者があるので、怪異をありそうな区域に制限する。従うて時代々々の知能と感覚はこれに干渉し、しばしば改造を加えて古い空想を排除する。化け物の話などはその好い例で、昔話の天狗、狐、鬼も山姥(やまうば)も皆少々愚(おろ)かで弱く、伝説の方ではほとんど常

に強剛で人を畏服せしめる。この点だけからいうと近代にはいって、人はかえって怯懦となり無能となったようにも見え、事実また妖魔の世界も進化しているのだが、これは要するに迷信の最後の残塁を意味するのである。かつて昔話の中に誇張せられているような奇跡が、一般に承認せられていた時代がなかったら、今ある怪談のごときものだけが、唐突としてわれわれの間に、生まれ出るわけはなかった。いわゆるヤロカ水の史実もこれを暗示しているが、これと関聯してまだ幾つかの例証がある。たとえば姿は見せないで、声だけで人を嚇すという化け物の中に、越後ではバリオン又はバロウ狐というのがいる。あの土地の人なら少しずつ皆知っていることと思うが、これが狐ときまったのはそう古いことでない。バロウは方言で「負われよう」を意味する。南蒲原郡の昔話に、昔悪い狐が晩方になると、路のほとりへ出てバロウバロウといい、村の通行人を怖がらせた。ある一人の若者があって、おれが往ってぶて来ると、皆の留めるのも聴かず、擂鉢をかぶって一人で出かけた。果してバロウバロウというから「さアばれ、さアばれ」と、縄で背中へぐるぐる巻きにして戻ってきた。狐は逃げようとして若者の頸筋に咬み付くが、堅くて歯も立たない。大きな尻尾を出して降参したけれども、構わずに焼き殺してしまった云云。先ずざっとこういう風に、昔話の方では取り扱っているのである。ところが他の一方にまだ少し信じている土地では、伝説はずっともっともらしい形で残っている。同じ越後でも古志郡上条村の、大榎の下へ出たバローンという化け物、これは狸であった。剛胆な一青年が行ってこれを負い、逃げようとするのを無

理につれて来て、仲間と共に殺して煮て食った。そうしたら食った者が皆死んでしまったなどと伝えられる。

この二通りの話は今でも全国に竝び行なわれている。たとえば岩手県遠野の昔話には、老翁が夜分山畠小屋にいて鹿追いをしていると、向いの山に美しい娘が一人、両腋に瓢簞を抱えて現われ、

おひょうらんこ・ひょうらんこ
ししっぽひの爺さまさ行ってばッぽされたい

という歌をうたう。爺はおかしくなって「そんだら早く来ておんぶされ」というと、娘はすぐに飛んで来て爺さまの背に負さった。と思ったらすぐに消えてしまって、背中には大きな黄金の塊が乗っていた。そうして爺さまはたちまち長者になってしまう。津軽の昔話では山中の荒寺へ、元気な若者が化け物退治に行く。本堂の来仰柱の下から化け物が出て来て「おぼさるおぼさる」としきりにいうので「そったらにおぼさりたがらおぼされ」と答えると、「そら負ぼさる」といって若者の背中へ、がらがらと何か来て乗っかった。それを夜が明けてから見ると残らず大判小判云々。こんなのもまたちっとも怖くはないようである。そうかと思うと羅城門の綱、美濃の渡の平季武、さては太平記の大森彦七以来、負われて甚だしく物凄かった例もだんだんにある。それがことごとく負われようと呼びかけたというのは、前の話と無関係とは思われない。三州長篠の乗越峠などでは、夕方そこを通ると「負んでく

れ負んでくれ」と呼ぶ声がするといい、近村の某という男はそういわれると急に肩が重くなり、麓の寺の灯が見える処まで来ると、急に軽くなったと思ったというような話が、つい近年の実事としても噂せられる。阿波の徳島の市外に、オッパショ石と称して名所のごとくなっていたものも、やはりこの亜流であって、オッパショはすなわち「おんぶしよう」である。諸書の記述は区々になっているが、星合茂右衛門という勇士これにあい、さらば負うてやろうとかついで来ると、だんだんに重くなるので奇怪に思って、おのれと言いさま地上に投げ付けたら二つに割れた。それ以後オッパショといわなくなったという説もあって、久しい後まで路傍に転がっていた。その真偽はともあれ、怪談は普通勇士によって、過去へ送り込まれることになっているのである。

九

ところが今一つ、諸国のオバケ話のおかしい特徴は、こうして出処進退を誤って退治せられたというやつが、暫くするとやがて又現われるという評判の立つことである。信州桔梗ガ原の玄蕃丞、芸州比治山のお三狐を始めとし、狐狸には殊にこの話が多いが、その他の化け物でも、岩見重太郎一流の壮快なる征服記が、数多く公表せられているにかかわらず、その割にはかれらの数が減少していない。これは恐らく風説が限地的のもので、互いに他を統一するだけの力がないためであろうが、又一つには昔話と伝説との対立併存、殊に退治譚

が昔話の系統の方に、属している結果かと私は思っている。記録がこの問題を解釈する資料にならぬことは、この一点からでも主張し得られる。何となればその大部分が、われわれの耳に快い人間勝利の記念塔に他ならぬからである。たとえ幽かであっても現実に感じられ、又黄昏の幻の中に描かれるものを尋ねなければ、到底化け物の由来の全面を知ることができない。それが今日はわざと忘れようという時代に臨んでいる。この点永久に不明でもよろしいと思う人以外、誰でも心せわしく国の隅々を、採訪しようとせずにはおられぬのである。

しかもその仕事は相応に面倒である。相手が多くはわれわれとは話したがらぬ人たちで、その上に各自の経験は限られている。うかとある人ある土地の談話のみによって、結論を下そうとすれば必ず誤る。比較と総合が何よりも大切なのである。そこでその資料に僅かばかりの見聞を掲げておくのだが、今日北九州の海で働く人々が、現実に畏怖して居るウグメという怪は、船幽霊のことである。不知火湾内でも、海で死んだ者の亡魂がウグメに成るといい、一方に島や汽船に化けて漁夫を迷わすと言いながら、他の一方では「あか取り」を貸せといってついて来るとき、底を抜いて貸さぬと舟を沈められるなどと、まるで東国の海坊主と同じようなことを信じている。海上の妖魔は九州沖縄方面では、もとはシキ幽霊又はソコ幽霊と呼んでいた。夜分に水の色を真白にし、あるいはいろいろの幻を見せて、船乗りの肝を冷させていた。それがいつの間にかウグメと呼ばれるようになったのが、ウブメの間違いである

ことには証拠がある。つまり化け物は名前までが変幻出没していたのである。

十七世紀の初頭になってロドリゲエスの日葡語典にも、既にウブメは産婦の死して化したるものと信ぜらるる亡霊、下にてはウグメというとあって、その語だけはもう生まれていた。これを海の怪とするに至ったもとは、出雲石見あたりで今もあるように、この赤児を抱いた精霊が、浜や渚に現われることが多かったためで、海姫磯女も恐らく同一系統の、日本ではかなり注意せらるべき、大きな未解決の問題かと私たちは思っている。少しちがっているのは壱岐島のウーメが、青い火の玉で空を飛びまわるものと言われ、肥前諫早地方のオグメが、三度手をたたくと山の峰から飛んで来るというなどであるが、その他は大体に西国も東日本と同じに、陸上のウグメは子持ちの女性である。たとえば豊後直入郡のある寺の入口では、ウグメが現われて通行の人に児を抱いてくれと頼む。抱いて遣るとやがてその子が藁打槌であったり、石であったりするものだという。東松浦の山村でも、妊婦が死ぬとウグメに成るといい、抱いて遣ると赤児はいつも石塔になるというかと思うと、又一方にはウグメには何か欲しい物があるとき、頼めば授けてくれるとも伝えている。この点は殊に自分らのおもしろいと思う所で、弘く古く尋ねて行くほど、これがむしろウグメ本来の使命であったかとさえ思われて来るのである。

一〇

山口県の厚狭郡あたりでは、同じ産女の怪をアカダカショ、又はコヲダカショともいって、古い道路の辻などへ晩方に出るものといっていた。やはりその名のごとく子を抱かせようとしたと思われる。化け物の目的が人を畏怖せしむるにあり、ないしは随筆家のいわゆる姑獲鳥のように、人間の赤児に害を加えるにあるならば、いっそ手ぶらで現われた方が仕事がし易かったろうと思うのに、必ず自分の乳呑児をかかえて、母子二人で出て来るというのには意味がなければならぬ。伊予の越智郡の某川は、折々死んだ児が包に入れて、棄ててあるという気味の悪い処だが、時として赤子の啼声が川に聴こえるのを、土地ではやはりウブメといっていた。夜ふけてこの堤を通行すると、そのウブメが出て両足にもつれるような感じのすることがある。そんな時には自分の草履をぬいで、それぞれこれがお前の親だよと投げて遣ると、一時は啼き止むともいい、又子供だけで夜釣りなどに行く時は、このウブメは決して出て来ないともいっている。つまり赤児を啼かせることが、以前はウブメの怪の要件といってもよかったのである。二百年ばかりも前に出た百物語評判という書には、ウブメは産の上にて身まかりたりし女、その執心このものとなれり。その形腰より下は血に染み、その声オバレウオバレウと啼くと申し習わせりと記してある。越後のバリオンなどとだいぶ近くなって来るが、こういって母の方が啼くのでもあるまいから、やはり子をつれて出るというのが眼目であったろうと思う。

ウブメに百人力を授かったという話は、かつて日本昔話集にも掲げておいた。頼まれて抱

いているうちにだんだんと重くなったということは、今昔物語の中にも出ているが、これをじっと辛抱していたら、ウブメがかえって来て大いに感謝し、その礼に非常な腕力を授けてくれたという類の話が、今でもそちこちにあるのである。あるいは又莫大の金銀財宝を、褒美に貰ったという話もある。そうかと聴いてわざわざウブメの赤児を抱きに、出かけて行く者もまああるまいけれども、とにかくかれの真意は人を試みるにあって、キャッと言わせるだけが目的でなかったことは、近頃までも想像していた人が多かったのである。越後のバリオンなども三条附近で伝えているのは、負われようというのを承知して負うて遣ると、それは重いものでかえってから見ると黄金の甕だったなどといい、これにも富と幸運との輸送者であったかのごとく、解している信仰はあったのである。肥後の天草島ではこれをもっと露骨に、カネノヌシなどと呼んでいる。大晦日の真夜中に、武士のような姿をして現われる怪物で、これと力競べをして勝てば大金持となる。よってその名を金の主というとある。吾妻昔物語に出て居る北上川原の化け物は、ある大胆な男が大刀を抜いてその列の一人を斫ると、ぐわらりと音がして地上に落ちこぼれたものは黄金珠玉であったというが、この話も古く各地方に行なわれている。つまりは怖れなく胆力のある者が、かねて目ざされて大福長者に取り立てられるために、こういう霊怪を以て試験せられたというまでの話であった。それをとうてい事実とは信じ得なかった人々が、いよいよ誇張しておかしい昔話を流布せしめたただけでなく、一方にはその小部分の不思議な因縁の、普通の人にもさもありなんと思わるる個

条を、大事に保存して独りで勝手にこわがっていたのである。こういう分裂はよく見ると川童にも山男にもある。信じて聴従する者には無限の恩恵を施す代りに、多数の不信者の「世の中にお化けなどがあるものか」という者は、毎度真っ青になって気を失うような目にあわせられた。それと同時に心の奥底でただ少しばかり、不思議は全くないとも言えぬと思っている人々には、双方二種の口碑が、いつまでもチャームとなって残ったのである。お化けを前代信仰の零落した末期現象ということは、私の発明では無論ない。ただわれわれは外国の学者に盲信せず、自分の現象を検し、自分の疑惑を釈くことを心がける必要を認めるのみである。こんな話ならばまだまだたくさんにあり、私は又大よそこれを順序立てて、ならべておこうという用意もある。ただ果して当世の読者の好奇心と忍耐とが、どれだけまで続くだろうかを問題とするのみである。

かはたれ時

黄昏を雀色時（すずめいろどき）ということは、誰が言い始めたか知らぬが、日本人でなければこしらえられぬ新語であった。雀の羽がどんな色をしているかなどは、知らぬ者もないようなものの、さてそれを言葉に表わそうとすると、だんだんにぼんやりして来る。これがちょうど又夕方の心持でもあった。すなわち夕方が雀の色をしているゆえに、そう言ったのでないと思われる。古くからの日本語の中にも、この心持は相応によく表われている。例えばタソガレは「誰そ彼は」であり、カハタレは「彼は誰」であった。夜の未明をシノノメといい、さては又イナノメといったのも、あるいはこれと同じことであったかも知れない。

私は今国々の言葉において、日の暮を何というかを尋ねてみようとしている。加賀（かが）と能登（のと）ではタチアイといい、熊野でマジミというなども深い意味があるらしいが、それはなお私には雀色である。信州では松本の周囲において黄昏をメソメソドキ、少し北へ行くとケソメキともいって、暗くなりかかるという動詞はケソメクである。これも感覚を語音に写す技能と言ってよいと思うが、あの地方では人が顔を合わせ難い事情などがあって、そしらぬふりを

して通って行くことを、ケソケソとして行くといっている。越中の山近くの町で、夕方のことをシケシケというのは、しげしげと人を見るというなどが元のようでもあるが、富山の附近の者は気ちがいのことをシカシカといっているから、最初はかえってシカとせぬことをシカシカといったのであろう。曠野（あらの）集の付句に、

　　何事を泣きけん髪を振おほひ
　　　しかしか物も言はぬつれなさ
　　恥かしといやがる馬にかき乗せて

これなどにはまだ少し古い感じが遺（のこ）っている。

尾張の名古屋などは、以前の方言は黄昏がウソウソであった。ウソはいつかも奥さまの会で話したごとく、近世一つの悪徳と解せられるようになる以前、ほとんど今日の文芸という語と同じに、あらゆる空想の興味を包括していたことがあった。むつかしく言えば現実の粗材、すなわちもう一歩を踏み込んでみないと、それを経験とも知識ともすることのできぬものの名であった。迂散などという漢字を宛てようとした動機が、この言葉の中にはこもっている。タチアイという言葉が夕方を意味したのも、こちらからおいおいにわかって来るかも知れない。今でも取引所の中ではよく使っているが、タチアイは本来市立（いちだち）のことであった。仲間でない人々が顔を合わす機会は、もとは交易（こうえき）の時ばかりであったゆえに、同じ用語を以ていわゆる雀色時の、人に気を許されぬ時刻を形容したのではなかったか。富山の町でも夕方

をタツチヤエモト、金沢では又イチクレとさえいっているのである。

地方の言語がおいおいに集まって来れば、もう少し説明がはっきりとすることと思うが、今でも黄昏がいかなる時刻であったかは、これだけの材料からほぼ推測し得られる。皆さんがあるいは心づかれないかと思うことは、人の物ごし背恰好というものが、麻の衣の時代には今よりも見定めにくかったということである。木綿の糸が細く糊が弱くなって、ぴったりと身につくような近頃の世になると、人の姿の美しさ見にくさはすぐ現われて、遠目にも誰ということを知るのであるが、夕を心細がるような村の人たちは、以前は今少しく一様に着ふくれていたのである。見ようによってはどの人も知った人のごとく、もしくはそれと反対に、足音の近よるを聴きながら、声をかけ合うまでは皆他処の人のように、考えられるのがケソメキの常であった。そうして実際又この時刻には、まだ多くの見馴れない者が、急いで村々を過ぎて行こうとしていたのである。

鬼と旅人とをほぼ同じ程の不安を以て、迎え見送っていたのも久しいことであった。ところがその不安も少しずつ単調になって、次第に日の暮は門の口に立って、人を見ていたいような時刻になって来た。子供がはしゃいでかえりたがらぬのもこの時刻、あてもなしに多くの若い人々が、空を眺めるのもこの時刻であった。そうしてわれわれがこわいという感じを忘れたがために、かえって黄昏の危険は数しげくなっているのである。

妖怪古意

——言語と民俗との関係

一

東北の名物は算えきれぬほどあるが、特に言語の側から考えてみるによいのは、秋田沿海部のナマハギなどが主たるものであろう。昔の年越の節であった旧正月十四日の夜深に、村の青年の中から選抜せられた者が、蓑笠で姿を隠し、怖ろしい面をかぶって鍬と庖丁とを手に持ち、何か木箱ようの物をからからと鳴らしつつ、家々にはいって来て主人と問答する。小児らがこれを懼ることは鬼神に対すると同じであるが、成人の男子はかつて自分もこれに扮したことのある者が多いゆえに、単に厳粛なる一つの儀式としてこれを視ている。南太平洋の多くの島々で、Duk-duk その他の名を以て知られている神秘行事と、細かく比較をしてみなければならぬ重要現象の一つであるが、その点は他にも発表したものがあるから今は説かない。ここにはただその名称のよって来たる所、言葉がどの程度にまで人間の心の動きを、永い後の世に痕づけているかということを、この尋常でない事実に沿うて、考えて行

こうとするだけである。

二

ナマハギは現在もなお行なわれている。秋田では通例生剥の字をこれに宛てて、ナマハゲと呼んでいる者が多く、また八郎潟の西岸の村々、男鹿の神山の麓の里ばかりに、限られたる風習のごとく思っている人もある。その推断の共に誤りであることは、比較に由っておいおいに明らかになって来るのである。ナマハゲという語の意味は、土地のこれに携わる人々にも、もう説明ができなくなっているが、僅か前まではナモミハギといっていたことは、今なお次のような唱えごとを口にしつつ、その生剥が遣って来るのを見てもわかる。

ナモミコ剝げたか剝げたかよ　庖丁コ磨げたか磨げたかよ　あずきコ煮えたか煮えたかよ

同じ県の河辺郡戸米川村女米木、又は由利郡大正寺村などにも、同じ行事があって現にこれをナモミハギといっている。そのナモミは「秋田方言」によれば、火斑すなわち長く久しく火にあたっている者の、皮膚に生ずる斑紋のことで、由利郡でそういうとあるが、他の郡にもない語ではあるまい。ヒガタは国語辞典などには全く出ていないが、東京でも知られている語であり、又ヒダコともアマメともいって通ずる。一言でいうならば働かぬ者の看板である。それをこの年の夜の怖ろしい訪問者が、庖丁を磨ぎすまして身から剝ぎ取り、小豆と

一しょに煮て食ってしまおうというのが、右の唱えごとのできた時の趣意であった。これにも若干の演戯性を含んでいるが、とにかくに以前は小さな子供ばかりを、嚇かそうとしていたのでないことは想像し得られる。

三

右のナモミが野草の名の、オナモミ・メナモミと関係があるらしいことは、夙く折口君などがこれを説いた。関係はあるかも知らぬが少なくとも直接ではなく、又今はまだ少しも証跡がない。火斑のナモミは北部の地に行くと、mがgに変ってナゴメとなっている。青森県の西津軽郡では、やはり小正月に同じ行事があって、これをナゴメタグレ、もしくはシカダハギというそうである。シカダは火斑のことでナゴメも同じもの、タクルという動詞は捲き起こすことで、剝ぐというよりも一段と適切に、惰け者の皮をむく意味をよく表現している。

これとほとんと同一の語は、又太平洋の側面にも行なわれている。例えば岩手県下閉伊郡の岩泉地方では、ナモミは火斑を意味し又ナモミタクリの行事もある。これも正月十四日の晩に、蓑に手甲蒲脛巾雪靴という装束で、面をかぶって家々を巡るのがナモミタクリであり、その仮面をナモミメンと呼んでいる。九戸郡久慈町でも小正月の天ナガミという者が遣って来るが、これは子供の行事であってホロロ・ホロロと唱えつつ家々を訪れて餅を乞うばかりで、そのナガミを剝ぎ又はタクルということは言わない。この地方的の変化も私たちには意

外ではない。成人の忘れた多くの儀式を、引き継いで保管する者はいつも児童であったからである。

同じ岩手県でも上閉伊の釜石付近では、右の小正月の訪問をナナミタクリといい、これが大ナナミと小ナナミとの二種に分かれていた。小ナナミは前の久慈地方のナガミのごとく、少年たちの餅をもらいあるく行事であり、大ナナミは男鹿のナマハギと似ていた。神楽面の中のなるべく怖ろしいのをかぶり、腰には注連縄を蓑に巻いて、家々にあばれ込むのは若者団の役目であった。このナナミタクリと秋田のナモミ剝ぎと同じ語であることは、比較によって全く疑いがないのである。嶺を一つ隔てた遠野の盆地などは、この名がもうなくなって同じ行事だけがある。箱に何かを入れてからからと鳴らして来る代りに、ここでは小刀を瓢の中に入れて、打ち振って村中をあるくということである。それをモコ又はモウコという者もあるが、本当の名はヒカタタクリであった。なまけて火にばかりあたっているような者を、ひどい目にあわそうということは中世以後の風であろうが、いつの間にかこれほど広く、互いに相知らぬ土地まで行き渡っていたのである。

四

だから今後の採集によって、なお他の地方からも似た例が出ることと思っている。能登の鹿島郡などでは、除夜の晩はアマメハギという者が来て、足の皮を剝いで行くからといって、

子供たちを早く寝させる習わしがある。もちろん半ば以上戯れであろうが、かつてこの地方にも火斑を剝ぐと称して、年越の夕に訪れた者があった痕跡には相違ない。アマメというのがまた秋田などのナモミのことだからである。同じ半島も西海岸の皆月あたりへ行くと現にまだ一部分にはこの行事が活きている。それは正月の六日年越の夜、青年等天狗の面をかぶり、素袍を着て御幣を手に持ち、従者三人槌や擂小木を手に携えて、家々を巡って餅を貰ってあるくというのが、以前のアマメハギの残形であろうかと思われる。これと同種の行事ならば、昔の年越であった小正月の宵にも、中国四国その他の田舎で、今なお到る処の村に行なわれている。ただその名称が奥羽のものと別なので、簡明に系統の同一を証し得ないまでである。甲州の平野の村々で道祖神祭といったのも、装束はこれとよく似ていたが主として新婚の家を訪い、嫁婿をいじめて酒食の料を徴発することに力をそそいだ。越後の出雲崎などは獅子の面をかぶって来るために、普通これを獅子舞とは呼んでいるが、やはり法螺貝などを吹き怖ろしい様子をして押しあるくので、小児がこれを見て閉息することは、秋田のナマハギや閉伊のモウコも同じであった。近年弊害があるので面だけは警察で禁じたといっている。そうすればついには普通の獅子舞と同じものになってしまうだろうが、その獅子舞すらも子供たちには元はこわかった。お獅子に嚙んでもらうと悪い所が治るといって、悪戯をする私たちはしばしば手をその口の中へ入れられた。その日は年越の宵ではなかったけれども、これなどもかつてはナマハギと同じ趣旨を以て、自分らの郷里の方を廻っていた名残で

はないかと思う。

五

私は前に岩手県の海沿いを旅していた際に、閉伊の大槌の宿舎において詳しくあの土地のナゴミタクリの話を聴いた。ここではこの小正月の訪問者を、モウコ、ガンボウ又はナゴミタクリといっていた。モウコもガンボウも共に畏ろしいものを意味している。ナゴミというのは何の事ですかと、知らぬ顔をして私は尋ねてみた。そうすると宿の主人の年四十余なる者が、きまじめにやはり妖怪のことでござりましょう。この辺ではナゴミは怖いものだと思っていますと答えた。火斑ある皮をタクリに来るということは、もうあの土地では言わなくなっていたのである。土地で忘れたということは、その単語のやや古いということを意味するだけで必ずしも独立の解釈を支持する力にはならない。モウコ又はモコという名称なども、近頃文字を解する者はほぼ一致して蒙古のことだというようになっているが、それは弘安の役などの歴史知識が、普及せぬ以前には考えられそうにもなく、たまたまそういう説を立てても記憶せられそうにも思えぬから、起原のよほど新しいものと見ることができる。しかも一方にはかれが人間の火斑を剝ぎに来るということも今こそこのように弘く言い伝えられているけれども、又決して最初からあった信仰ではなく、むしろこの行事が幾分か形式化して、人がその言動に劇的の興味を、少しずつ抱き始めてから後の話と思われるから事によるとその今一つ以前の名が、モコ又はモウコであったかも知れぬのである。かりにそうだとすると、こんな小さな一語でもやはりその起りを尋ねてみなければならない。それをしなければその又以前の事を考えてみる足場がなくなるからである。

六

いわゆるモクリコクリの名称は、かなり夙くから中央の文献にも見え、これをお化けのことのように、思っていた子供も少なくはなかった。それが暗々裡に東北の蒙古説を誘発したまでは意外とも言えない。われわれの不思議とするのは、むしろこの善意なる初春の訪問者が、そういう異国の兇賊の名と解せられて、何人もこれを否認せぬ時代まで、なお以前からの外形と言葉とを、ほぼもとのままで持ち続けていたことである。妖怪そのものに対する日本人の観念が、極めて目立たずに少しずつ変っていたのである。そうしてその過程を明らかにする手段が、今ではもうこの二つの幽かなる痕跡以外に、われわれのために残されてはおらぬのである。単なる学者の心軽い思いつきが、多数の信奉者を混乱させた例は、この方面にはまだ幾らもある。たとえば嬉遊笑覧その他の随筆に引用せられているガゴゼ元興寺説なども、これを首唱した梅村載筆の筆者などには、格別の研究があったわけでもないが、誰でもこれを聴いた人は覚えていて、一生に二度や三度は少年らに言ってきかせる。昔大和の元興寺の鐘楼に鬼がいて、道場法師という大力僧に退治せられたことが霊異記にある。それゆ

えに妖怪をガゴゼというのだというのは、ちょうど陸中などのモウコと同じく、もしもこの時始めてばけ物が日本に生じたというのでなければ、これに命名し又改名するのが、学者物識りの役目であったことを意味するもので、二つながらわれわれの想像し得ないことである。これは要するにそうではないようですと言い得る者の、一人も居り合わさなかった席上の説であった。言葉はそれを使用する者の地に立って考えてみなければ、少なくともその起りを知ることはできない。そうしてモウコは又婦女児童の語であったのである。

七

遠い昔の世のことは、私たちにはまだ明瞭には知れていない。人が老幼男女を通じて、一様に眼に見えぬ神霊を畏れていた時代には、多分はモノという総称があったろうということになっている。沖縄には今なおマジモノという語が行なわれ、又バケモノという語も内地にはできて遺っている。しかし実際にこれを怖がっている者の間には、別にそれよりもいちだんと適切なる語が、新たに生まれて来るのが自然であり、又必要なことでもあった。ガゴやモウコという語は現在の使用階級に取っては、必ずしも簡単に過ぎもせず、又余りに幼稚でもなかった。そうして日本のかなり広い地域にわたって、今でもまだ活きて働いているのである。

前にも一度書いたことがあるから、ここにはただ分布のざっとした色分けを述べてみよう。いわゆる化物を意味する児童語は、だいたいに全国を三つに分け、それも少しずつ改まって

来たようである。最近の実状によって言えば、モウコの方言区域は東北六県よりも大分広い。岩手秋田の二県はこの頃はむしろモッコが多く、外南部ではアモコとさえいっているが、山形県各郡はほぼ一円にモウ又はモウコである。それから仙台でも元はモウカ、福島県でも岩瀬郡などはマモウだから、わずかな変化を以てこのあたりまでは来ているのである。日本海の側では越後にモカ、出雲崎の附近は既にモモッコで、それが富山県の北部までは及んでいる。石川県に於ても金沢はモウカ、能登はモウがあり又モンモウがある。蒙古の一説を以て総括することはできなくとも、これを別個の発生と見ることは先ずむつかしかろう。

次に信州では長野の周囲からはまだ聴き出さぬが、犀川上流の盆地ではモッカもしくはモモカ、天龍水域ではモンモが行なわれ、甲州もまたモンモであるという。静岡県は内田武志君の方言新集に、静岡市以西はだいたいにモーン又はモーンコ、東部には一部にモーモーというのがあるが、主として行なわれるのはモモンガーもしくはモモンジーであって、偶然にモモンガも同一系統の語であったことを確かめ得たのである。

八

さて妖怪を何故にモウといい始めたかについては、たわいもないような話だが私の実験がある。かつて多くの青年のいる席で試みにオバケは何と鳴くかと尋ねてみたことがある。東京の児童らは全くこれを知らない。だから戯れに仲間を嚇そうとする場合に、妙な手つきを

してオバーケーといい、もしくはわざとケーを濁っていうこともある。つまり我名をなるたけこわそうに名乗るのである。ところがある信州の若者はこの問に対して、簡明にモウと鳴きますと答えた。まるで牛のようだなというと、他に鳴きようがあろうとは思わなかったといった。それから気をつけているのに、子供がモウと唸って化物の真似をしているのをおりおり見る。これは誰でも試みることのできる実験で、もし東北のモウコが他の声で鳴くという例が幾つか現われたら、私の推定は覆えることになるのだが、私だけはこれが鳴き声というのもおかしいがかれの自らを表示する声から、そのまま附与せられた名称であって、犬をワンワンといったのと同じ態度だと思っている。

そのワンワンを又化物の名としている地方がある。たとえば筑前の博多ではオバケの小児語がワンワン、同じく嘉穂郡ではバンバン、肥後玉名郡でもワワン、薩摩でも別にガモという語はあるが、小児に対してはワンを用い「ワンが来ッど」などといって嚇すそうである。こういう土地でも実験は容易にできる。もし化物がワンといって現われるのでなかったら、こういう名称は新たに生まれることはできなかったろう。従って歴史を奈良朝に托せんとしているガゴゼなども、一応はやはりかれが出現の合図の声に拠って、起こったものと見ておいてその当否を究むべきである。ガゴゼは自分らの郷里播磨などで、以前はそういったということであるが、近世はもうなくなっている。京都でも文献には見えて今はそうでなく、本元と言わるる北大和もただガンゴである。ただしこのゼという接尾辞は、東北のコなどとは

違って、偶然に附着したものではないように思われる。四国では阿波が一般にガゴジ又はガンゴジであり、伊予にはガンゴといい又ガガモもあるが、周桑郡の児童語には鬼をガンゴチというのがある。それからずっと飛び離れて、関東の方でも水戸附近がガンゴジ又はガンゴチ、これと隣接した下野芳賀郡もガンゴジーである。理由のない附会にもせよ、元興寺説の起こったのは、始めはこれに似よった音をもって、呼ばれていたことを推測せしめる。

九

化物をガゴ又はこれと近い音で呼ぶ区域は、ほとんど完全に前に掲げたモウコ区域と隔絶している。たった一つの例外らしく見えるのは越中であるが、これとても多分は対立であって、一地の二つの言い方が併存しているのではなかろうと思う。そうしてこの地方は雀、蟷螂又蝸牛の方言でも見られるように、不思議に異種の語の入りまじっている処である。大田君の富山市近在方言集によれば、幼児を嚇す語に「泣くとモーモに嚙ましてやるぞ」というとあるが、それは新川郡の平野でのことらしく、五箇の山村では別に子供を威すのにガーゴンという語がある。すなわちこの県の奥地だけに、ほぼ孤立してこの系統の分布を見るのである。それから又ずっと飛び離れて、関東では常野境上のガンコジがあり、その南に継いで新治稲敷等の諸郡のゴッコがある。これがどのくらいの版図を持つかはまだ調べられておらぬが、とにかくに現在はそう広く及んではいないようである。注意すべき類似はかえって遠

方にある。即ち山口県では、山口も下関も、共に鬼やおばけがゴンゴであった。石見ではこれをゴンという児童もあるが、別にゴンゴジー又はゴンゴンジーというのも怖ろしい人又はモノのことだから、つまりこの地方と常陸の一角とは一致しているのである。そうしてこの方は九州の北部、及び四国島の北東二面とも接続している。阿波のガゴジのことは既に述べた。讃岐はまだ当ってみないが、伊予にもガンゴチがあり、又喜多郡などはガンゴであって、ただその南の宇和四郡だけが、第三のガガモ系に属している。九州の方では筑前のバンバンなどがあるが、それを飛び越えて肥前は佐賀藤津の二郡がガンゴ又はガンゴウ、対馬でも同上、肥後は南端の球磨郡がガゴウで、嶺を越えて日向の椎葉村がガゴもしくはガンゴ、大分県にもまた処々にガンコがある。起原が一つでなかったならば、これまでの弘い一致は現われまいと思う。

一〇

そこでなおこのついでに問題とすべきことは、これと東日本一帯のモウコないしはモモンガと、まるまる縁無しに別々に生まれたか否かであるが、私はやはり始めは一つだと思っている。これも当然に実験から入って行くべきであるが、おそらくは化物はそういう声を発するものと、思っている子供又は子供らしい人が、今でも機会あるごとに見出し得られると思う。それがもし違っていたら、すなわち私の仮定は覆るのだが、そんな心配は先ずなさそ

うである。現在のおばけを意味する方言には、別に第三種のgmの二音を組み合わせたものがあって、その分布の状態はいちだんと広汎であり、しかもこれを調理する母音の傾向が、かなり顕著に前二者と共通している。これを両者の中間において考えると、変化の道筋は大よそ判って来るように思われるからである。少し事々しいが他日追加の便宜のために、表にしておくことを許されたい。私の手帖に抜き出してあるのは、今のところ次の十余例に過ぎぬが、これはおいおいに増加する見込みがある。

地方	語
鹿児島県	ガモ、ガモジン（ガゴ）
出雲	ガガマ
加賀河北郡	ガガモ（モウカ）
備後福山	ガモージー
伊予西宇和郡	ゴガモウ
伊勢宇治山田	ガモシ
長崎市	ガモジョ（アモジョ）
伯耆東伯郡	ガガマ
飛騨一円	ガガモ
伊予喜多郡	ガガモ（ガンゴ）
紀州熊野	ガモチ

右の諸例の中で備後や長崎のごとく、語尾に元興寺と同様の一音節を添えてあるものの多いのは、私には意味のあることに思える。われわれのオバケは口を大きく開けて、中世の口語体に「咬もうぞ」といいつつ、出現した時代があったらしいのである。その声を少しでもより怖ろしくするためには、わが邦ではkをg音に発しかえる必要があり、又折としてはそのg音をままなく（吃る）必要もあったかと思われる。それが今日のガモ又はガガモの元だ

ということは、昔を考えてみれば必ずしも無理な想像ではない。私などの幼ない頃の言葉では、妖怪はバケモンであり又ガゴゼであったが、なお昔話中の化物だけは、やや古風に「取ってかも」といいつつ現われた。カムという言葉が端的に、咬んでむしゃむしゃと食べてしまうことを意味したのである。その用法は南の島にはまだ残っている。これが嚥下の動作までを包含せぬ動詞となってのちも、なお努めて日常の「食う」とか「たべる」とかいう語と、差別した語を使おうとしたことは、関東でよく聞く蚊がクウや、犬がクライツクなどと異曲同工と言ってよかろう。

一一

鳥や獣のような言語のまるでちがったものの声でも、われわれは何かこちらの言葉で物を言っているように聴こうとした。梟は糊つけ乾せ、画眉鳥は一筆啓上仕り候というように解せられていた。まして化物は人間の幻を以てこしらえたもの、それが最初から意味のない声を出して来るはずはなかったと思う。しかも彼らの要求は、以前はそう過大又複雑なものでなかったのが面白い。「かもう」は多分猛獣などの真似で、実際にその意図があったのでなく、やはり「小豆が煮えたか」と同様に、相手が慴伏し畏怖するを以て目的とする恫喝の語であったのであろう。その語義がいったんは不明になって、かえって語感の展開して来たことは、今ある小正月のナマハギやナゴミもよく似ている。咬もうがモウとなったのはいわ

ゆるアクセントの問題である。東北の方では西南とちがって第一音節のgaに力が入らなかったものと思われる。そうなると蒙古人のことだという新説も生まれ易く、又は亡霊をモウコンという新語を案出し得られた。化物と亡霊とは本来は同類でないのだが、それがモウと鳴いて出て来る奥州や信州では、亡魂と解せられている一種中間の化物が加わっている。そうして冥界の危険は世と共に痛烈になった。この混同は日本の固有信仰のために、一般に有害であったと言ってよい。

一方この邦の言語学の側からいうと、これには又他では得られない幾つかのよい史料を含んでいる。陸中の上閉伊などでは、お化けをモウコという語と併立して、別に西国流のガンボウという名も伝わっている。第二音節のモウに力を入れた発音のし方も、最初からのものではなくて、かつてはガの音に重きをおいていた単語が、ここにもあったことを想像せしめるのである。ガゴウという語はやや古く文献に録せられているから、これが今辺土に遺っているガモウなどの、一つの音訛の例だということは信じ得ぬ人があるかも知らぬが、私の説明は無造作だ。一方は日本語として少し意味があり、他の一方は無意味だ。人の空想から生まれた語ならば、少しでも意味のある方が前のもので、それが慣用によって約束せられた後でないと、他の一方の転訛は起こり得まいと思うのである。ガゴゼ、ガンゴジ等の不可解なる接尾語が、諸処に残っているのもその痕跡だと見られる。だから古く知られているゆえに正しい元の語だとも言われぬと同時に、音韻の訛りは常にある傾向に沿うて進むとしても、

それにはしばしば社会的原因とも名づくべきものが参与して、単なる生理作用だけではその過程を解釈することが不可能だということ、こういう相応に重要なる定理も、ゆくゆくはこれから導いて来ることができそうである。つまらぬ小さな問題のように見えて、その実は決してそうでない。

一二

オニという日本語の上代の意義は、すこぶる漢語の「鬼」とは異なっていた。これを対訳として相用いた結果が、いつとなくわれわれのオニ思想を混乱せしめたことは、かつて白鳥博士なども力説せられたことがあった。それと同様に方言のモウコ、ガゴジ、ガモジョ等を、ただちに標準語のお化け又は化け物に引き直すことは即ち又常民信仰史の眼に見えぬ記録の数十ページを、読まずにはね飛ばしてしまうような不安がある。方言は早晩消滅すべきものであろうが、残っているうちは観察しなければならぬ。そうしてその意義を尋ねるのが学問だと私は思う。いわゆる、お化け話の民間に伝わっているものは、今でもまだ若干の参考をわれわれに提供する。人に恨みを含み仇を復せんとする亡魂は別として、その他のおばけたちは本来は無害なものであった。こわいことは確かにこわいが、きゃアといって遁げて来れば、それでかれらの目的は完了したように見える。単に化物などというものはこの世にないはずといったり何がこわいなどと侮ったりする男が、ひどい目にあわされるだけである。そうして時あっては産女が子を抱いていた者に大力を授けたり、水の精が約束を守る者に膳椀の類を貸してくれる等、素直にかれが威力を認めその命令に従順である者に大きな恩恵を付与したというのみならず、さらに進んでは妖怪変化と見えたのは、実は埋もれたる金銀財宝であったという話にまで発展しているのである。人をそこなうために現われるのでなかったことだけはよくわかる。目的は要するに相手の承認、ないしは屈伏にあった。それゆえに通例は信仰の移り変りの際に、特にこの種の社会現象が多いものと、昔からきまっているのである。東北諸処の田舎の年の夜の訪問者が、家主も謹んで迎え、又これに携わっている若者も、厳粛なる好意を抱いて演じているにかかわらず、単に火斑剝離者の名を以て知られ、もしくは化け物と共通の名を以て呼ばれているということは、これをやや零落せんとする前代神の姿として、始めて解し得る不思議である。彼らはただ自分の威力を畏れ又崇めなかった者をのみ罰せんとしていたのである。だからその表現には恫喝があった。取って咬もうとどなりつつその実は咬まなかった。神秘に参加せざる未成年者のみがそれを知らぬゆえに大いにふるえたのである。しかも信仰はいよいよ変化して、今では児童の最も幼ない者の間に、わずかに残塁を保つに過ぎないのに、他の一方には何とかしてお化けを怖ろしい形に作りかえて、いつまでもこれを信じようとする者が絶えない。おばけの話の年と共にあくどくなるのは、考えてみるとおもしろい人心である。

附録

お化けを意味するわれわれの方言が、土地によって始終変っていたらしいことは、今ある複合語の中からもこれを窺うことができる。たとえば東京は現在一様にオバケというが、なお関西のアカンベを、ベッカコウという語だけは残っている。ベッカコウは即ち目のガゴで、わざと目を剝いてこわい顔になることである。下野の河内郡などでは、瞼に腫物ができて赤く脹れているのをメカゴもしくはメカイゴという。これも眼だけのガゴであろうと思う。仙台のお化けの声はモウカであるらしいが、なお隠れ鬼の遊戯はカクレカゴであり、水に住む源五郎虫をガムシといったと浜荻に見えている。この源五郎虫は恐らく「田がめ」の誤りであろう。この虫の水中の挙動が似ていると見えて、これを妖怪と同じ名で呼ぶ例は、備前丹後その他の地方にある。鹿児島県の種子島などでも今では妖怪をガモというようになっているらしいが、この田鼈だけは東北流にタモッコウというそうである。なおこのちなみにいうと、タガメのガメも石亀のことでなく、やはり水中の怪物の名として、かなり広い区域に行なわれているから、あるいはガモ、ガガモの方から導かれたものかも知れぬ。

次に氷柱を豊前あたりでモウガンコというのも、同じ言葉の適用かと思うが、北九州には今はモウという語は消えかかっている。植物の畸形をさしてバケバケなどということは東

京付近でもおりおり聴く語であるが、その中で最も普通になっているのは薯蕷の子のムカゴである。加賀は今日はモウカの地域であるが、零余子のみはゴンゴといい、越中も各郡ともにガゴジョ、飛驒もガゴジョであって、ただ袖川村などがガモンジョになっている。九州も豊後筑後肥前などがすべてカゴで、浮羽郡吉井だけはヤマイモカンゴ、壱岐島はイモカゴ、広島県の一部ではマカゴといっている。ムカゴの「ム」は多分芋であろう。あるいはヌカゴともいって古くから文筆にも現われているが、本来はお化けのガゴから出て、もう一度優雅なk音に復したものなることは、他の諸例から類推しえられる。怪物をかつてガゴといっていた地方は、今よりも広かったものと思われる。岩手県のモウコ地帯にガンボウのまじっているのも、やはりこの地方にある時代の変化があったことを想像せしめる。

おばけの声

一

オバケ研究の専門雑誌が、最近に盛岡から出ようとしている。又宮崎県の郷土志資料には、あの地方の妖怪変化の目録が、先々月から連載せられている。ばけ物はもちろん至って古い世相の一つではあるが、それを観ようとする態度だけがこの頃やっとのことで新しくなり始めたのである。私たちの見た所では、人が今日の問題などと珍しがるものでも、たいていは以前何度となく、だれかが考えてみたものばかりだ。今頃だしぬけに現われてくるという問題は、もうこの人生にはない方が当り前である。単にこれまで気のつかなかった実例、それを機縁として新しく見直そうとする心持、今一つはむしろ久しい間ほったらかしていたという事実が、次々に問題を新たにしてくれるのである。この意味からいうと、ばけ物なども大いに新しい部類に属する。たとえばわれわれがこれに興味を抱いているというと、すぐ「あるものかないものか」を問おうとする人が、まだ世間には充満しているのである。こうした一方からしか問題に近よることのできぬ人たちが、いわば現代のためにいろいろのお

もしろい題目を貯蔵しておいてくれたので、新たな怪談と観察との学問が、ちょうど起こらずにはおられぬように世の中はなっている。

二

最初まだ当分のうちは、いわゆるまじめな人々は相手になってくれぬかも知れない。しかし気楽で時間の多い子供とか年寄とかが、仲間に入ってくるならばそれで結構である。何でもできるだけ単純な目標、ことにもっとも実際的なる毎日の言葉からたどって行くのが便利なようである。私はある時同志の青年を集めて試みに「ばけ物は何と鳴くか」を比較してみたことがあった。東京などの子供は戯れに人をおどす時、口を大きく開き尖らせた十本の指を顔のそばへ持って来て、オーバーケーとうなるように発音するのが普通のようだが、これは近頃になっての改造かと思われる。というわけはオバケという日本語は、そう古くからのものでないからである。関東の近県から、奥羽北陸の広い地域にわたって、化物の鳴き声は牛のように、モーというのだと思っている人は多い。それがどういうわけかは考えてみた人もあるまいが、大よそ人間のしたりいったりすることに理由のないものがあろうはずがない。もし今以てそれを解説しあたわずとすれば、すなわちその根源にはいまだ究められざる事実があるのである。

多くの動物の名がその鳴き声からつけられているごとく、オバケもモーと鳴く地方では、

たいていは又それに近い語を以て呼ばれている。例えば秋田ではモコ、外南部ではアモコ、岩手県も中央部ではモンコ、それから海岸の方に向かうとモッコ又はモーコで、あるいは昔蒙古人を怖れていた時代に、そういい始めたのだろうという説さえある。しかし人間の言葉はそんな学者くさい意見などには頓着なしに、土地が変ればどしどしと変化して行っている。今日私たちの知っているだけでも、まず福島県の南の方ではマモウ、越後の吉田ではモッカ、出雲崎ではモモッコ、越中の入善でもモモッコ、加賀の金沢ではモーカ、能登にはモンモだのモウだのという呼び方がある。信州でも伊那は普通にモンモであるが南安曇の豊科ではモッカといい、松本市ではモモカといっている。これから考えてみると、江戸で「むささび」のことをモモングヮ、それから一転して一般に野獣の肉をモモンジーなどといったかも知れぬ。上総の長生郡などでは、今でもモンモンジャといえば化け物を意味しているのである。

三

オバケの地方名は、大げさにいうならば三つの系統に分かれている。その一つは九州四国から近畿地方までに割拠するもので、主として、ガ行の物すごい音から成り立っている。鹿児島県でガゴ・ガモ又はガモジン、肥後の人吉辺でガゴーもしくはカゴ、日向の椎葉山でガンゴ、佐賀とその周囲でガンゴウ、周防の山口でゴンゴ、伊予の大洲附近でガガモ又はガンゴ同じく西条でガンゴーというなどがその例である。

対馬では子供が両手の小指を以て目の端を張り、こわい顔をすることをタンゴウスルといい、又はガンゴメともいうそうである。これで思い当たるのは東京などのベッカッコウも、本来は又目ガッコであって、即ちばけ物の顔という意味であったらしい。それから小児の遊びのカゴメカゴメなども、「いついつ出やる、夜明けの晩に」というからは、やはりオバケを囲んで伏せておく仕草であったのかも知れない。化け物をガンゴという言葉は奈良にもあれば、越中でも富山の周囲や五箇山ではガーゴンといい茨城県などにもゴッコ又はガゴジという語が残っている。それを大和の元興寺の昔話から、始まったように称えていたのは、本を読んだ人たちだけのひとり合点であった。

次に第三の種類はモーとガンゴとの結合したもので、九州でも薩摩のガモだの長崎のガモジョだのがある他に、紀州の熊野でガモチといい、飛驒は一般にガガモといっている。私の想像ではこれが多分は古い形であって、他の二つはそれから分かれて出たもの、即ち最初にはかれ自身「かもう」と名乗って、現われてくるのを普通としていたために、それが自然に名のようになったのかと思う。人が既にオバケを怖れぬようになって、「かもう」ぐらいではこわさがたらず、「取って食おう」とでもいわないと、相手がオバケだとも思わぬようになってしまった。そうしてカモーを無意味なる符号のごとくに、自分勝手に変形して使っていたことはちょうどわれわれの固有名詞も同じであった。しかもただこれだけの単に一語からでも、なおばけ物に対する以前の感覚は推測しえられるのである。

（附　記）

家庭朝日という雑誌は、昔朝日新聞で新聞購読者に無料で配布したもので、編集長は津村秀夫氏だった。今は保存している人も少なく、朝日新聞社にすらないということである。幸い奈良の水木直箭氏の手許にあり、筆写させてもらったが、きけば水木氏も八戸の夏堀謹二郎氏より送られたものとか、「妖怪古意」と内容が重なっているが、いろいろの思い出のため、加えることにした。

幻覚の実験

これは今から四十八年前の実験で、うそは言わぬつもりだが、余り古い話だから自分でも少し心もとない。今は単にこの種類のできごとでも、なるべく話されたままに記録しておけば、役に立つという一例として書いてみるのである。人が物を信じ得る範囲は、今よりもかつてはずっと広かったということは、こういう事実を積み重ねて、始めて客観的に明らかになって来るかと思う。

日は忘れたが、ある春の日の午前十一時前後、下総北相馬郡布川という町の、高台の東南麓にあった兄の家の庭で、当時十四歳であった自分は、一人で土いじりをしていた。岡に登って行こうとする急な細路のすぐ下が、この家の庭園の一部になっていて、土蔵の前の二十坪ばかりの平地のまん中に、何か二三本の木があって、その下に小さな石の祠が南を向いて立っていた。この家の持主の先々代の、非常に長命をした老母の霊を祀っているように聞いていた。当時なかなかいたずらであった自分は、その前に叱る人のおらぬ時を測って、そっとその祠の石の戸を開いて見たことがある。中には幣も鏡もなくて、単に中央を彫り窪めて、

径五寸ばかりの石の球が嵌め込んであった。不思議でたまらなかったが、悪いことをしたと思うから誰にも理由を尋ねてみることができない。ただ人々がそのおばあさんの噂をしている際に、いつも最も深い注意を払っていただけであったが、そのうちに少しずつ判って来た事は、どういうわけがあったかその年寄は、始終蠟石のまん丸な球を持っていた。床に就いてからもこの大きな重いものを、撫でさすり抱え温めていたということである。それに何等かの因縁話が添わって、死んでからこの丸石を祠にまつり込めることになったものと想像することはできたが、それ以上を聴く機会はついに来なかった。

今から考えてみると、ただこれだけの事でも、暗々裡に少年の心に、強い感動を与えていたものらしい。はっきりとはせぬが次の事件は、それから半月か三週間のうちに起こったかと思われるからである。その日は私は丸い石の球のことは、少しも考えてはいなかった。ただ退屈をまぎらすために、ちょうどその祠の前のあたりの土を、小さな手鍬のようなもので、少しずつ掘りかえしていたのであった。ところがものの二三寸も掘ったかと思う所から、不意にきらきらと光るものが出て来た。よく見るとそれは皆寛永通宝の、裏に文の字を刻したやや大ぶりの孔あき銭であった。出たのはせいぜい七八個で、その頃はまだ盛んに通用していた際だから、珍しいことも何もないのだが、土中から出たということ以外に、それが耳白のわざわざ磨いたかと思うほどの美しい銭ばかりであったために、私は何ともいい現わせないような妙な気持になった。

これも付加条件であったかと思うのは、私は当時やたらに雑書を読み、土中から金銀や古銭の、ざくざくと出たという江戸時代の事実を知っていて、そのたびに心を動かした記憶がたしかにある。それから今一つは、土工や建築に伴なう儀式に、銭が用いられる風習のあることを少しも知らなかった。この銭はあるいは土蔵の普請の時に埋めたものが、石の祠を立てる際に土を動かして上の方へ出たか、又は祠そのものの祭のためにも、何かそういう秘法が行なわれたかも知れぬと、年をとってからなら考える所だが、その時は全然そういう想像は浮かばなかった。そうして暫らくはただ茫然とした気持になったのである。幻覚はちょうどこの事件の直後に起こった。どうしてそうしたかは今でも判らないが、私はこの時しゃがんだままで、首をねじ向けて青空のまん中より少し東へ下ったあたりを見た。今でもあざやかに覚えているが、実に澄みきった青い空であって、日輪のありどころよりは十五度も離れたところに、点々に数十の昼の星を見たのである。その星の有り形なども、こうであったということは私にはできるが、それがのちのちの空想の影響を受けていないとは断言しえない。ただ間違いのないことは白昼に星を見たことで、（その際に鵯が高い所を啼いて通ったことも覚えている）それを余りに神秘に思った結果、かえって数日の間何人にもその実験を語ろうとしなかった。そうして自分だけで心の中に、星は何かの機会さえあれば、白昼でも見えるものと考えていた。後日その事をぼつぼつと、家にいた医者の書生たちに話してみると、彼らは皆大笑いをして承認してくれない。いったいどんな星が見えると思うのかと言って、

初歩の天文学の本などを出して来て見せるので、こちらも次第にあやふやになり、又笑われても致し方がないような気にもなったが、それでも最初の印象があまりに鮮明であったためか、東京の学校に入ってからも、何度かこの見聞を語ろうとして、君は詩人だよなどと、友だちにひやかされたことがあった。

話はこれきりだが今でも私はおりおり考える。もし私ぐらいしか天体の知識をもたぬ人ばかりが、あの時私の兄の家にいたなら結果はどうであったろうか。少年の真剣は顔つきからでもすぐにわかる。不思議は世の中にないとはいえぬと、考えただけでもこれをまに受けて、かつて茨城県の一隅に日中の星が見えたということが、語り伝えられぬとも限らぬのである。その上に多くの奇瑞には、もう少し共通の誘因があった。黙って私が石の祠の戸を開き、又は土中の光る物を拾い上げて、独りで感動したような場合ばかりではなかったのである。信州では千国の源長寺が廃寺になった際に、村に日頃から馬鹿者扱いにされていた一人の少年が、八丁のはばという崖の端を遠く眺めて、「あれ羅漢さまが揃って泣いている」といった。それを村の衆は一人も見ることができなかったにもかかわらず、さてはお寺から外へ預けられる諸仏像が、ここへ出て悲歎したまうかと解して、深い感動を受けて今に語り伝えている。あるいは又松尾の部落の山畑に、聟と二人で畑打をしていた一老翁は、不意に前方のヒシ（崖）の上に、見事なお曼陀羅の懸かったのを見て、「やれ有難や松ガ尾の薬師」と叫んだ。その一言で聟は何物をも見なかったのだけれども、たちまちこの崖の端に今ある薬師堂が建

立せられることになった。この二つの実例の前の方は、あらかじめ人心の動揺があって、不思議の信ぜられる素地を作っていたともみられるが、後者に至っては中心人物の私なき実験談、それも至って端的に又簡単なものが、ついに一般の確認を受けたのである。その根柢をなしたる社会的条件は、甚だしく、幽玄なものであったと言わなければならない。

奥羽の山間部落には路傍の山神石塔が多く、それがいずれもかつてその地点において不思議を見た者の記念で、たいていは眼の光った、せいの高い、赫色をした裸の男が、山から降りて来るのに行き逢ったという類のできごとだったということは、遠野物語の中にも書き留めておいたが、関東に無数にある馬頭観音の碑なども、もとは因縁のこれと最も近いものがあったらしいのである。駄馬に災いするダイバという悪霊などは、その形が熊ん蜂を少し大きくしたほどのもので、羽色が極めて鮮麗であった。この物が馬の耳に飛び込むと、馬は立ちどころに跳ねあがってすぐ斃れる。あるいは又一寸ほどの美女が、その蜂のようなものの背に跨がって空を飛んで来るのを見たという馬子もある。不慮の驚きに動顛したとは言っても、突嗟にそのような空想を描くようなかれらでない。すなわち馬の急病のさし起こった瞬間の雰囲気から、こんな幻覚を起こすような習性を、既に無意識に養われていたのかも知れぬのである。

わが邦の古記録に最も数多く載せられていて、しかも今日まだ少しも解説せられていない一つの事実、即ち七つ八つの小児に神が依って、誰でも心服しなければならぬような根拠あ

るいろいろの神秘を語ったということは、この私の実験のようなものを、数百も千も存録して行くうちには、まだもう少しその真相に近づいて行くことができるかと思う。「旅と伝説」が百号になったということが、ただ徒然草のむく犬のようなものでないのならば、今度は改めて注意をこの方面に少しずつ向けて行くようにしたらよかろうと思う。いわゆる説明のつかぬ不思議というものを、町に住んでいて集めようというのはやや無理かも知らぬが、それでも新聞や人の話、又は今までの見聞記中にもまだ少しずつは拾って行かれる。実は私もだいぶたまっているつもりだったが、紙に向かってみると今はちょっとよい例が思い出せない。そのうちにおりおり気づいたものを掲げて、同志諸君の話を引き出す糸口に供したいと思っている。

川童の話

以前数年間鹿児島におられた石黒忠篤氏は、鳥の声にくわしい人であるが、親しくこのヒョンヒョンを聴いてその話をせられたことがある。その説ではムナグロ（胸黒？）という大きな千鳥の類の群だということである。水虎考略後篇の巻三に、日向高鍋の某村に於て、土堤普請の番小屋の側を、夜分になると水虎数百群をなして通る。ある人是非その姿を見んと思い、樹蔭に隠れ窺いたれどもどうしても見ること成らず。次の夜鉄砲を持参し程を見定めて一発すれば忽然として声を潜めた。水虎の鳴声は飄々と聞こえる。日州で川童をヒョウスへと呼ぶのはこのためだとある。尾花石黒二君の説と合致しているが、ヒョウスへの称呼の由来に至っては未だただちには信じがたい。

右の水虎考略は後篇の方はあまり世に流布しておらぬ。第三巻の新聞雑記というのは天保年間にある書生が下手な漢文で筆録した三十篇の川童話である。このついでにその中から二三耳新しい箇条を書き抜いておこう。（一）肥後の天草には川童多く住み常に里の子供を海へ連れて行き水泳を教えてくれる。その言う通りにすれば何の害もせぬが、機嫌を損じると

甚だ怖しい。子供らはときどき親に頼み川童を喚んでご馳走をする。その姿小児らの目には見えて父母には見えず。ただ物を食べる音ばかりして帰る時には椀も茶椀も皆からである。これは佐賀の藩士の宅へ奉公に来ていた天草の女中の談。（二）佐賀白山町の森田藤兵衛なる者かつて対馬に渡り宿屋に泊っていると、夜分に宿の付近を多人数の足音がして終夜絶えなかった。翌朝亭主にどうしてこう夜歩きする者が多いのかと聞くと、あれは皆川童です、人ではありません。川童は昼は山におり夜は海へ出て食を求めるので、このごとく多くいても別に害はせぬものだと語った。（三）肥前では人の川童のために殺さるる者あれば、その葬には火を用いしめず。衣類から棺まで白い物を用いさせぬ。これを黒葬といい、黒葬をすればその川童は目つぶれ腕腐って死ぬものだという。（四）佐賀高木町の商家の娘十一二歳の者、寺子屋の帰りに隣家の童子に遇い、観成院の前の川で遊ぼうと約束しておいて、家へ戻って食事をし出て行こうとする時、親がこれを聞いて用心のために竈の神様を拝ませ、荒神様守りたまえとその子の額に竈の墨を塗って出した。約束の童子つくづくと娘の額を見て、お前は荒神の墨をいただいて来たからもう一緒に泳ぎたくないといって憮然として去ったとある。それで川童であることが顕われた。この本にはまだ数十件の川童の話が載せてある。

川童の渡り

こういう題を掲げても、川童を鳥だと思っている人があるわけではない。むしろある鳥類を川童だと思っている者のあることを報告しておきたいのである。私はもう大分以前に、宮崎県の耳川流域でこの話を始めて聴いたのだ。が薩摩の川内川筋でも同じことをいうそうであり、南九州ではそちこちの人がこれを知っている。川童は秋の末から冬のかかりの、雨などの降る暗い晩にヒョンヒョンと細い鼻声見たような声で鳴いて浜の方から山手へ、空中を群をなして飛んで行くものだそうな。それから春さきやや暖かくなった頃、やはり同じような夜中に同じ路筋を逆に、山から海岸へ啼いて出て来る。だからガアラッパというものは冬だけは山に入って住んでいる者に相違ないという類の話で、今でも聴こうとさえすれば、随分真顔になって教えてくれる人があると思う。

真暗な晩だというから、無論姿を見た人はないのである。それを川童の渡りと推断するには、もう一つ別の根拠がなくてはならぬ。だが、信じて聴こうとする者に取っては、古いということが実は一つの証拠なので、なるほど近頃になって始めてそんな事をいい出したとし

ても、誰も耳をかそうとする人がないことだけはたしかである。ところが一方には羽の音がするという人もある。そうして羽のある川童(かっぱ)というのは聴いたこともないのだから、疑う人人はそれは一種の鳥であろうというのだが、ただ一種の鳥だけでは、私らでもまだ合点ができなかった。自分の友人では、石黒忠篤君などがその声を聴いている。そうして誰かその道の人に、あれはムナグロという千鳥の群だということを教えられたといっている。この点を私はもう一度、「野鳥」の問題にしてみたいのである。果してムナグロがそんな声で啼き又その季節にそういう去来をする習性をもつものかどうか。私は絵でより外その鳥をじっと見たことがないのだから当然その声は耳にしていないのである。川口君を始め九州の鳥に明るい人がこの会には多い。ムナグロならそういう誤解を引き起こすかも知れぬと、いう程度にまでもこの問題を進めておきたいのが私の願いである。

話はこれだけだが前以てお礼のしるしに、私の方でも判っていることをご参考にのべておこう。鳥と人間との交渉が目標なら、こんな話でもまだ野鳥の会の領内だと思う。東京付近の人に考えさせると、川童がそのように群をなして行動するということが既に一つの疑問であろう。この淵には居るという話があってもたいていは一頭で、画に描いても又泉君芥川君が小説に書いても皆一つですませている。ところが朝川善庵の随筆に出ている常陸(ひたち)の海辺の川童のごときは五頭か六頭か数は忘れたが、だいぶかたまって漁夫の眼にふれたといっている。それから北へ行くと化けて女の所へ来たなどというのは単独だが、出逢って見たという

例は群になっている。寂しい水辺のよく川童の出て遊ぶ砂原には朝方通って見ると無数に足の跡があり、それが小児の足の如く又水鳥の趾痕(あしあと)のようであったともいっている。川童が出て来て角力(すもう)を取ろうといった話は東日本に少なく西へ行くほど多いが、これも最初に出て来るのは一頭で、勝ってほうり投げても、わざと負けてやっても、後から後から仲間が加わって来るという。姿を隠して始めから控えているらしいのである。九州の川童も人間を試みに来る時にはやはりこちらのように子供などに化けて一人で現われるのだが、いったん手に合わぬと見るとどこからともなく多数の同勢を寄せ集めて来て、手取り足取りして相手を閉口させなければ止めない。それでいて常は水の底に一ぱいいても、まるで海月(くらげ)などのように透きとおって少しも見えぬといい、あるいは又形を変えることが自在で、馬の蹄(ひづめ)で作ったほどの小さな水溜りにも、千匹ぐらいは必ず隠れているという話もある。そんな都合のいい動物というものがある気づかいはない。強いか強くないかは別問題として、こういう出方をするからには化け物にきまっている。それが土地によっては数の力を以てわれわれを威迫するかのごとく、以前から考えられていたのである。

川童が冬は山に入って山童となるということを、今でも盛んに説くのは九州であるが、これは他の地方にもおりおりは聴く話である。山ワロは橘氏の西遊記にも出ているように、裸で背高で挙動が鈍く、人の言葉はわかるが一言も物を言わず、力だけは山で働く人よりも強くて、材木をかついでその駄賃に握飯を貰って悦んでかえるというような、いずれ怪物では

あろうが、かなり人間に近い逸話の持主でもある。それがヒョンヒョンと啼きながら空を飛んで行くなどというのは、余りとしても大胆な想像を描いたものだとも言われるが、もともとさようなものが全然いないか、少なくとも見たという人が、実は受売であったり、もしくは作りごとであったりしたのだとなると、こちらはまだ声だけでも聴いているのだから根拠がある。つまり双方ともに、冬は山へ行くという古くからの言い伝えが、形をかえて新たに流布しているまでのものらしいのである。紀州はドンガスだのガオロだのと、川童の異名の多くある地方であるが、それが又冬は山奥へ入ってカシャンボというものになるという。青い衣を着た少年の可愛らしい姿に見えるが、これがなかなかの悪戯で、人をからかって仕方がない。カシャグというのも方言でくすぐることを意味するのだという人がある。そういう徒ら者だが又一方には義理固い所もあって、熊野も二川村の何とかいう旧家では、谷へ入って来るカシャンボは一人ずつこの家の外へ来て、石を打ちつけて到着の知らせをするともいう。吉野では川童を川太郎というそうだが、これも冬になると山に入って、山太郎となると伝えている。その山太郎はどんな事をする者かまだ判っていないが、肥後の人吉付近では山ン太郎は山の神だといい、山神の祭文には近山ン太郎、中山奥山の太郎各〻三千三百三十三、合わせて一万に一つ足らぬ山太郎が、山に働く人々の祈願をかなえることを叙している。そうしてやはりまた冬の間だけ、川太郎が山に入って山太郎になるという話もあるのである。山太郎の里へ下って来る道筋は定まっていた。二月朔日の朝早くある川の用水堰の堤の上な

どにいって見ると、そこには必ずたくさんの川太郎の足跡があった。長い三本の趾のすぐ後に踵の跡があって、人なら土踏まずという部分がまるでなかったというから、これもどうやら鳥類の足跡のように思われる。

それから今一つ川童の声のことであるが、私たちの知っているのは、人間の子供に化けて来る時だから、無論日本語のしかも方言で、泳ぎに行こうやとか角力を取ろうやというのだが、それでも不審に思って聴き返すと次第に判らなくなり、しまいにはキキーという声ばかり高くなるという。あるいは角力を取ってこちらが負けると嬉しがって、そこでもここでもキキーという猿のような声をするので、始めて川童につかれていることを知るのだともいっている。ところが秋の終りと春の初めに、暗夜に空を飛んで山に出入するという土地だけが、そんな低い淋しい声で、ヒョンヒョンと啼くといっているのである。どうしてそのような一致せぬ話が、わずかな地域の間に併存しているのか。どちらも誤解であろうと言ってしまえばすむだろうが、それにしたところで昨今の誤解ではないのである。日向では川童を又ヒョウスンボという者が多く、それはこの啼声から出た名だと今でもいうが、百数十年以前の水虎考略にもその事はすでに述べてあるのみならず、一方には太宰府の天満宮境内を始めとし、川童を社に祀ってヒョウスへの神といった例は九州に数多く、又そのヒョウスへの神の名を唱えて、川童除けの呪文とした歌は全国に流布している。すなわちかつてある一種の冬鳥の渡りの声を聴いてそれを水の霊が自ら名のる名のごとく思った者が、かなり古くからあった

ことが推測せられるのである。鳥の習性には、時代の変化がすくなく、同じ現象は何千年もくり返されているだろうが、ただそれだけでは無論こんな俗信は発生しない。今でも田の神が春は山より降り、秋の収穫が終わると再び帰って山の神になるという信仰が、国の隅々に残っているように、神は年毎に遠い海を越えて、島のわれわれを幸福にしようとして、訪れ来るものという考えが、夙くから渡り鳥の生態を極度に神秘化していたのであって、川童もムナグロの声も、いわば無意識に保存していた古い記録の消え残りに他ならぬのではなかろうか。

川童祭懐古

一

夏祭は都市の繁昌につれて、次第に華やかな又新しいものになって来た。見物の衆がこれに心を取られて、いつとなくその姿を移し学び、後には農村の秋春の祭礼まで、神輿に山鉾に同じ風流を競う例が、多くなったのも無理はないと思う。当世は変り改まり、又ねんごろに根原を求め尋ねる。一たびこの行事の由来が、われわれの遠祖の生活と、いかなる交渉をもつかを考えて見るのも、今においては必ずしも無意義の業とはいわれぬであろう。

誰でも知っているのは、祇園はもと行疫神であったことである。部下の荒ぶる神々を統御して、その災禍を神を敬い祀る者に及ぼさぬというお力が、特に民衆の仰ぎ信ずる所であった。津島の天王の信仰は夙に東国の方に行なわれていたようだが、これはさらに御葭神事といって、追い放された疫神の行くえを、信徒に警戒せられる方式さえ設けられていた。この二箇所のお祭を美々しく、かつ極度におもしろくしようとした動機はわかっている。

流行病に対する不安は、本来は都会のものであった。そうして又上代に於ても、やはり新

たなる外来の文化と共に、先ず中心の地を目ざしたことは史証がある。夏の祭が田舎にももし古くからあったとすれば、その最初の目的は別であり、方法もまたおのずから異なっていたはずである。それがどの程度に感化を受け、又どれだけ以前の心持を伝えているか。これを明らかにするのは田舎の生活について視るの他はないのだが、先生が町にばかり固まって住んでござる結果、今まではとかく都市の知識によって、全国を類推せられる傾きがあって難渋した。今度の川童祭復興の噂は、この意味に於てわれわれの注意しなければならぬ話である。

田舎の旧六月は水の神の祭り月であった。これを天王様とも祇園とも呼ぶのが普通になっているが、今でもその趣旨は他にいろいろとある。日が照り過ぎれば、植田の泥は柔らがず、梅雨が強く降れば挿した苗も漂蕩（ひょうとう）する。川の堰（せき）や流れを飲水にしておれば、毎日の涸（か）れ濁りを苦にしなければならぬ。恵みも悩みも一つ神の力であった。日本はこれほどまでに水をよく使い、水に頼り切った国民でありながら、どうして昔から水の祭が、こんなにいい加減なのかといぶかる人もあるようだが、実はいい加減でなく、又「昔から」でも決してないので、単に水道などで顔を洗っている人がその方に冷やかだっただけである。いわゆる御霊（みたま）会系統の都市の祭でも、この月営まれるものは水の縁が深く、浜降り神輿（みこし）洗い泉の御旅所（おたびしょ）、さては船の中の伎楽（ぎがく）などと、すべて水の神の祭と態様（たいよう）を同じくしているのだが、何か理由があったとみえて、その神を水の支配者とする信仰は、記録の上にはまだ現われておらず、人はただ

夏だから又は涼しそうだから、くらいにしか考えていない。しかも悪い病の流行は毎年のことでもないから、次第にその目的がはっきりとしなくなって、町では涼み祭などという清遊気分が横溢するようになったのは、もったいない話だと私は思っている。

前年神奈川県の秦野で簡易水道を作ったときに、赤痢が流行って大騒ぎをしたことがある。自分たちの目には水道のできるのが、遅きに失したためとしか見えなかったのに、土地ではかえってこれが水神のお気に入らなかった罰のように、解した人が多かった。町ではこの類の災禍と水に対する不謹慎とが、同時に起こることが稀でないので、昔もこういった信仰解釈が行なわれ、あるいは水の神をその怖ろしさの半面から、疫病の神と見るようになったのではなかろうか。そうでなければ天王と水の神との同じ日の祭、瓜（うり）を氏神の供え物とする理由、ことに川童（かっぱ）と胡瓜（きゅうり）との約束が、祇園様の日を期限とするわけが説明しえられぬのである。

二

文学に川童（かっぱ）が二度目の登場をしたのは泉鏡花さん、故芥川龍之介氏などのお骨折であって、ご両所とも私たちの川童研究から、若干（じゃっかん）の示唆（しさ）を得たように明言せられているのは光栄の至りだが、遺憾に思うことはまだ少しばかり、川童を馬鹿（ばか）にしてござる。おそらく幼少の頃に見られた近代の絵空言（えそらごと）の影響で、あれではわれわれの胸に描く所の水の童子と、相去ること遠きはもとより、普通の村の人の今考えているものよりまだ見っともない。やはり例の化競（ばけくらべ）

丑満鐘の類の文学に、「かっぱと伏して泣きたまう」などとしゃれ飛ばした図柄の、延長としか見られないのである。笑っちゃいけませんといいたいくらいのものである。

もっともこれには川童の側にも責任があるかも知れない。かれは零落して行く精霊の常として、やや化物根性とでもいうべきものを発揮し過ぎる。水全般の信仰を守ろうとはせずに、ただ自分一個の存在を主張する。淵や霊泉に対する敬不敬には構わず、いやしくも川童を否認しようとすればすなわち出て嚇す、という風に考えられがちであった。そうして現在のところでは、その活躍の範囲が甚だしく限局せられ、それもだんだんに怖くなくなろうとしているのである。その滑稽化はむしろ運命だったといってよい。しかも江戸末期に出たあの烏天狗一流の似顔画のごときは、いわばある個人の幻覚であって、二つ以上を引き合わせて見れば、すぐにその真でなかったことが判る。要するに困ったものが流行したのである。

川童を水虎だ蝹だと誌した人は、日本にいるものは何でもかでも、皆中国にもあるという謬見から、出発しているのだから相談はできない。日本の実地からこの問題を考えてみようとしたのは、以前に水虎考略という四巻の書があり、その第一巻だけが流布している。これには諸方の見取図なるものが載せてあるが、鼻の低いもの、犢鼻褌をかいたもの、甲羅があって四つン匐いのものなどが、雑然として竝んでいて、実は空想のまだ統一していなかったことを立証する。見た出逢ったという者の陳述も又区々であるが、これにはなお一貫した特徴のようなものがあって、奇怪とはいいながらも心の底から、古人のそう信じていた数々の

痕跡が尋ねられる。相撲を取りたがるなどというものもその一つである。東北で山人又は大人というものを除くの外、そんな気さくな化け物は他にはいない。人に近づき交渉を持たずにはいられなかった名残かと思う。紫臀その他の体質に特徴ある者が、特に引き込まれ易いという口碑と、かの民間説話の川童が美しい娘に聟入したというものとは、関係がありそうである。後者は汎く水の霊全体についてもある話で、それを恥とも不幸とも考えずに、旧家自らがそれを信じ伝えていた時代もあったのである。

それからこの水底の童子の援助の下に、家が富み栄えたという話も方々に伝わっている。無論伝説であって、事実そのようなことがあった証拠にはならぬが、少なくともある頃そう信じた者があったことのみは推測せしめる。淵から膳椀を貸したのが不信用のため貸さなくなったという類の、後年の絶縁を説く例は無数にある。つまりは今のように害ばかり企てるという以前に、接するにその道を以てすれば、恩恵を示した時代もあり、又その中間に悪戯をして、人を揶揄していた段階も長かったのである。九州の方では殊に多いようだが、川童が人間に害をせぬ約束をした話、もしくは馬を引き込もうとして失敗し、詫びて怠状を書いたり、骨継ぎの秘薬を教えたりしたのも、五十や六十の例ではなかった。畠の作物ことに瓜類を悦んで、夜分に出て来て食い荒すというだけでなく、人もその初生りを串などに刺して、畠の端に立てて機嫌を取ったというのも、恐らく本来は供物であった。それが又六月の川祭の行事ともなっているのである。

三

国学院大学の一部の若い学者が、この水道万能の都の中にいながら、なお上代の水の神の神徳を仰いで、できるだけ古式に近い村里風の川祭を、毎年の行事として経営しているのは、単なる好事のわざとは私には思われない。こういう感覚こそは復習をせぬと消えるからである。ただ気になるのは夏休の都合か何かで、新暦六月の畠の胡瓜もない頃にくり上げたことで、温室の小さな花落ち瓜ぐらいでは、果して「川の殿」が満足せられるかどうかである。月夜と瓜畑は歴史あるわれわれの田園幻想に、欠くべからざる条件であった。私などの生まれ故郷では、胡瓜は祇園さんを過ぎると食べるものでないといっていた。ところが土地によってはこれと反対にこの日をすませてからでないと、食ってはならぬという処があり、あるいは又この満月の一昼夜だけ、絶対に食わぬという習俗の村もある。つまりはこの頃が全国を通じて、ちょうど胡瓜のしゅんでもあり、又これを以て水の神に供進する節日でもあったのである。祇園には御紋瓜の口碑もあり、瓜生石の伝説も記憶せられているが、神と瓜との関係は今ではもう尋ねがたくなっている。

これに反してこの禁忌を犯す者の制裁は、依然として水中童子の管理する所なのである。胡瓜を食ってその香のするうちは、川に泳いではならぬという土地もある。これに子供の名と年とを書いて、川に流すとガタロに尻を抜かれぬという所もある。それを天王様に上げる

という場合にも、畏れている相手はやはり川童であった。

胡瓜は胡の瓜と書くが、この信仰は輸入でなく、又中頃からの発明でもないらしい。古くは匏と川菜とを以て水の神に供え、又火鎮めの祭をしている。備中縣守淵の旧伝にもあるように、今ある昔話にも瓢箪を持って池に嫁入し、これを沈めて下さったら、私も入りますというようなのが多く残っている。目的は単なる食物以上に、これを以て水の霊の、力を試みるにあったらしいのである。

われわれ日本人はまだ外国の伝染病も知らぬ頃から、すでにこの神の怒の半面を経験し、畏れ慎んでこれに触れまいとしていたのである。古風な多くの信仰は学問によって裏切られたけれども、水の災は現実になお絶えず、他には優れた説明もない場合が田舎にはあったので、妙にこの部分だけが孤立して永く伝わった。それをかわるがわる嘲り笑っているうちに、ついに今のような滑稽な化け物にしてしまったのは、国民として少しく心苦しい次第だ。

農民の生活からいうと、今でも旧六月は水の恵みの豊かに溢れる月であると共に、家々の小さな不安の抑えがたい月でもある。その満月の夜頃を中心として、心を引き締める物忌の行に入って行く心持だけは、たとえ自分はこれに倣わぬまでも、もっとよく理解してやってよかったのである。今日まで来由を知り得ない六月朔日、東部日本では衣脱朔日、もしくはむけの朔日などという日でも、越後では川童が天竺から下る日と称し、九州南部では川童の亀の子配りといって、亀の子が足らぬと人間の児を算え込むなどといっているのを見ると、

やはり戒慎して水に入らぬ日であった。夏物断ちと名づけて、この日は野菜を食わず、もしくは夕顔の下へ行くなというのにも意味がある。六月晦日(みそか)は又川濯(かわすそ)祭などといって、私らの国では水の辺の祭としたが、西国ではこの日を又水に入らぬ日としている例が多く、天草あたりではこれを川童供養の日のようにも考えている。

そうかと思うと他の一方には、この日必ず海に浴するという土地もあれば、人は入らぬが牛馬だけは是非とも入れるという処もある。つまりはただの日ではなかったのである。あまねく全国の言い伝えを比べてみることができぬ限り、古い信仰は消えてしまわぬまでも、年を追うておかしくなる一方であろう。それを食い止めて一通りは知っておこうとすれば、どうしても都市の若い学徒の、共同の反省に待つより他はないと思う。

盆過ぎメドチ談

一

もうそろそろ氷でも張ろうかという頃になって、メドチの話を始めるのも気がきかないが、これでも来年の夏の手まわしとしてならば、早いとほめられてもよかろう。奥南新報の記事目録は、この節(せつ)きまって東京の一二の雑誌に掲げられるようになった。大よそ日本広しといえども、こんな例は一つだって他にはない。三浦利亢君とその一味の人々とが、鼻を高くしてござることは写真を見なくともよく察しられる。しかし八戸の諸君がこれによって、もしも世間に類のない奇事珍聞がここだけにあり、それを聴かせてもらって驚いているのだと、想像せられるようだったら、それだけは当たっていない。たまにはそんな人もどこかにいるか知らぬが、われわれはむしろその正反対に、外でも格別珍しくはない事柄、今まで何遍か承ったような話が、遠く南部の三戸(さんのへ)郡あたりにも、歴然として存するということに眼を円くしているのである。それがどうしてそのようにびっくりすべき事なのかは、共同にこれから考えて行くによい。単に他府県の人に物を教えてやるだけなら、新聞の役目の外である。そ

れでは第一に地元の読者にあいすまぬ。「村の話」が実際は国の話であり、あるいは弘く人類の話であるかも知れないわけが判ってこそ、読んでもう一度考えてみようという人が、土地にもおいおいと多くなって行くのである。問題はまだ他にも幾つかあるが、先日是川村のメドチの話をおもしろく読んで、今でも覚えているから一つその話をしておこう。

二

私たちの不思議とするのは、人は南北に立ち分れて風俗も既に同じからず、言葉は時として通訳を要するほど違っているのに、どうして川童という怪物だけが、全国どこへ行ってもただ一種の生活、まるで判こで押したような悪戯を、いつまでも真似つづけているのかという点である。たとえば人をみて角力を取ろうということ、これはいやしくも川童というものがいる限りは、必ず誰かにそういう経験をさせている。奥州方面だけには例が少ないかと思っていると、八戸では念入りに二人連れで化けて来ている。おかしいことには名前や外貌が少しずつ違っていながら、角力のすきな点のみが特別に一致している。九州では通例ガワッパだのガアラッパだのと呼ばれ、色も東北とはちがって半透明の白色だといい、一つの水溜りに千疋もかたまって住むなどと言われているが、やっぱり人を見ると「おい角力とれ」といって近づいて来る。取って負けてやればキキと嬉しそうな声をしてもう一番といい、負けるとくやしがって何疋でもかかって来る。今でも実際あった事のように思っている者が少しは

あるが、他人が通りかかって傍から見ると、相手の姿は少しも見えず、大の男がただ一人相撲を取っているのであった。それがしまいには取り疲れて、夜が明けるとまるで病人のごとく、又は熱が出たり稀には発狂してしまう者もあって、あの地方ではこれを川童憑きといい、修験を頼んで加持して貰うことになっていたそうだ。

三

これは九州でも筑後川流域、もしくは豊前の小国川、これに隣接する小盆地などに、近い頃まで行なわれていた風説であるが、他の多くの地方、殊に中国から近畿方面へかけては、噂は今少しく説話化して、もう迷信の区域は通り越している。第一に川童を見たという者が非常に少なく、たまたま出逢ったようにいう者でも、よく尋ねてみると後姿ぐらいのもので、話は一体にぼんやりとしている。その癖に川童は角力を挑むものだそうな、うっかりと見ず知らずの者と、角力などを取ってはいけない、という類の評判ばかりは無闇に流布している。彼の頭のまん中には窪みがある。その中に水が溜まっている間はえらい力を持っている。だから是非とも角力を取らねばならぬようだったら、先ずていねいにお辞儀をするがよい。そうするともうっかりと答礼をして、その水を翻してしまうからなどと、さもさも誰かがそういう経験でもしたように、私も子供の頃にはよく年上の友人から教えられたものだった。中国では川童をメドチとはいわない。私などの故郷ではガタロ即ち川太郎、備前備中では川

子又はコーゴ、広島県からさきはエンコウという土地が多い。しかも奥州の三戸郡と同様に手を引けばするすると抜けるから手を引くに限るということも、またこの地方では伝えられているのである。近世の文人画に猿猴(えんこう)の月を捕(と)る図と称して、途方もなく長い手をした猿が、樹の枝につかまって片手を伸ばし、水底の月を摑もうとするものがあった。もとは禅家(ぜんか)などの寓意(ぐうい)に成ったものだろうが、かなり流行してただの民家にもしばしば拙いのが描かれてあった。川童のエンコウも多分これから出た名であろう。私たちの郷里でも一種エンコザルという水辺に住む猿だけが、手が左右両方に抜け通って、一方を縮めると一方が伸びるという、便利至極なのを持っているように考えていたのであった。そうしてそれと川太郎とは同じものとは思わなかったけれども、後者も亦手を引けばじきに抜けるように伝えているのだから、今からふりかえって見ると、たしかに関係のあることであった。そうでなかったならば、あんな絵はこのように普及しなかったはずだ。

四

なにゆえに川童が人を見るといつでも角力(すもう)を取りたがるのか。今まであまりありふれた話だから注意する者もなかったが、考えてみると奇妙なことである。川童の妖怪であるゆえんのもの、平たく言うと川童の怖ろしいわけは、人を引き込んで尻の子を抜くからであろうが、それと角力とは何分にも両立しない挙動であった。人の命を取るだけの自信があり、又計画

のある川童ならば、何もわざわざ力を角してみる必要はないわけである。だから子供などは既にそんな話を信ぜず、普通はかれが水浴びに誘いに来るという方を怖れていた。実際毎年の夏になると、おりおりそういう疑いのある悲惨事が起こった。他の子供の出ておらぬ時刻に、又はその群からずっと離れた場所で、たった一人だけで子供が水の中に死んでいる。又は今まで遊んでいたのが急に見えなくなる。そうしてたいていはきまった淵などであるために、現場を見た者は誰もなくても、それが川童の所為(しょい)だということになるので、人間にこの説明しがたい不幸のある限り、メドチの信用はいつになっても恢復(かいふく)する見込はないだろうが、それにしては人と角力を取って、勝って嬉しがってただ帰って行ったという話が、いよいよ以て解しがたい不思議になるのである。

　この点に関しては、私はもうだいぶ前から奥州南部のメドチに注意しなければならぬと思っていた。その理由は、私等の郷里で水に溺れて死ぬ者は、他に説明のつかぬ限り、誰でも川童に引かれたという推測を受け、お互いはすべてその危険があるように怖れているのだが、東北ではどうやらそれが最初から、人について定まっていると考えられているようである。この児は水のものに取られる相があると言われて、注意をしていたけれどもやはり取られたという類の世間話は多い。川童に尻ごを抜かれる資格というのもおかしなものだが、今でもよく聴くのは紫臀(むらさきげつ)をした者が、特にメドチによく狙われるということで、後になってからなるほどあの子供は、ほんにそうであったという場合が当地でも多いという話である。尻の

紫は私の聞いた所では、モンゴリヤ系民族の常の現象だそうで、現に日本人の中にはその例はざらにある。それが川童の眼に好ましく見えるようでは、格別われわれも安心というわけには行かぬが、とにかくにかれに選択があり、その条件に合した者だけが取られるというのは、何か仔細がなくてはならぬことであった。そうして気を付けていると他の地方にも、以前は同じように考えられていたのではないかと思う節が、少しずつ現われて来るのである。

五

そこでメドチが角力を取りに来たという話が、又大いに参考になるのである。人を途上に待ち伏せして、角力の勝負を挑むという怪物は、必ずしも川童だけではなかった。土佐でシバテン又は芝天狗というものも、他にはこれという悪戯をした話もないが、ただやたらに角力ばかり取りたがる。そうしてうかうかとその相手をしていた者が、しまいには発狂したとか、命を失ったとかいう風説ばかりが多かった。ただしこの話はまだ大分川童と似ている。土佐には川童というものも別にいたのだけれども、芝天が多く川の堤や橋の袂に現われ、その形が七八歳の小児と似ていたなどというのも、どことなく川童の出店のようであった。ところが今一種、これとはよほど性質はちがって、しかも角力のすきな怪物が東北にはいた。津軽から秋田に連なる深山幽谷において、山人、おお人又時として鬼ともいったものが即ちそれであるが、こちらは一向に人を害せんとする様子はなく、ただわれわれを見かけて角力

を取ろうというのみで、勝ったり負けたりしているうちにだんだんと懇意になり、しまいには家へ遊びに来るまでになったという話さえある。いったん交際を始めると中途で止めることができぬらしく、怒られるとこわいからいつまでも機嫌を取っていなければならぬことが、迷惑といえば迷惑だったかも知れぬが、命を奪おうとせぬのみか、時には相撲の相手をして貰いたいために、薪を伐りマダの皮を剝ぎ畑を起こす等、大きな力で山仕事を手伝ってくれたという話も伝わっている。つまり素直にかれのいうことをきいてさえおれば、本人の利得に帰することが多かった。その点がよほど九州の川童などと違っているのである。

あるいはその九州の川童とても、もとはこういう風に平穏な交際であったのかも知れない。単に川童や芝天が出て来て角力を取ろうと言っただけならば、考えて見ると怖いはずはなかったのである。女や老翁の最初から自信のないものならば、第一にこれに応じて力を角する気にはならなかったろうし、たまたまその道の心得のある者でも、負けてばかりいるようだったら、かれも相手にはしようとしなかったろう。それが少しばかりの力自慢で、勝った経験のあるような男が、つい挑まれて何のこいつがと、一番負かしてやる気になって引っ掛かるのである。あるいは実際こっちの方が強くて、相手を投げ倒したために後の祟が怖ろしかったという話もある。何にもせよ人と川童との交渉は一般的でなく、必ず一定の資格ある者に限ったことは、角力も紫臀の場合と異なる所がなかった。

六

われわれの妖怪学の初歩の原理は、どうやらこの間から発明せられそうに思われる。その一箇条としては、ばけ物思想の進化過程、即ち人がかれらに対する態度には三段の展開のあったことが、この各地方の川童の挙動と称するものから窺い知られる。第一段にはいわゆる敬して遠ざけるもので、出逢えばきゃっといい、角力を取ろうとすれば遁げて来る。夜分はその辺を決して通らぬという類、こうしておれば無難ではあるが、その代りにはいつまでも不安は絶えず、ある一定の場所だけは永く妖怪の支配に委棄しなければならない。それをできるだけ否認せんとし、何の今時そのような馬鹿げたことがあるものかと、進んでかれの力を試みようとして、しかも内心はまだ気味が悪いという態度、これが第二段である。狐・クサイの化けかかっているのを見破って、かえっていつの間にか自分が坊主にされた話、又は天狗を軽蔑して力自慢をしていた勇士が、これでもこわくないかと毛だらけの腕でつかまれ、腰を抜かしたという類の話は、いずれもこの心境の所産であって、これにはしばしば角力の勝負を伴うていた。つまり人にはさまざまの考え方があっても、社会としては半信半疑の時代であった。それが今一歩を進めて信じない分子がいよいよ多くなると、次に現われて来るのは神の威徳、仏の慈悲、ないしは智慮に富む者の計略によって、化け物が兜をぬぎ正体を現わして、二度と再びかような悪戯をせぬと誓い、又は退治せられて全く滅びてしまったと

いう話が起こる。それは聴いていてもおもしろく興があるので、次第に誇張せられてしまいには、馬鹿げて弱く愚鈍なる者が、妖怪だということに帰着し、それを最後としておいおいに説話の世界から消えて行くのである。現在の昔話に僅に残っている妖怪は、この三つの種類が錯綜して、順序が明らかでないために時々は誤った解釈があるのだが、将来もう少し親切な観察者が、細かな分類をしてくれたらこれだけは判って来ることと思う。そうして川童の角力という言い伝えは、これに関してはかなり有力な参考であると信ずる。

七

これは同時に又相撲という競技の今まで不明であった歴史をも暗示する。なにゆえに相撲が神社に伴ない、もしくは必ず節日の行事であったかという問題は、この方面からでないと解説することができぬようだ。古人は腕力と勇気との関係を、今よりもいっそう深く結び付けて考えていた。力の根源を自分一個の内にあるものと信ぜずして、何か幸福なる機会に外から付与せられるもののごとく解していた。石を持ち挙げて見てその重さ軽さの感覚によって、願い事のかなうか否かを卜したと同様に、相撲は又神霊の加護援助が、いずれの側に厚いかを知らんとする方法の一つであった。勝った力士の自負自尊は非常であったが、その背後には常に熱烈なる信仰があったのである。神に禱って大力をえたという口碑は、東北には殊に多い。それは平素の心掛け、もしくは難行苦行の致す所でもあったが、かねて又その人々の

持って生まれた約束のようにも認められていた。現在の遺伝論に照らして不思議はないようなことまで、家に特別の力の筋というものがあると伝えて、その理由を説こうとしていた。これが又地方の頭目の永く優勢の地位を保持していた理由にもなっている。

奥州などの川童が角力を挑んだのは、恐らく最初は主としてこういう種類の人たちに向かってであったろう。関は今日の語でいうと選手であり、又記録把持者であった。第二の競争者の進出をせき止めて、自分が覇を称しているからそれで関取といったのである。かれらの強力の根柢と頼む所が、近世風に自分一個の体質又は習練と称せられ、あるいは又全然別なる神仏のご利益に基づくものと信じられている限りは、川童や山人は是非ともこれと力を角して、わが威力を承認させなければならなかった。そうして昔の習わしのままに、負けて平伏したものは庇護せられ、これと抗争してあるいは勝ちあるいは負けたものは、いつまでも悪戦苦闘を続けたのである。妖怪はつまり古い信仰の名残で、人がその次の信仰へ移って行こうとする際に、出て来てこういう風に後髪を引くのである。日本の新旧宗教は殊に入り乱れている。そうして今日はおばけの話をとおしてでなければ、もはや以前の国民の自然観は窺い知ることができなくなった。

南部地方の怪談にはこの意味に於て、なお珍重すべきいろいろの資料を保存している。たとえば今日既に童話化してしまった猿の聟、あるいは大蛇のおかたになった娘の話などにもこちらにはやや古そうな形のものが併存している。櫛引村のおほよが物語を始めとし、遠野

には川童が聟入をして、子供を生ませたという家なども残っていた。すなわち水の神の信仰を宣伝し又立証しなければならぬ旧家が、いやいやながらもまだ古い因縁に繋がれて、急にはこの伝説を振り棄てずにいたのである。おかしい話ではあるが、水の物に愛せられるという紫臀の子供なども、世が世であるならばまた一個の神主の資格であったかも知れない。

八

この問題をこれだけの簡単な言葉で、説こうとしたのは無理であったようだ。それは又改めて詳しく述べることにして、さし当りお知らせをしたいと思うのは、メドチという語の分布及び由来である。北海道の土人が水の神をミンツチと呼び、その怪談には若干の一致があることは、夙く金田一教授がこれを説いておられる。この蝦夷のミンツチと八戸などのメドチと、同じ語であることは大よそ明らかだが、問題はどちらが真似たか採用したかである。

南部では馬淵と北上との分水嶺が境で、岩手県ではもうメドチといっておらぬらしいが、津軽にはたしかにその名がある。但し平尾魯仙翁の著書などを見ると、メドチと川童とは別々であるようにも思われ、前者は少なくとも長虫のような形に空想せられている。それにもかかわらず私はなおこれを川童の地方名のごとく信じているわけは、遠く離れてこれと近い語が行なわれているゆえである。現在知られている例は三箇処、能登の半島ではわれわれの川童が明らかにミヅシで、頭の皿に水があり、相撲を取りたがり、馬を引こうとして失敗した

などという逸話をもっている。次には滋賀県で湖水東岸地方、これもミヅシといい又同様の俗信が行なわれている。この両地のミヅシと奥南部のメドチとは、聯絡がないものとは考えられない。そうすればこれはアイヌの方が後に聞いて、少なくとも日本から名を学んだのである。

それから最後にはずっと懸け離れて九州南部、薩摩と日向大隅の一部ではまた確かにミヅシンといっている。ガアラッパ又はガオロといっても通ずるが、こちらが多分新しかろう。こういう霊物には忌(い)んで名を言わぬ場合があるので、第二の称呼が起こり易いのである。ガオロ・ガアラッパは共に「川童」の日本訓(よ)みであるが、九州では現在又カワノトノもしくはタビノヒトなどと称えてこの語を避けようとする傾向も見えている。ミヅシンは土地の人たちが「水神」の湯桶よみだと解しているらしいが、これを八戸方面のメドチや蝦夷地のミンツチに比べてみると、始めて古語のミヅチと同じものであり、ただこの国の三方の端々(はしばし)にのみ、たまたま保存せられていたことが判って来るようである。ミヅチは蛟と書き又虬と書いている。だから蛇類ではないかという人もあろうが、それに答えては中国ではそう思っていたというより他はない。日本のミヅチという語には水中の霊という以外に、何の内容も暗示されておらぬ。それが果して長虫であったか猿に似ていたかは、メドチを喚(よ)んで来て体格検査をした上でないと決しられぬ。われわれの幻覚ないし空想は今でもまだ勝手次第である。

九

それから川童の手が抜けるということ、これもアイヌの中では知られており且つ説明せられている。昔神様が多くの人数を集める必要があって、急に草を束ねて小さな人形を作り、それに生命を吹き込んで活躍させたが、用がすんでしまったのでこれを湖水に放ち棄てた。今あるミンツチの始めはこれであるという。いろいろ悪戯(いたずら)をするが元来が一本の棒を突き通して両腕にしたのだから、片方を持って引けばするすると抜けるのだといっている。

これと半分以上同じ話が、又三戸(さんのへ)郡にもあったかと記憶する。少なくともこれに似た話は各地に存するのである。昔左(ひだり)甚五郎が某地の仏閣を建立したおりに、大工の手が足らぬので人形を多く作りこれに息を吹き込んで働かせたのち川に捨てた。それが川童になって今でもいるのだという話は、奈良県などでも聴いたことがある。九州では肥前のある旧社の伝えとして、やはり人形が川童になった話が残っている。その顛末は北肥後戦記という書にも出ているが、一つの特徴はその川童を利用したという橘島田麿という人の子孫が、渋江氏と称して中世の豪族であり、今でも各地に分居して永く川童の取締りに任じ、現に右申すお社の神主の家もこれであることである。九州の川童はその災害も系統的であったと共に、これを統御して水難を防止する役目もまた非常に発達していた。これはヲサキ狐を攘い除ける三峰(の)山の信仰区域だけに、ヲサキ持ちの家が最も多く、人狐専門の行者のいる出雲(いずも)伯耆(ほうき)に、人狐の

跳梁しているのと同様に、なまじ祈禱の効能を説く者がいるために、いつまでも住民にこれを忘却することを許さぬのであろうと思う。とにかくにこの人形の話は形跡なしには起こるまい。さすればかつてこういう腕の抜け易いある偶像を作って、ミヅチすなわち水の神を祀っていた時代があり、その風習は弘く国の南北端まで波及していたものでなかったろうか。現在はもうそうした祭り方をせぬようになったとすれば、これくらいの話の変化、想像の成長はありそうなことで、われわれ日本人は殊にその方面では気が早かったのである。

一〇

最後にもう一つだけ、小さな八戸地方の世間話が、われわれをして膝を打たしめた点を述べておこう。既に信仰者を失った水中の霊物が、なお角力を取って人間の関取を押し伏せたということは、土地の人にとっては安からぬことであった。何とかして結局彼らを負かしたという話にしようというには、かれの秘密を聴き知ったというのが最も手軽でよい。これはむつかしく言うならば、人類の知識が進んで、次第に自然を制御して行くという理想を具体化したものとも言える。便利なことには見馴れぬ若い者が二人づれでやって来て、帰りに後について聴く人があるとも知らず、不用心にも自分の腕の抜けやすいという秘密を、洩らしてくれたという話になっているが、これなどもわれわれの妖怪に対する態度の変化であった。そうしてこの空想にも前の型があったのである。

川童にはめったにこんな失策がなかったようだが、同じ挿話は日本では蛇聟入の話には多かった。夜来て暁に帰って行く不思議な婿殿を見あらわすために、母が勧めて糸のついた針をその衣服のはしに刺させる。そうして翌朝はその糸をたぐって、山奥の洞穴に行って大蛇を見たというまでは、古くかつ広い言い伝えであったが、わが邦では通例これに立聴きの話がついて語る。静かに聴いていると岩穴の底で、唸り苦しむような声がきこえる。その傍に誰か介抱をしていて、だからあれ程私が止めたではないか。やたらに人間の娘などに手を出すから、針を立てられて銕気の毒に苦しめられるのだというと、他の一方の呻く者の声で、いやおれは死んでも思い残すことはない。種を人間の中に残して来たからと答える。なアに人という者は思いの外賢いものだ。もしも菖蒲と蓬の葉を湯に立てて、それで身を洗ったらどうする。せっかく生ませようとした子が皆下りるじゃないかと言っている。これはうまい事を聴いて来たと、早速家に帰ってその通りにした所が、果して盥に何ばいとかの蛇の子が死んで出てしまい、その娘は丈夫になったという風な話は、少しずつの変化を以てどこの国にも行なわれている。これにも尋ねて行けば又原の型はあろうが、近頃では先ず主として、水の神との絶縁をこういう話にして説いている。角力の川童が腕を抜かれた理由に、これを適用していることはわれわれの文芸であった。そうして格別古い頃からの言い伝えでもなかった。しかも他の人は知っていないこういう大切な知識を、持っているものは神主であり又は教師であり酋長であったことは、大昔以来かわりはなかったろう。

諸君はすなわちそれを時代に適応するように改定しつつ、今に至るまでわれわれの人生観を指導していられるのである。いたずらに僅かの珍しく古臭い習俗を、告げて驚かせるを以て能事終れりと、誤解せられずんば幸である。

小豆洗い

清水時顕君の、小豆洗いは崩れ岸を意味するアヅという地名から出た流言だとのご高説は（郷土研究三巻）、ご高説であるが信じにくい。最初に地名の真の意味を忘れ、次にその地名あるがために小豆を洗うような音を聞くということは、もし一箇所ならば飛んだ間違い又はよい加減な虚誕などというべき事か知らぬが、広く全国の各地に亙って偶合のありそうもない話である。願わくはその多くの実例を並べて見せて下され、そうする中には必ずどうしてそんな音がしたかもしくは聞こえたか、なにゆえにその音を小豆を洗う音と解するに至ったかという、今いちだんと直接なる二箇の疑問が判明することになるであろうと思う。常陸の例は清水君自ら挙げられ、阿波の例は遠藤君が報ぜられた（同四巻六二ページ）。この外に土佐因幡甲斐羽後陸中東京等にもあったのである。元来何の音もしなかったのを、単に地名から小豆洗いの音を幻覚したとはいわれぬようである。土佐の小豆洗いは西郊余翰巻三幡多郡中山田村の条に、「此里なる寺門の外に赤小豆洗ひと云ふ怪談あり、夜により赤小豆を炊ぐ音せり、須臾にして止むとかや」とあり、土州淵岳志中巻にも、「宿毛の中山田と云ふ所に寺あ

り、此寺の門外に赤小豆洗と云ふことあり、時々夜更けて小豆を洗ふ声するなり、半時ばかりにして止むと云ふ」とあるが、原因までは究めようとしなかった。これは寺の門外とあるから、やはり小溝あり橋があったのかも知れぬ。因幡の分は有斐斎剳記に「因州の留邸寺尾氏の夜話に、其国の一江崎と云ふ所に一の小溝あり、其溝にて夜水中に赤小豆磨と云ひて、小豆を磨ぐ音のすること時々あり、人怪みて之を求むる者、必ず其水中に陥る。怪我は無しと。坐に良白耕ありて曰く、吾国にも此事あり、但しアヅキコシと謂ふ。鼬の老いたるもの必ず之を為すと云へり」とある。良白耕といった人はどこの人であるか知らぬが、アヅキコシと呼ぶ例は自分はまだ耳にせぬ。甲州のは裏見寒話巻六に、「古府の新紺屋町より愛宕町へ掛けたる土橋あり云々、こゝを鶏鳴の頃通れば橋の下にて小豆を洗ふ音聞ゆといふ。又畳町の橋の下も此の如しと云へり」とあって、鶏鳴の頃と限っているばかりであるが、津村氏の譚海巻六には、「甲州の人の談に、ムジナはともすれば小豆洗ひ糸繰りなどすることあり、小豆洗ひは渓谷の間にて音するなり、糸繰りは樹のうつぼの中に音すれど、聞く人十町二十町行きてもその音耳を離れず、同じ音に聞ゆるなり」とあって鼬も同様だが水中におりそうにもない獣類の所為にしてしまっている。奥州の白川でも、たしか阿武隈の水源地方の山村に小豆磨の怪あることを、白川風土記の中に記してあったかと思うが、ただ今原文を検する方便がない。又山方石之介氏はかつて佐々木君が陸中遠野郷には「川に小豆磨ぎあり云々」と報ぜられたに対して、氏の郷里羽後秋田辺では、「小豆磨ぎ」は水中の怪ではなく、むしろ

山の神の所為と信ぜられているといわれた。要するに比較討究のなお必要なる理由は、第一に小豆洗いの不思議のある場所が、果して常に岸の崩れ又は岸の埋まり浅くなるような場所あるいはその附近か否かということを確かめねばならぬからである。蓋し音響の怪は右の二種の外、天狗倒しとかバタバタとか、列挙すれば数多いことである。山中というも深夜というも結局は同じことで、孤独寂寥の折からでなければ今の音は何だろうと平然として穿鑿するはずで、これを変化のわざと解するのはあらかじめ怖いということを伴なうからである。

清水君は土橋ということを崩れる方へ聯想せられたようだが、これは多分はそうであるまい。昔から妖怪は必ず路傍に出て通行人を嚇かすのが原則であった。つまり小売商が市街に面して店を開くごとく、怖がる人はすなわち妖怪の花客であったためで、殊に峠と坂、済と橋などはかれらの業務を行なうに最も適当な地点であったのである。しこうして妖怪の中でも眼に訴える者よりは耳を襲うものの方がもっともらしい者が多く、井上圓了氏を聘せずとも解説のできるものが、音響の不思議に多かったことは事実である。夜間の怪声に鳥の声又は羽音であったものがあるごとく、小豆洗いを鼬又は貉というのも必ずしも冷笑すべきでない。佐渡の砂撒き狸のことは茅原老人前にこれを報ぜられたが、自分少年の時に下総で聞いた話にこんなのがある。ある男月夜に利根川の堤の上を歩行いていると、何か猫ほどの物が路を横ぎって川端へ走り下り、寄洲の水際で転がっているように見えた。立ち留まって見ていたところ、やがて又走せかえって、行く手のこんもりとした木に登った。猫だろうと思って何

気なくその下を通ると、木の上からばらばらと砂を降らせたという。楽屋の方から先に覗いたからよいようなものの、これが暗夜でもあったら、又二度も三度もあったら、必ずまた砂撒き狸の根拠地を作ったことと思う。かの地方の者は確かにこれを狸だと信じているのである。かつて試みにこの話を狸通の川瀬博士にしたところが、狸はそのくらいな悪戯(いたずら)はするかも知れぬといわれた。実際わが邦ばかりでなかろうが、鳥獣の生活状態殊に直接食物捜索と関係のない習癖には、明白になっておらぬものが多い。オサキや犬神の話を聞いても、ある種の獣の存在が全然知れておらぬのか、然らざればある獣の著しい性質が確かめられておらぬのか、二者必ずその一だと思うことが多い。というて自分は小豆洗いの興行権者を鼬(いたち)又は貉(むじな)と決定したのではなく、又鼬や貉では実は少々困るが、何か大きさ形などがこれに近い水辺に住む獣が、産育の時とか遊牝の時とかに、せわしく砂を掻き動かすというようなことが、小豆洗いの怪の原因でないとは断言し得られぬと思うまでである。ただし今一つ申添えたいことは、清水氏もいわれたごとく、なにゆえに音もいろいろあろうのに、小豆を洗う音ばかり聴き取るのが例であったかという疑である。私はその答を小豆その物に関する我民間俗信の方面にもとめるのが自然の順序かと考える。各地の小豆阪小豆峠の中には、アスという動詞に基づいたものも決して交っておらぬとはいわぬが、何かその外にも小豆に関した習俗がその地名の起原となった場合がないか否かを考えてみねばならぬ。今いちだん溯(さかのぼ)っては小豆がどうしてアズキというかも研究すべき一の問題である。近い頃の神符降臨の騒ぎ

の時も、何か赤い樹実(きのみ)の降ったのを小豆が降ったと言い伝えた例もある。怪談老の杖巻三に、「小豆ばかりと云ふ化物の事」と題して、麻布近所の二百俵ばかり取る大番士の家で、夜分はらりはらりと小豆を撒くような音がした。後にその小豆の音だんだん高くなり、ついには一斗(と)ほどの小豆を天井の上へ量(はか)るようなる体(てい)で、間を置いては又はらはらとなること暫くにしてやむ云々という話がある。すなわち小豆はすでに土橋の下ばかりで洗われておらず、人家の天井の上でも活躍しているのを見れば、鼬貉(いたちむじな)のみでは天下の小豆洗いを解説し尽すことのできぬのもまた明らかである。なお同種の話を多く集めた上で講究を続けたい。

呼名の怪

名を呼んで人の心神を奪い去る妖怪のことについて、桜井秀君の挙げられたのは元和四年と元久（文久？）二年と両度の記事であったが、その外にもこれと同じ不思議が、これは京都以外の地で起こった。月堂見聞集巻二十九、享保十九年五月の条に左の記事がある。「同年九州の地夜に入り家々の戸を叩き候へば、開き候と其者絶入仕候。是は去年五月の中旬の頃に御座候。此間は備中備後地へうつり候由。或者教へて曰く、たぞやたぞ我名を知らでいふ人はいづくへ行くぞこゝは神やど、右の歌を書付け門戸に張る。依之近き頃は少許うすらぎ候由。備中国の便宜に申来候なり」。ただし後段の記事によると、九州小倉へ行った人の話に、かの地では何の事もなかったということであるから、あるいは虚説であったかも知れぬが、神宿云々の歌は文久度のものとほぼ同じであるのを見れば、由来のあることであろう。

団三郎の秘密

先だって八戸へ遊びに行った時に、小井川潤次郎君から耳よりな話を聴いた。あの市の周囲の村には幾処となく、隠れ里の伝説が分布して、昔は頼むと膳椀を貸してくれた。その返却を怠ったので貸さなくなったといって、古い道具の一部を持ち伝えている旧家も少なくないということである。私が始めて椀貸元の話を書いた頃には、これはまだ算えるほどの一致であったが、今では全くないという土地がかえって珍しいくらいに方々で発見せられている。しかし三戸郡の異例は、かたまって数多くその遺跡があることと、今一つはダンズという地名であった。小井川氏は曰く、この膳椀を貸したという淵や池の辺には、必ずといってもよいほどダンツカアラ、もしくはダンズという地名が存する。他の場処にはまだ気がつかぬから、これが何か伝説と縁のある語ではないかという意外なことだが誠に大切な手掛りである。他の地方の椀貸し口碑にも、果してこの地名を伴なう例ありや否や。あるいは又何かこの語を説明するような別の話でもあるかどうか。この答が得られたらわれわれの研究は躍進すると思う。

しかし自分のこれについて、聯想し得ることは僅しかない。佐渡には二つ山の団三郎という狸の大家族がいて、金を貸していたという話がある。金山隆盛の数百年の間に、自然に落ちこぼれた財宝を拾い集めて、相川河原田の中間の山奥に、狸が長者のような暮しをしていたというのである。島の方では医者が招かれて往って外科の療治をしたの、産婆が子を産ませてやって莫大の礼を受けたのという、他の地方でもよく聴く話が記録せられていないが、越後の方の地誌にはかえって奇抜な伝えがある。今でもこの海岸から佐渡ヶ島を望むと、ちょうど二つ山の上あたりに絶えず彩雲のたなびくを見る、あれが団三郎の住んでいる城郭だといって、すなわち隠れ里のあこがれはこまやかだったのである。島に生まれた湛念な人ならば、あるいはまだ耳に伝えた昔語りを保持しているかも知らぬが、ここでは主人公が狸になってから、以前の伝承は変色したのである。それを復原してみることはかなり困難かと思う。

膳椀類の貸主を狸だと想像していた例は、関東の方にもあったようである。それから又貉の内裏と称して、地下にすばらしい大きな殿堂があり、貉がその居住者であり又頭目であったという話は、武州にも上州にも近くまで遺っていて現に私はその見取図のごときものを一見したことがある。夢のような風説だが空には生まれなかったと思う。この地方の椀貸しは半分は洞穴であった。以前は必ず水のほとり、又は淵の底から出して貸したのだろうが、それが横穴の泉の出口などになると、いつとなし穴の獣の、しかも人間の姿に化けることを好

む者に仮托せられる傾きになったのかと考える。つまりは普通の人々が漸く真としなくなった結果である。佐渡の例において何よりも注意に値するのは、その隠れ里の狸の名が団三郎であったことで、この点も変えるならもっと狸らしく変えたろうから、これは偶然に古い部分の残片かと思う。ところが一方に遠く鹿児島県の方言集を見るとあの地方でも狸をダンザといっている人がある。これは珍しい一つの旁例であって、あるいはその根源に佐渡と系統を同じくする伝説でもあるのではないかどうか。それを尋ねるためには彼地方に住む人たちの協力を求める必要がある。

こういう問題を一つの郷土の内で、解釈しようとするのはいつでも無理である。それが簡単に答えられるようだったら、とくの昔に問題の事実もなくなっていたろう。誤っておればこそ今の形で残って来たのである。団三郎という名前が又別種の形となって、伝わっている処が四国にもある。伊予と土佐との境の山村にわたって、これを曾我の十郎五郎の忠義な家来、鬼王団三郎の兄弟の者が、落ちて来て隠れ住んだという話にしている。この両人の事蹟は曾我物語の中でもちょっと頭を出して最後までは述べられていない。だからいかなる遠方の山奥へでも引っ張って来ることは可能であるが、これがもし小説であり史実の上の人物でないとするとその始末はかなり妙なものになるわけである。ところが伊予の山などではこの後日譚がやや進展し過ぎている。団三郎は奥州の常陸坊海尊などと同じく、又土地人の幸福に寄与していた。そうして一人の老女を伴ないそれが曾我兄弟の母の満江であったともいえ

ば、一方にはその女性が又山中に永く住んで、たしか近代の和霊大明神の神霊となった、山家清兵衛の物語とも交渉を持つような話がある。これも私にはダンザという言葉の、全く別途の成長であったような気がするのである。土地が相接しているとかえって種々の影響感化がある。隠れ里の思想の古い起原を知ろうとするには、むしろ懸け離れた遠方の、飛んでもない言い伝えを見る方が暗示は多い。そうして私の知っていたことは、佐渡と伊予土佐と九州の南端と、偶然にも国の四方のすみずみであった。これが一つの信仰の末梢現象であると、速断しようというのでは毛頭ないが、とにかくにこの四箇所の互いに知らぬ郷土誌家に今後の調査によってえたものを、参考として交換してもらいたいと思うだけである。

狐の難産と産婆

古い話が新しい衣裳を着て、今でもまだその辺をあるいている。これはそのたった二つの例である。

一つは五六年前という。筑後渡瀬駅に開業する産婆、深夜に見知らぬ家に招かれて車で行った。使の者は三十前後の商人体で、非常な早口の男であったという。鶏鳴の頃にやっと産があり絹布の夜具にねかされてとろとろとしたと思うと、江の浦街道の路傍の藁の中に寝ていた。ただし枕元には紙に包んで、新しい本物の五円札があった。

今一つは三十年前の因幡鳥取市での話。市中で有名な産婆が、これは駕籠で迎えられて一里ばかり郊外の立派な家に往った。非常な難産であったが漸くすみ、山を下り野を行くような感じをして、又送られて駕籠でかえって来た。翌朝縁の外に見事な雉子が二羽、その次の朝は鳩とか鶉とか、鳥ばかりの贈物が一月近くも毎朝続いた。産婦の家もどう考えて見てもありそうに思われなかった。狐の家に相違ないという評判であった。

こんなタワイもない話は幾ら集めても仕方がないようなものだが、土地と話手のかわるに

伴のうて、少しずつの変化はある。それを重ねて見て注意すれば、末には必ずどうして始まったかが知れるはずである。場所と人名などの判明したものを、できるだけ多く集めておきたいと思う。

ひだる神のこと

三十年も以前に、学友の乾政彦君から聞いたのが最初であった。大和十津川の山村などでは、この事をダルがつくというそうである。山路をあるいている者が、突然と烈しい飢渇疲労を感じて、一足も進めなくなってしまう。誰かが来合わせて救助せぬと、そのまま倒れて死んでしまう者さえある。何か僅な食物を口に入れると、始めて人心地がついて次第に元に復する。普通はその原因をダルという目に見えぬ悪い霊の所為と解していたらしい。どうしてこういう生理的の現象が、ある山路に限って起こるのかという問題を考えてみるために、先ずなるべく広く各地の実例を集めてみたいと思う。いったん印刷せられて出ている記事も、参考のため簡単に列記して、われわれの共同の財産にしておこうと思う。

最も古く見えている書物は、今知る限りでは柳里恭の雲萍雑志巻三である。伊勢から伊賀へ越えるある峠で、著者自身がこの難に逢った大阪の薬種屋の注文取を助けた話を載せ、これには餓鬼がつくというとある。目には見えねどこのあたりに限らず、処々に乞食などの餓死したる怨念、そこに残り侍るにや云々とある。

同書には更に附記して、その後播州国分寺の僧に逢ったところが、この人も若い頃、伊予国を行脚して餓鬼につかれたことがある。それからは用心のために、食事の飯などを少しずつ紙に包んで持ってあるき、つかれた人があればやることにしているといった。

大和附近の山地には、殊にこの例が多かったように思われる。和歌山県誌下巻五八七ページに、ある書に曰くと書いて、熊野の大雲取小雲取の山中に、幾らとも知れぬ深い穴が幾つかあって、それを飢渇穴と呼んでいた。旅する者がこの穴を覗くと、たちまち前に述べたような症状を感ずるとて、ある旅僧の実歴談を記している。道行く人に教えられて、口に木の葉を咬みつつ、漸く十町ばかりある山寺に駆け付けて助かったとある。

同じ書には、俗にこれをダニにつかれるという。同県西部の糸我阪にも、これに似た処があるという。糸我の阪は県道で、相応に人通りある処である。

ダニとあるのは聞誤りかも知れない。森彦太郎君の南紀土俗資料方言の部に、山路などあゆみて疲憊するをダリつくというとあり、又日高郡山路の山村に於て、ダリにつかれた時は、米という字を手掌に書いて嘗めるまじないのあることを、同書俗信の条に記している。

大和の方では又、宇陀郡室生寺の参詣路、仏隆寺阪の北表登り路中程に、ヒダル神のといつくという箇処のあることを、高田十郎氏の一人雑誌「なら」第二十七号の奥宇陀紀行にのせている。その難に遭った者を見たのでないが、そこに文久三年に建てた供養塔があり、法界萬霊の文字の下に、十六字の偈と一首の歌が刻してある。

まこゝろに手向けたまへば浅はかの水も千ひろの海とこそなれ

摩尼山下　溪水津々　若供一杓　便是至仁（摩尼山下　溪水津々　若一杓を供えればすなわち是至仁）

今でも食物を持たずに腹をへらして通ると、ヒダル神が取り憑いて一足も動けなくなる難所だといっている。

遙かに懸け離れた長崎県の温泉岳の麓にも、同じような道の災いを言い伝えた地方があって、そこではこれをダラシと呼ぶそうである。故井上圓了氏の「於ばけの正体」という書に、読売新聞の記事を引用して、ある学生がこの山の字小田山という処から降った辻という阪路で、一人の被害者を救い、後に冬休で再びそこを過ぎた時、自分もまたダラシにかかった話を掲げている。動こうとすれば少しも手足が動かず、休んでいると別に苦痛はなかった。何か食物を携えておればこの難がないというが、ある年には鰯売りの男が、鰯の荷の側で昏倒していた例もあるという。

同じ地方の実例の最も具体的なものが四つ以上、本山桂川君の編輯していた「土の鈴」第四号に出ている。同じく温泉岳の周囲ではあるが、南高来郡愛野村から島原の城下へ行く岩下越の峠附近とあって、前のとは別の地点かと思われる。室生の例のごとく精確に一つの地点とはきまっていなかったようである。これもダラシといい、これにつかれると軀中がだらしなくなるといっているが、突然手足がしびれ力がなくなり、冷汗が出て腹がこわばる。又

は腹を抑えてアイタアイタといいながら来る者を見たともあって、前の学生の実験とは少しの相異がある。僅かの食物の食い残りを近い藪の中へ投げたら治ったともある。以前旅人がこの辺で餓死し、その魂が附近に留っているともいい、又かつてここで首を釣って死んだ者があるともいう。米の字を手掌に書いて、嘗めるとよいというのも紀州に似ている。

右のごとく名称は各地少しずつの差があるが、便宜のために分り易いヒダル神の名を用いておく。少しでもこれに近い他の府県の実験談と、もしこの問題を記載した文献があるならば報告を受けたい。理由又は原因に関しても意見のある方は公表せられたい。これだけは既に世に現われた材料であって、自分はまだ特別の研究を始めたわけではない。

ザシキワラシ（一）

紀州高野山の旧記の中に、座敷稚子の事が見えぬというのは、多分二人の紀州人のいわれた通りであろう。しかも私が書物にはなくても、実際あった事かも知れぬといったのは、あの大阪の雑誌に出たという話が、これを信じて報告した人の話らしかったためばかりではない。私は未だ「新社会」を読んではいないのである。

東京にも百年ほど昔、一種のクラボッコが住んでいた例がある。家の人に多少は世間へ隠す心持もあったので、存外に夙く忘れてしまわれ、又は他の不思議と混合せられたのが多いのであろう。本所二丁目の、相生町と緑町との横町であった。梅原宗得という人の家の古い土蔵に、妖怪とはいっても、別に何か害をした話のない妖怪がいた。いろいろの形で現われたという。この土蔵に入って働く者、俄に大小便を催すときは、即ちこの物の出ようとする前兆として、急いで飛び出したということである。

夜は鉄棒を曳く音がした。金剛三昧院の小僧と同じく、これも火防の神として祭られ、この家から火災除の守札を出し、その霊験を認められていた。祭の日はどういうわけか、四月

の十四日であった。燈明菓食音楽等を以て厚く祀ったとある。しかもただの神様ではなかった。ある年近火があって、この家も片付が間に合わなかった時に、見馴れぬ女が一人出て来て、荷物を纏めて庫へ入れてくれる。髪長く垂れて、顔はどうしても見えなかった。やがてその庫の中に自分も入って、うちから戸を閉じたということである。江戸では遙かこれ以下の奇瑞があっても、ただちに守札を受けに来る者があった。祭るのはこのためであったかも知れぬ。古土蔵は石庫で、中には何の変った事もなかったが、ただ隅の棚の上に、五六寸四方の箱が一つあって、昔から置き処を換えず、又手をつける人もなかった。これが不思議の源であろうかということであった。この話は十方庵の遊歴雑記第二編の下に出ている。その梅原氏と古土蔵とは今どうなっているか。あるいはやっぱり焼けてしまったかも知らぬ。

　ザシキワラシの話が、私のこれと一緒に出す田原藤太の話の心得童子と、若干の関係があるらしいのは、偶然ながらおもしろいことである。仏教の方で護法といい、又は天童とも使者ともいうのは、本来その宗教の大きな力を以て招き寄せたものだから、人といってもせいぜい名僧の処へ来るまでであるが、われわれの心得童子は在家にも来て仕える。そうしてその家を長者にせざれば止まぬようである。その中には至ってザシキワラシと近い者もある。出羽の鯉川という処に住む貧乏な夫婦、ある時から、ふとこの類の者の援助を受けるようになった。宝暦七年の事であるという。姿は決して見せたことはないが、どこからともなく人の声で物をいう。後には馴れて怖くもなくなった。主たる援助は夫婦の問に応じて、何でも

未来の事をいってくれて、それが皆中ることであったが、時としては食物などをかれらの求めに従い、何なりとも調えて持って来て食わせる。これと同時に近隣の家では、餅なり饂飩なりそれだけの物がなくなる。人あってその声によってその物を取り留めんとすれば、形は見えないが力すこぶる強く、相撲を取り捻合をする体にして、かつて誰にも負けなかったとあるが、どこまでが誇張の噂であるか分らぬ。津村氏の譚海巻二に出ている。後いつとなくその怪止むとある。

　佐々木君蒐集のものが、ずっと物語化した二人の娘の話などの外、予言はおろか碌に物もいわぬらしいのは、ザシキワラシ以上の不思議である。これは後世どう説明せらるべきものであろうか。もっとも人と神との懸隔は、概して時と共に遠くなるものであるが、出現の回数がだんだんと稀になり、常の事が非常の事のようになるに至って、何も語らずも、姿を見せるだけで目的の全部を達したからと、考えておいてよかろうか。然らば即ち民間巫道の衰微を示すものである。仏教の高僧が護法童子を天から呼んだと同じく、われわれの巫女たちは秘法を以て各自の心得童子を作ったようである。しかしてこれを旅行等に同行する便宜のために、体軀から引き離した魂だけにして連れていたようである。そうすれば勿論人に見えず、又いろいろの物にも宿ることができる。これを自在に利用して、陰から不審の事を説明させ、あるいは他人の身の中までも往来せしめる。ただし一つの不便は、既に不用になっても、もともと自己の体を具えぬ霊魂であれば、他には行く所がない。それゆえにいつまでも

術者の家に留まり住んでいる。これらが旧家に纏綿する所のザシキワラシと関係あるものではなかろうか、もしそうだとすれば、これも今ちょうど、私が「おとら狐の話」の附録において、すこしく説いてみようとする問題である。

最後に今一つ、なにゆえに座敷に住む者が多くワラシであったかということ、これは至って重要な点であるらしい。生きた人間の中では、老人が最も賢明にしてかつ指導好きであることは、殊にわれわれの明治大正における経験であるが、奇なるかな神様には、若い形が多い。少なくとも童子によって神意を伝えたまうことが多い。ザシキワラシもその現象の一つの場合ではあるまいか。未開時代の人の考では、教育や修養によって人柄が改良するなどとは思わぬから、いわゆる若葉の魂の、なるべく煤けたり皺になったりせぬ新しいものを、特に珍重して利用したのではあるまいか。仏教でいう輪廻の思想では、魂は虫や鳥に宿っても同じ魂で、人間に来てから別に成長することもないとしているのだから、一日でいえば早旦、一年でいえば正月が結構なように、暫く休養して来た新しい魂を上玉と認めて、できるならばこれを使おうとしたことが、今日に至るまで、赤児を墓地には送らぬという奇風習の、もとをなしているのではないか。それだとすれば他の亜細亜民族の中に、ぽつぽつ残っている子供を家屋等の守護者とする手段の、話をするさえ恐しい儀などと、遠い昔において縁を繋いでいたのかも知れぬ。ザシキワラシが時として火事の前触をするといい、あるいは又この災を防ぐ力があるとまで思われたらしいのも、かつては火を怖れた人がこれを祀った名残で

あって、すなわちこの怪物の由って来る所を暗示するのかも知れぬ。何にしても、死んだ水子の取扱い方は、われわれの父祖の変った心持を推定する好い材料であるゆえに、私は又別に赤子塚の話において、人の運と魂との、古い関係を考えてみようと思っている。ただし家の中に埋めるという分はまだ少しも注意していなかった。これは佐々木君に頼んで、今後大いに調べて貰わねばならぬ。

その他オクナイサマとの隠れた関係、オシラサマという名前の起り、それからザシキワラシの顔の色の赤いということ、小豆がすきだということ等、それからそれへと仔細を尋ねて行くならば、今この話をただおもしろいと思って読んでいる人達が、漸く国民というものを考えねばならぬ時分になって、顧みてこれ等の書物の存外に深い意味を持つものであったことを感じ始める頃には、ちっとはわれわれ平民の歴史を知る手掛りにもなるであろう。ちょうど今から十年前に、私が佐々木君の話によって遠野物語を書いた時には、誰もザシキワラシなどを問題にする者がなかった。それが現在では、とにかく一団の研究者が起こって、眼を皿のようにして解決の鍵を捜している。そして遠野は佐々木君の力で、学問のための一個の高千穂峰となったのである。無しという返事が来たり、又はまるまるに答の来なかった地方でも、何時かは氷のとけて水草の青い芽が見えるような春が来ぬということもあるまい。どうかこの書物を以て、茫洋たる湖上の一扁舟として、なお更に処々の岸に棹さしたいものである。

佐々木君が遠く各地を旅行するの余裕がなくて、ひたすら猿ガ石川の小盆地ばかりから、ある限りの旧話を搾り取るようにせられたのは、気の毒ではあったが又得がたい好経験であった。この一つの物をじっと見詰めるような態度は、われわれ普通の散漫な旅人には、到底望まれぬものであって、又これでなくては次いで起こるべき蒐集者の手本とするには足りぬのである。この篇は編者自ら奥羽民譚集の第二巻と称している。しからばその是非とも第一巻とせねばならぬ一篇は何であるか。どうか次から次へと相互に脈絡をたどって、世に隠れたる東北文明の尊い起源を明らめ、われわれの霊魂が未だその宿を移さざる前において、鏡に向うようにこの国民の、真面目に対してみたいものである。

（附　記）

この文章は佐々木喜善氏の「奥州のザシキワラシの話」（炉辺叢書）の巻末に書いたものである。

ザシキワラシ（二）

明治四十三年の夏七月頃陸中上閉伊郡土淵村の小学校に一人のザシキワラシ（座敷童）が現われ、児童と一緒になって遊び戯れた。ただし尋常一年の小さい子供らのほかには見えず、小さい児がそこにいるここにいるといっても大人にも年上の子にも見えなかった。遠野町の小学校からも見に往ったが、やっぱり見た者は一年生ばかりであった。毎日のように出たという。十七八年ばかり前、遠野の小学校がまだ御倉（南部家の米倉）を使用していた頃、学校に子供の幽霊が出るという噂があって、皆が往って見たことがあった。友人にこれを見たという人がある。夜の九時頃になると、玄関から白い衣物を着た六七歳の童子が、戸の隙より入って来て、教室の方へ行き、机椅子の間などをくぐって楽しそうに遊んでいたという。それも多分ザシキワラシであったろうと思う。

己が命の早使い

「遠野物語」に、ああいった風な話を、ごくうぶのままで出そうとした結果、鏡花君始め、何だ、幾らも型のある話じゃないか、というような顔色をした人が、だんだんあったけれども、負け惜しみのようだが、自分は、あれを書いてる時から、あの話が遠野だけにしかない話だとは思っていなかった。むしろ、西は九州の果にまで、類型のあるのを、珍重したくらいだった。けれども、それを列記したらば、そのおもしろみが減ると思って、木地を出す事にばかり苦心したのである。

　例えば、川童の駒引の話などでも、あの前から、自分は、内々研究しておって、羅生門の綱の話などと、脈絡のあるという、おもしろい事実を考えていた。

　あの中に、今一つ、ちょっとちがった話で、今お話しようと思うのは、ある金持の家の先祖が、はじめて金持になった時の、由来を書いたものである。

　閉伊川の原台の淵という処を、通って行くと、非常にきれいな女が現われて、この手紙をある処へ届けてくれといった。無筆な男だから、後生大事に、持って来る道で、山伏

に出遇った。処が、山伏が、その話を聞いて、そりゃ剣呑だから開けて見ろといった。そして、開けて見ていうのには、この手紙をこのまま持って行ったら、お前の命はなかったんだ。私が書き直してやろうといって、別に手紙を書いてくれた。それを、何食わぬ顔をして、その男が持って行ったならば、先方にはやはり、きれいな女が出て来て、その手紙を受け取って、開封をして見て、非常に喜んで、お礼に小さな石臼をくれた。欲しい物があるたびに、その石臼を一回し回すと、何でも出てくる。

という話なんだ。処が、こんな珍なる一つの話も、決して、突如として現われたものではない。数百年数千年の、歴史上の基礎を持っている。

　先ず、近頃の同じ型の話を、二つばかりしてみると——

　甲州の国中に、国玉村という村がある。この村に、名は大橋といいながら、極めて短い石橋がある。この石橋は、郡内の猿橋と大変仲が悪い。猿橋の上でこの大橋の噂をしても、きっとおそろしい事がある。

　昔、武州から甲州へ行く者が、猿橋を渡る時に、うッかりと国玉の大橋の噂をした。処が、一人の婦人が、不意と現われて来て、甲府へ行くのならこの文を一通国玉の大橋へ届けて貰いたいといった。けれども、宛先も言わなかったのを、心付いて、途中でこッそり開けて見たら、その中に、この男を殺せ、と書いてあった。

　それからして、大いに驚いて、早速、自分の矢立の筆で、決して殺してはならぬ、と書

き直して、何食わぬ顔をして、大橋へ持って行った。

処が、橋の上で又一人の婦人が現われて来て、甚だ怖い顔をして見ておったが、その手紙を渡すと読下してのちに、急に顔の色が変わって、お礼をいいながら別れた。そして、何の障りもなかったという事である。

これと同じ話が備前の福山附近にある。これはその地名をちょっと忘れたが——

ある馬方が、馬を牽いて、夕方に某地の坂を通ると、やはり婦人が出て来て手紙を一つ托けた。事の為体が何分にも不審であったゆえに、途中で出会った山伏に、内々その手紙を読んで貰ったら、その手紙には、前文御免で、

一、馬牽男の腸　一具
右差進じ候事

と書いてあった。それから馬士は仰天して、やはり自分に都合の好いように書き直して貰って、これも先方へ届けた。

然し、これも別に、金持になるような、打出の小槌も貰わなかったように書いてあった。

この話の日本に於る元祖は、ずっと八九百年の昔にあって、「今昔物語」の中には、これに似た話が二つ三つある。その一つをいうと——

京へ帰る旅人が、美濃路のある処で手紙を一通托せられた。差出人は、やはり女であった。勢田の長橋へ持って行けば、受取人が出て来るという事であった。

これもやはり手紙を途中で開封して見た処が、ちっとも解らぬ事ばかり書いてあった。

何食わぬ顔をして、これを封をして、勢田の橋まで来ると、はたして、水の垂れるようなきれいな女が出て来て、私に托かって来た手紙はないかと聞いた。

旅人は恍けて、その手紙を出すと、女は目の前で開封をして見たが、たちまち面色変じて、お前は悪い人だ。途中でこの手紙を開けて見たろう、とそういった。

するとたちまち天地怪鳴して、旅人の命はあるとないの境ぐらいに行ってしまった。

この話のごときは、なにゆえにこういう思いもつかぬ事が、古今東西かたちを同じくしているか。不思議といえば、事実それ自身よりもこの方がなお不思議なくらいである。しかも、近頃になって心づくと、この話は中国から来ている。顧炎武の「山東考古録」という書物は、泰山を研究した書物である。この中に、かの地方の伝説と称して、こういう話が載せてある。

昔、ある旅人が、山東を旅行して、泰山の麓を通った時に、老人が出て来て、手紙を一通托した。揚子江を渡る日に、河の半ばで現われて来る者に、この手紙を渡してくれという依頼である。

不思議に思いながら、この男は、無邪気であったと見えて、開封もせずに、これを揚子江まで持って行った。

処が、果して、揚子江の中流に行った時に、一人の美しい若い婦人が現われて、その手紙を受け取った。

この手紙の中には別にこの男を殺せとは書いてなかった。

何かお礼の品を貰って、いわゆるこの後話なしという事になってしまった。

しかし、その手紙というのは、泰山の山の神が、かねて自分の娘を揚子江の河の神に嫁入らせていた。そして、山東旱魃に就き、少々雨を送って貰いたいという、依頼状であったという話である。

以上の話でも解らないといえばやっぱり解らない。なぜにこんな突拍子もない話がわざわざ日本にまで輸入せられたか。又、かりに偶合であるとすれば、なにゆえに人の頭脳の中にこういう思い懸けぬ空想が発現したか。これ等は、学者が、万年かかっても、とても明らかにする事のできない人類の秘密で、妖怪研究の妙味も、結局する処、右のごとき神韻渺々の間に行かなければならないのかと思うと、やはり宇宙第一の不思議は、人間その物であるといわねばならない。

山姥奇聞

一

遠州のどの辺であったか、汽車の走る広々とした水田の間から、遙かの北の方に県境の連峰が、ややしばらくのうち旅人の眺望に入って来る処がある。時には雪を持ち、又は白い雲が揺曳している。

かつて私は天龍川の上流から、あの片端を越えて奥山の谷に降りて行ったことがある。人間は水路をたどって案外な入野まで伐り開いて住んでいることに驚いたが、しかし山の力がこれによって少しも弱められたり衰えたりしていないのには更に驚いた。平地に住む者の想像を超脱した寂漠たる生存、これにともなう強烈な山の情緒が、人間の心を衝ってやまない。「遠江国風土記伝」という百年前の記録に「豊田郡久良幾山、奥山郷大井村字泉に至り、巌一所、明光寺の山の上、名づけて子生たわと謂ふ。天徳年間山姥これに住し、時として民家の紡績を助く。多年にして三子を生む。一男名は龍筑房、龍頭嶺の山の主なり。二男は白髪童子、戸口村神之沢の山の主なり。三男常光房は山住奥院の山の主なり」とある。山住の常

光神社は今なお参遠地方の霊神としてあおがれている。この神の使いはお犬即ち狼であって、信徒がこれを招請して、あらゆる邪悪を駆逐治罰せしめるという。

しかも同じ書物によれば、山姥(やまうば)の三子はある時は里に下って民家の小児を害したために、平賀中務矢部後藤左衛門の二人が朝命を奉じてこれを征伐し、その子孫の者ついに土着して奥山郷に住んだという。

母の山姥はこの後秋葉山に逃れ住み遺跡はかの地に存するのであるが、なお後世に至るまで毎年子生たわの岩の上で山姥(やまうば)を祀った。山香(やまが)の相月(あいつき)という村にも山姥の社がある。神の沢では今も雪中に白髪童子の足跡を見ることがあり、山住山の常光房(じょうこうぼう)もまた時として雪の上にその跡を留めて行くことがあると記してある。かの地方の山村の人は知っているだろうが、藁科(わらしな)・大井・気多(けた)・天龍の谷々には、山男の大足跡の噂は絶えたことがない。ただそれが白髪童子の三兄弟の末であるか否かは、信仰以外にこれを決する者がなかっただけである。

二

山姥山姫(やまうばやまひめ)の話は信越の境の山々を始めとして、山国の里に多い。関東から奥羽へかけては、山母はアマノジャクに近いものとされ、今では単なる童話中の妖怪にまで零落している。だが山姥も最初は山をめぐり里に通うて、木樵(きこり)の重荷を助け民の妻の紡織を手伝ったという説があり、北ヨーロッパのフェアリーなどと同じく、単なる空想の産物ではなかったろう。阪田(さかたの)

公時(きんとき)を足柄山(あしがらやま)の山姥の子ということなども、前太平記以前には確かな記述もないようだが、相当根拠のある作りごとであったらしい。阿波の半田の奥の中島という村の山には、山姥石という大きな岩がある。この辺には山姥が住んで、ときどき里の子供を連れて岩の上に出て来て火を焚いてあたらせることがある。それを見たという人も以前にはあったそうな。他の地方の山村でも、冬の特別に暖かい年は、「今年は山姥が子を育てている」と戯(たわむ)れのようにいう処が少なくない。それがほんとうかどうか、信じないのは勿論(もちろん)われわれの権利であるが、何も理由がなくこんな話の発生することはあるまい。説明ができないからといって無視しようとするのは横着だ。

私はこれについて、こんな風に考えている。

第一には、現実に山の奥には、昔も今もそのような者がいるのではないかということである。駿遠でも四国でも、または九州の南部でも、山姥がいるという地方には必ず山爺(やまじじ)がいる。あるいは山丈(やまのじょう)ともいうが、ジョウとは老翁(ろうおう)のことである。山母に対しては山父という語もあり、山姥に向ってはまた山童がある。これを総称しては山人と呼び、形の大きいために大人という名もあった。果してわれわれ大和民族渡来前の異俗人が、避けて幽閑の地に潜んで永(なが)らえたとしたら、子を生み各地に分かれ住むことは少しも怪しむにたらない当然のことである。問題はむしろ文明の優れた低地人が、なにゆえにかれらを神に近いものとして畏敬したかという点にある。

第二には正反対の側面から、山の神の信仰には以前は明らかに狼の恐れが含まれてあった。狼が群をなして移動する威力、あるいはその慧敏と狂猛に恐れをなして、祭れば害をまぬがれるだろうと考えて大口真神の名を与え、更に進んでは人間に準じてその隠れたる成育を想像した。お犬が子を生むという場処は霊地であり、又その季節には戒慎して、特に十分なる食物を寄贈する風習も各地にあった。武蔵の三峰山のごときは今でもこの時の儀式があって、お犬は夜深く吠えて祭の催促を信号すると伝えられる。又狼の首領が老女の姿を借りて人間に往来したという話は多い。さすれば、山姥の子育てということも、これから類推した物語りの類かも知れぬが、それにしては深山の雪に残した足跡が人の足跡であることが、改めて解釈せねばならなくなる。

三

第三には、山に入って行く女のことが考えられる。山隠れする女は多くの場合狂女で、いわば常から山の力の威圧に堪えかねていた山村の女であったが、かれらはしばしば山の神に娶られると信じて喜び進んで山に入っている。ある女は産後の精神異状から山に入ったなどという話もある。

日本固有の宗教には神のお血筋という思想がある。のちには転じて高祖を神と拝む慣習に併合したが、地方の端々にはなお年久しく、明らかに人間以上の神霊を祖先とした家があっ

た。その霊がもし男神ならば、人間の少女を配すると神の子を生むと伝えられる。別に又上総の玉前神のように、姫神にして自然に子を設けたもう例もあった。これがやがてはわが国神道の成長力となったもので、鹿島も八幡も諏訪も熊野も、一つとして御子神若宮の信仰にもとづかずに、その教えを伝播した例はなかった。ゆえにもし山中の口碑が純然たる精神上の破産であったとしても、やはり遠江の奥山に伝えたごとく、今の神は前の神の御子と考えて祭るのほかはなかったのである。

話は長くなったが、私の説は仮定であって、まだ結論でも何でもない。ただ山岳を、いわゆるアルプス党の蛮勇によって始めて占領した空閑の地のごとく考えないように、最後にも一つだけ何か理由のあるらしい奇異なる物語を付け添えよう。

今からもう十七、八年前のこと、私は九州の南部市房山の麓の村に入って、一巻の狩の伝書を見たことがある。文字が横なまって精密な意味は取れなかったが、その一節に次のような話が、唱え言として残っていた。

昔大満、小満という二人の猟師が狩の支度をして山に入ると、一人の女が来て、私は今子を産んだ。産腹を温めたいから何か食物をくれといった。それを一人は狩の前の血の忌を畏れてすげなく拒絶したが、他の一人は快く承諾したというのである。話はこれで終って何の意味か分らなかったが、最近に佐々木喜善君の東奥異聞が出版せられて、始めて一千里の北の端まで、同じ神話の流布していることを知ったのである。岩手県の猟師の口伝にあっては、

二人の名は萬次、萬三郎であった。産をした女は山の神であって、血の穢れをも厭うことなく、その望みをかなえた猟人は永く豊富なる獲物をもって報いられたことになっている。これは常陸風土記の富士と筑波の話、もしくは備後の巨旦蘇民の二兄弟が、武塔天神を待遇した話から、近世になっては瘤取りや花咲爺まで、賢愚善悪の二つの型が、神の選択によって盛衰した昔話のただ一つの変形というに過ぎないが、それにしても山の神が女性であり、山にあって子を産むということがその信仰の重要な一部をなしていたことは、かりに九州と東北と二つの一致がなくても、なお小さからぬ暗示である。問題はただ山を愛する人たちが、こうした山の神秘を顧みるか否かにある。

入らず山

山の神秘と、それが人界に伝わって評判になるということとは、二つ全く別々の話であった。山の人にはわれわれの眼から見ると、少し重くるし過ぎるかと思うほどの思慮があった。第一に山小屋の火の傍では、そういろいろの山の話はしない。現在不思議なものが見えたり聞こえたりしていても、不馴れな若者たちの怖れるのを憐れんでかれらが自ら注意するまでは知らぬ顔をしている。

大井川の上流で雪のしんしんと降る晩に、何度ともなく小屋の周囲を、どしんどしんと大きな足踏みをして、まわってあるく者がいる。何だろうと一人が驚いて問うと、相手の親爺はふんと気のない返事をしたきりで寝てしまう。やがてその足音が止まったと思うと、不意に小屋の棟に手でも掛けて、ゆさぶるかと思うような響がした。キャッと飛び起きて再び老人を喚び覚すと、老人が怒ってどなりつけた。山に寝りゃこんなことは幾らでもある。それをいちいち騒いでいてどうする。黙って寝ろ、といったがなかなか眠れやしない。翌朝は早早遁げてかえって笑われたという話が、駿河新風土記にも出ている。あの辺は殊にこういう

経験の多かった土地である。

素人は山小屋に泊って、火を焚いて夜をふかしている際などに、よくこの類の話が聞いてみたくなるが、早速その問に答えて話すような人は少ない。山にいろいろの不思議があるということは、直接に山の威力の承認を意味する。そんなことをいってしまえば自分が先ず気が弱くなる。だからだまって笑っているだけでなく、中には明白に今まで一向にそんな経験はないと、答える者さえ多いのである。実際また個人として、そうたくさんの物凄い目に遭っている者はなかったろうが、人の話ならば長い間に、幾らでも聞いて知っているのだ。ただそんな場処で問うたり語ったりする問題ではないのである。

多くの神秘談は死の床で、もしくは老衰してもう山で稼げなくなった者が、経験を子弟に伝えようとするついでにいい残すのが普通になっていて、そういう話の聞書には真実味がある。そうでない場合におもしろげに話すのは、作りごとでないまでも、受売の誇張の多い話と見てよい。これは二三度も同じ場合に臨むと、素人にもすぐ鑑別ができるようになる。里の妖怪とは違って、山奥では嚙むとか食い付くとかいうような話は少ない。ただ何ともかともいいようがないほど怖ろしかった。又はぞっとして毛穴が皆立ったといって、話はもうそれで終りである。しかもその時限り猟は止めたといい、またはあの沢だけへは入らぬことにしているという結論に達している。またそれほど大きな不思議ではなくとも、当人はとにかくこれを承認している。何のこれしきのことというような反抗心は抱かない。それゆえにま

たやたらに批評したり、考えたりする者には話したがらないのである。

中にはそういう話ならよくあるという者もあるが、それも否認ではなくて、山の人は始めから総括的に信じているのであった。山には人里において不可能なる法則が、行なわれていることを信じているのである。その中で私が今集めているのは天狗笑い、天狗倒しの類、または木伐り坊などと称して、斧を打ち、鋸を挽く音が長い間きこえ、あるいは数多の人の話し声笑い声、それから雪の深い高山の峰から、笛太鼓の音がきこえるなどというのも、会津の御神楽岳のみでなかった。意味が深いと思うのは一村数十人の者が、われも人も同時にこの幻覚を起こすことである。眼の迷いという方にも、一人が実験し、他はそれを聞いて信ずるという場合のみでなかった。美作のある山奥には池があってそこの水鳥は皆片目であったので、遁げて帰ったという話もある。そういうのも皆共同の信仰であった。山を楽しむ者に完全なる個人主義が行なわれたら、その時は山の神秘の晴れてしまう時であろう。

人の市に通うこと

南方殿の「真の山人」とはいかなる意味なるか。よくわれわれが「かれこそ真の日本武士」などという「真の」ならばご同意である。保守旧弊の山人の裸体徒跣であったことは疑わぬ。しかしすべての山人の子孫皆然りという推論には反証がある。単に裸というような顕著なる事態が記述に漏れるはずはないというだけの消極証拠ではない。拙者は遠野物語の第七節を引証する。即ち言語通ぜず、日本人との合の子を殺すか食うかするような山男が、衣類などは世の常なりとある。この外にも一二の例があるが今引いてしまうのは少し本意でない。要するに山人が米の飯を好み及び衣類を便とするに至ったのは、開化か堕落かは知らず、かの輩近代の変遷であって、拙者はこの風を以て山人中の混血児より始まり、その混血児はこれをその日本人たる片親（多くは母）より学んだものと考える。しからば衣類を織り又は縫うのは如何と詰る人が、もしあったならばその人はあまりに都人士だ。木綿を産せぬ寒国の村民は古着を買うのは常のことである。既に関東の田舎の市日にも、頭巾襟巻足袋股引は勿論、襦袢でも羽織でも何でも売る。一概に古着というができあいの新着もある。皮膚のやや弱く

なった山人は、こっそりと里に下ってこれを買ったと思われる。陸中の海岸大槌町の市の日に、語の訛近在の者と思われぬ男、毎度来りて米を買って行く。この男丈は高く眼は円くして黒く光れり。町の人はこれを山男だろうといっていた（佐々木氏報）。相州箱根の山男は裸体にして木葉樹皮を衣とす。深山に在て魚を捕るを業とし、市の立つ日を知ってこれを里に持ち来り米と交易す。人馴れてあやしむことなし。売買のほか多言せず、用事終れば去る。その跡を追いて、行く方を知らんとせし人ありけれども、絶壁の道もなき処を鳥の飛ぶがごとく去るゆえ、ついに住所を知ることあたわずという。小田原の領主よりも、人に害をなす者に非ざれば必ず鉄砲などにて打つことなかれと制せらるるゆえに、あえて驚かすことなしという（譚海巻十一）。これは不幸にして古着を買った例ではないが、かれらが市に通うまでに開けていたことだけは証明しうる。市人が山男だろうと思うまでにはずいぶん永い間往来交易をしたことと思う。もっとも平和なる田舎の山にも、他国者の杣木地屋が久しく入っていることもある。殊に嶺を越えて隣国の谷川にヤマメなどを釣る爺には、山気に染んで変に無口になっている者もある。この徒が里へ出たのであって、山男とはちと空想と申さるるお方もあろう。口の減らぬ言い草だがそれは鳥の雌雄である。山男が母などに教えられいかにも杣又は木地屋らしく乃至はヤマメ釣の爺らしい顔をして、すまして古着を買いに来る者もまたあるわけである。そして町の者の方で山男だろうと見るのには何か根拠があったのであろう。実は山人が相手ということを承知の上で、もっと自動的の貿易を大規模に行なった

例もある。これは外国では鬼市又は黙市Silent tradeなどといったこと、南方氏最も詳しく知っておられる。諸国里人談又は蘭山の本草記聞などにも、本草綱目の交趾国の奇楠の交易の話が引いてある。日本では武蔵と甲斐との境の大菩薩峠、多摩川奥から秩父大宮へ越える六十里越の道祖神の祠の前、又は内外の日光の境の嶺などで、つい近頃まで黙市が行なわれた。勿論当事者は無名の山人でもなく、主たる目的は双方歩行の倹約であった。しかしその起原を考えてみると、足を厭うという外に、互にあまり顔を合わせたくない者どもが、律義を保証人としていつとなくかかる約束を設けたので、いくらも例があったものと思う。物をいわず吉凶の交際もせず単に当面の便宜のために交易だけをするとなれば、山一つ隔てた彼方の住民が、平家の残党であろうが八掬脛や悪路王の後裔であろうが、一向顧みる値のない差別であったろう。

山男の家庭

山男が市に往来し古着を買い米を買うということは、奇怪なようだが今ではありふれた事実である。なにゆえに古着又は米を買うかという問には、拙者はただその方が暖かいから旨いからと答えるの他はない。しからばいかにして古着の暖かく米の飯の旨きを知るに至ったかと問う人があったとする。これに対してはまたやや説くべき肝要なる箇条が残っていたのである。けだしこの点は山人文化史上最も顕著なる一時代を劃するもので、われわれが山人を研究すべき必要もそれから出て来るのだ。山人はその本能の要求を満さんがために、かれらが敵視する日向人の中からその配偶者を得ねばならなんだのである。勿論かれらの中にも色の白い女子はあった。

熊野山中にて炭を焼く者の所へ、七尺ばかりなる大山伏の来ることあり。魚鳥の肉を火に投ずれば腥きを嫌ひて去る。又白き姿の女の猪の群を追掛けて来ることありといふ。（秉穂録）

熊野の山中に長八尺ばかりなる女の屍あり。髪は長くして足に至る。口は耳のあたり

迄裂け、目も普通よりは大なりしとぞ。（同上）

日向国飫肥の山中にて、猟人の掛置きし罠へ怪しき者罹りて死に居たり。惣身女の形にして色白く、黒髪長く赤裸なり。人に似て人に非ず。これは山の神ともいひ又は山女ともいふものにて、深山に有るものなりと。考ふるに人間の始は全くこの山女より多く生み出せしなるべきか。さあらずはいかで赤子の内生育するの理あるべき。人自然にわき出でたりとは虚説に近し。後世にも阪田公時の如きその証とすべきもの也。（野翁物語巻二）

後半の原人説は引用の必要もないか知らぬが、阪田公時を後世の類例に引き、われわれの難物とする山姥問題を無造作に解決した勇気が頼もしいから出しておく。これと同じ話かと思われるのは、

日向国飫肥領の山中にて、近き菟道弓にて怪しきものを取りたり。惣身女の形にて色ことの外白く、黒き髪長くして赤裸なり。人に似て人に非ず。猟人も之を見て大に驚き怪しみ、人に尋ねけるに山の神なりと云ふにぞ、後の祟も怖しく、取棄てもせず其まゝにして捨て置きぬ。見る人も無くて腐りしが、後の祟も無かりと也。又人の言ひけるは、是は山女と云ふ物にて深山にはまゝ有るものと云へり云々。（西遊記巻三）

薩摩の人上原伯羽の談に、彼国の深山中には時々婦人の姿なる物を見る。髪を振乱し泣きながら走り行くと云へり。思ふに此も山気の産する所なるべし。（今斉諧巻四）

宝暦五年の秋、（土佐）高岡郡影野村往還の路より十間ほど山に入りたる所の松の枝に、髪の長さ三間余ある婦人腰を掛けて居たり。村の者集まり見れば其まゝ飛下り行方知れず消失せり。下は茅原にて候所、分け行きたる所も見えず。草の葉一つも損ぜず候由。田中勢左衛門書中にて丙子（宝暦六年）の正月申し来る。影野は相間氏領知なり。彼家の家来和田彦左衛門に此事を尋ね候へば、夫は昔より折節村の者見申す由。五六尺ほどの茅原を行くとて、腰より上まだ六尺余も見え候由。多くは後姿又は横顔を見たるばかりにて、正向の面を見たる者無しと承り候と云へり。（南路志続篇稿草巻二十三、怪談抄）

信州虫倉山に山女住すると云ふ洞三あり。其中に新なるあり。古洞は谷を隔てゝ古木繁茂せる中に在りて、山燕の巣甚だ多し。新洞と名くるは絶壁の中間に在るを仰ぎ見るに数十丈あり。山女は見ることなけれど、洞口草苔生ぜずして出入する者あるが如し。雪中に大人の足跡ありと云ふ。（越後野志巻十八）

最後の例は姿を見たというのでないから、あるいは例でないかも知れぬが、とにかく山人にも女性があることだけは、帰納法を用いても証出することができたのである。これ等の山女は赤裸とある一事で、山に生まれた者であることがわかる。至っての深山に居る幸福なる山男は、これ等の山女を呼ぶことができて、あるいは永く血統の純を保ち得たかも知れぬが、もともと孤立独走の生活に陥り易く、飢餓に迫られ猟人に追われてあちこちと経廻の中には、

夜などは堪えがたく寂寞に感ずる場合が多かったであろう。その結果や果して如何。日本には人を運び去るような猛獣はおらぬのに、神隠しと称して児女の失踪する者が甚だしく多い。加賀の金沢の按摩曰く、この土地も大きに開けました。十年ほど前までは冬の夜更に町を歩いて、迷子の迷子の誰それと呼ぶ声と、これに伴なう淋しい鉦の声を聞かぬ晩はありませなんだ云々。冬季に限ってこの事の多いのはいずれの地方にも共通の事実であるかと思う。一日の中では黄昏を逢魔が時などともいい、一人出ている者に災がある。このごとき季節や時刻の選択は、超人間力の天魔波旬等が必要とすべきものでない。さて例もだんだんあるが、さのみは諸君の要求せらるる所ではあるまい。拙者はただ近世迷信の進化を説明する料に、ある一点の特色を指示してみたいと思う。それは神隠しに遭った者が、他日必ず一度は親族知音に姿を見せるということである。

盛岡の辺にては黄昏に婦人小児の戸外に在るを忌むこと殊に甚だし。十年ばかり前のこと也。此町に住みて醤油の行商を為す者の妻、夕方戸口に立ちて唯一人外を見て居りしを、近所の人々気遣はしきことに思ひしが、それなりにふと行方を失ひたり。亭主は狂気の如く諸方を求めあるきたれども、絶えて消息も無くして其年を過したり。翌年の夏綱張の温泉に湯治に行き、日暮に宿の外を見るに、僅か一二町さきの山腹の熊笹の中に、かの失せたる妻立ち居たり。急ぎ走り出で追掛けたれども、次第〳〵に遠ざかり嶺の方へ登りて、終に又見えずなりたりと云ふ。（柳田聞書）

陸中岩手郡雫石村の農家にて、娘を嫁に遣るとて飾り馬に乗せ、松明の火を附けて居る間に其娘見えずなりたり。百方に覔むれども其効無し。二三年の後此村の者近村に行きて酒屋に立寄り居酒を飲みてありしに、初夜の頃酒買ひに来たる見馴れぬ女あり。よく見れば我村のかの娘也。あまり奇怪なれば傍人と眼を見合はすばかりにて語も掛けず、女出で行きたる後直ちに潜戸をあけ其跡を附けんとしたれども、早既に遠き影も見えず。足音も聞えず。怪物庇の上に居り女を引上げて還りしなるべしと云ふ。（柳田聞書）

陸中上閉伊郡鱒沢村にて農家の娘物に取隠され永く求むれども見えず。今は死したる者とあきらめてありしに、或日ふと田の掛稲の陰に、此女の来て立てるを見たる者あり。其時は既によほど気が荒くなりをり、竝の少女のやうでは無かりきと云へり。それより又忽ち去り終に帰り来らずと云ふ。（水野葉舟君談）

同郡松崎村の寒戸と云ふ所の民家にて、若き娘梨の樹の下に草履を脱ぎ置きたるまゝ行方を知らずなり、三十年あまり過ぎたりしに、或日親類知音の人々其家に集まりてありし処へ、極めて老いさらぼひて其女帰り来れり。如何にして帰つて来たかと問へば、人々に逢ひたかりし故帰りしなり、さらば又行かんとて、再び跡を留めず行き失せたり。其日は風の烈しく吹く日なりき。されば遠野郷の人は、今でも風の騒がしき日には、けふはサムトの婆が帰つて来さうな日なりと云ふ。（遠野物語）

伊豆宗光寺村（田方郡田中村大字）にて言伝へたるは、此村の百姓惣兵衛が娘にはつと

て十七の女、ゆくりなく家を出でて帰らず。今（寛政四年）より八十余年前の事なり。はつの母亡せて三十三回に当る年の其月日に、此女をのが家の前に佇みけるを、あたりの者見付けて声を掛けたるに、答もせで馳せ出し、又行方知れずなれり。其後も此国天城山に薪樵り宮木曳きなどに入る者、稀にはつに行逢ふことあり。いつも十七八の顔形にて、身には木葉など綴り合せたるあらぬ物を纏ひてあり。詞を掛れば答もせで遁げ行くこと今に然りなりと云ふ。（槃遊余録第三編、伊豆紀行）

帰化した里の女までがこのように長命することの信ぜられぬのは、年老いてまでも日本人の情合を有しているのでも明らかであるが、山に入ってやや永く生存しおることは、物馴れた保護者のあったことを想像せしめる。同じ遠野物語の中には、山女が故里の人に逢って夫とする者の酷薄にして疑深いことを歎いた一条が載せてあった。それから推せば取られた女は誰もかれも末は食われてでもしまったかと思われるが、元来が女という者はよくそんな事をいうもので卑近な譬を引けば夫婦喧嘩を仲裁しにいって恥を掻いたなどというものも同じ消息であろうと思う。酒顛童子のハレムに住まば知らず、泣きながらも遁げて出なかったのには、やはり恩愛の絆があったものと見ねばならぬ。因って思うに、ローマ人の最初の母たちも、またこのごとくにして敵人の家庭を和げたのである。たとい夫は心強く怖しい人であっても、その子に至ってはわが乳房に縋った者である。時には母の独言にも同情し、あるいは昔恋しの里の歌に耳を傾けたものかも知れぬ。語などは母の教えるものである。山男が天

孫人種の談話を理解したとて必ずしも不思議ではない。拙者などは人煙稀少なる山奥の地では、山男が知らん顔をして土着し草屋を作り、今日の大字何々字何々になったのもあろうと思っている。農業などは学びがたい手練秘密のある産業でないから、やや気永に母が勧誘したら相の子の山男などはついにこれを企てたことであろう。いわんやキモノが暖かくしなやかで、米が甘く柔かだというくらいの簡単な真理は、捨てておいても覚りえたであろうと思う。次には山女のことである。女もまた人間であるとすれば、独居して偶を懐うは当然の推理であるが、これが又多くの例証を具えている。

秋田の早口沢と言ふは二十七里の沢間也。去る丁巳（寛政九年）の七月初、此沢六里程奥に長さ二里余の堤を一夜の中に造り出す。両方より山崩れ溪流を塞ぎ留めしを見れば四丈五丈に余る大石にて築き成せり。如何なる者の仕業にや。此山口にはニシコリと云ふ木あれば山猱鬼童のすだくとも云ふ。此山中に折として童の鬼の如くなるを見ることあり。先つ年或人の見る一人の大童は、十人しても抱へ難き大石を背負ひ、うつ伏して澗水を飲み居たり。之を鬼童と云ふ。又或人の云へるは、杣人山中無聊のときは必ず彼のニシコリを焼きて、色々の怪物を集め見ることあり。南部境の山奥にて焼きし時は怪しき女を出せり。薜茘に身を纏ひ荊棘に乱せる尺の髪は白き針金の如くなるが、年の程まだ四十ならず見えしは、兼て聞きたる毛女郎雪女なども是等を謂ふかと思はれたり。ほゝ笑みて杣人に馴れ昵ぶ有様に、杣人も無聊の折からとて之を犯したりと云へり。（黒

甜瑣語第三編巻四）

播州表より和州芳野へ大勢挊ぎに行通ふこと年々なり。予が近在よりも行者多し。或時帰りての物語に、当年は例の働き場所に、さしたる仕事もなく、上市より五里ばかり川上へ入込み、仲間十人小屋を打ち罷り在り候が、或夜八つ頃にてもあるべし。眼の醒めたるもの二三人ありしが、俄かに身毛立つばかり恐しくなりし所に、小屋の入口に下げ置きたる莚を揚げて来る者あり。見れば女なり。身の丈を過ぐる程の髪を乱し、眼の光強く消え入るばかりなりしとかや。見たるものは何れも五七日づゝ気色を煩ひ候ひき。私は仕合よく正体も無く寝入りて別条なく候ひし。後に処の者に尋ね候へば、稀にさやうのことあり、山姥と申す者にてあるべしと云ふ。又木の子と云ふ者、三つ四つ位の子供の如くにして身には木葉を着たり。姿は影の如く有りとも無しとも定まらず。杣人或は山働きの者共、油断をすると中食を木の子に取られ難義仕事に付、木の子見ゆるや否棒を以て追散し申候。是は銘々共も度々見て珍しからず候へ共、此辺にては一向聞かぬ事ゆゑ御話申すと語れり。（扶桑怪談実記巻二）

播州揖東郡新宮村に七兵衛と云ふ土民あり。正徳年中のこと也。山へ薪樵りに行きて帰らず。親兄弟歎き悲しみて二年を経たりしに、或夜同村の後の山へ来りて、七兵衛が戻りたるぞ〳〵と大声に呼ばるを、元より聞知りたる声なれば悦びて山へ走り行けば、近所の者聞付けて共々麓に走り行く迄は峰に声しけるが、尋ね上りて見れば居らず。慥か

に此のあたりなりしとて、追々に集まる人其近辺を残る方無く探し求めたれど、終に見えざればせん方なく皆々帰りたり。さては天狗につまゝれ奴となりたるならんと沙汰しあへり。其後村の者久しく東武に在りて帰国する折柄、興津にて出会ひ物言ひかはしたる由なれば、東国辺を徘徊してあるにやと、東国へ下る者には必ず頼み置きけれども、其後は逢ひたる人もなく、風の音信もなかりしとかや。右は彼が一度村の山へ戻りし時、共に尋ねに行きし人、年経て後語りける趣を書伝ふるもの也。（西播怪談実記巻一）

男の神隠しに遭うたのは未成年者が多い。しからざればすこしいわゆる抜けた男である。この輩が山人の社会文明にいくばくの影響を与えたかは問題である。山姥とは言え女などに勾わかされるような柔弱さでは、果して永く髪結の亭主のごとき地位を保持しえたとは思われぬ。ただし右の七兵衛のごときは屈強な壮男であれば、あるいは話のごとく天狗につまゝれて奴となったのかも知れぬ。しかりとすれば誠に笑止な一生涯であった。

世の物語に天狗の情郎と云ふことありて、爰かしこにて勾引さるゝあり。或は妙義山に将て行かれて奴となり、或は讃岐の杉本坊の客となりしとも云ふ。秋田藩にてもかゝる事あり。元禄の頃仙北稲沢村の盲人が伝へし不思議物語にも多く見え、下賤の者には別して勾引さるゝ話多し。近くは石井某が下男は四五度もさそはれけり。始は出奔せしと思ひしに、其者の諸器縕袍も残りあれば、それとも言はれずと沙汰せしが、一月ばかり過ぎて立帰れり。津軽を残らず一見して委しきこと言ふばかりなし。其後一年過ぎて、

此男の部屋何か騒がしく、宥して下されと叫ぶ。人々出て見しに早くも影なし。此度も半月ほど過ぎて越後より帰りしが、山の上にてかの国の城下の火災を見たりと云ふ。諸人委しく其事を語らせんとすれども、辞を左右に托して言はず。若し委曲を告ぐれば身の上にも係るべしとの戒を聞きしと也。四五年を経て或人に従ひ江戸へ登りしに、又道中にて行方なくなり、此度は半年ほどして大阪より下れりと云ふ。(黒甜瑣語第一編巻三)

一度朋友の中に復帰し得た以上は、こりて又行くまいと思うに、右のごとく呼び出されるのを見ると、何か抵抗し難い力あるように人の思うのも無理はない。又神隠しが中途祈禱等の効験により発見せられた話も多い。その者の精神状態から推して医者はこれを一種の病気と見ている。遺伝に基づく心力の欠陥が病気の内とすれば、その断定も決して誤ではない。津軽南境の田代岳の麓村で、農家の娘気が変になり、おれは山の神へ嫁に行くのだと常に言い、ときどき飛び出す様子のあるのを、よくよく用心している処、ある日家人の眼を盗んで家を出で、心づいてそれと追い掛けたるに、走ること飛鳥のごとくついに田代岳に入って見えなくなった事がある。これは狩野亨吉先生の話であるが、あの辺一帯の山彙においては、山人は久しく相応な優勢を保っていたらしく見える。

狒々

いわゆる山丈山姥の研究を徹底的ならしむるには、是非とも相当の注意を払わねばならぬ一つの問題がまだ残っている。それは屢々深山の人民と混淆せられて来た狒々という獣類の特性、及びこれと山人との異同如何である。全体狒々というような獣が果してこの島にいるかという事が、現代学界の疑問であるのに、近年自分の記憶するだけでも狒々を捕ったという新聞記事は二三にて止まらず、更に前代の記録にわたって攷察すると覚束無い点が多い。本草家に限らず、日本の学者には妙な一癖があって、中国にある物は日本にもあるという前提から議論する場合が多い。益軒ほどの先覚までが、往々にしてこの弊に落ちている。陸地を踏まねば移ることのあたわぬ動物においては、殊にこの予断は危険なはずであるが、例の山𤢖木客から狒々の類までも、いつの間にか遠い国土の記述が和訳せられてわが邦のことのように伝えられている。言海を引いて見るとこうある。「ひゝ(狒々)、怪獣の名、深山に棲む、猴に似て極めて大きく、又極めて猛く、人を見れば大いに笑ひて脣其目を蔽ふと云ふ。詳ならず。猴の年を歴たるものをいふにや。ヤマワラハ、ヤマワロ(以上)」これでは日本で

ヒヒという物がこの通りであるとしか見えぬが、そうでないらしい。本草啓蒙四十八などを見るに、狒々の上唇至って長く笑うとき目を掩うゆえに笑わせておいて唇の上から錐で額を突き刺して捕えるというのは実は外国における話であるようだ。日本のヒヒの唇の寸法は未だ必ずしも検せられなかったのである。しかも中国の一地方でこの物を山笑と称しわが邦には又ヤマワロと名づくる物が山にいるというのを、同じく「山笑う」の意と解し二物同じと認めたので、而もヤマワロのワロはワラハの方言で山童の義であるのを察せなかった。従って狒々深山中に棲むといい「木曾飛州能登豊前薩摩に有りと聞けり」とあるのも二者いずれを意味するかわからず、「人形にして毛ありて猴の如し。毛は刺の如くして色赤し、死すれば脱落す」とあるも、狒々の話か山童の話であるかを決しかねる。ただ疑を容れざる一事実は、近世各地で遭遇し乃至は捕殺した猴に似てこれよりも遙かに大なる一種の動物を、人がヒヒと呼んでいたということだけである。和訓栞の狒々の条には安永以後のある年に伊賀と紀州とにこの物現われしことを記し、更に天和三年に越後桑取山で鉄砲を以て打ち取ったのは大さ四尺八寸云々、正徳四年の夏伊豆豊出村で捕ったものは長七尺八寸余云々と述べている。ただし最後のものは果して狒々であるか否か疑わしい。面は人のごとしとあるがしかも鼻四寸ばかり手足の爪は鎌のようで水搔があったとある。この類の怪獣記事は江戸期の随筆類には往々にして見えており、いずれも伝承の際に誇張があったとおぼしく、画図などの添う者はかえって不信用の種が多い。すなわちその獣が真の狒々か否かを究める前に、果して話のような動物が

ありうるかを問わねばならぬことになる。ただしいずれの場合にも何か猟師も見たことのない異獣を獲えたというだけはうそでないらしい。内閣文庫に在る雑事記という見聞録の巻四十にも、天明二年に会津磐梯山の麓塔沢の温泉で滞在中の少年が幾人も取られるのでこの山に怪獣あるを知り、ある武勇の者生きてこれを打ち留めたという物の図を載せているが、これなども尾と水搔とあって鼻は天狗のように長く、それで立ってあるくとあるから、何物とも解しがたい。そこで自分などのかねがね考えていることは、これ等前代の記録を能う限り多く集めて見るも一方法であるが、それよりも急務は静岡の新聞などに冬になるとほとんと毎年一つくらいずつは現われる狒々捕殺の事件を精査して行くことである。これとても十年か二十年の間には大袈裟な噂になって、始末がつかぬようになるかも知らぬが、幸に後から後からほぼ同じ地方に同じ出来事が繰り返されているから、今の内なら土地の人についても、果して猿の年経た者という世上の説が正しいかどうかを知る方法はあろうと思う。新聞の報道は常に一度きりで滅多に正誤なども出ぬから疑えば疑われるが、あるいは蜜柑畠へ来て荒すのを撃ったとか、鉄砲の上手な町の医者が打ち留めて持って還ったとかいう類の話があって、志太郡島田あたりのこともあったように記憶する。こういう実地の例によって狒々と漢訳してよい一種の猴が日本にもいること、乃至は普通の猴の中にも稀には非常に強大かつ神怪なる者のあることが立証せられることになると、神隠しその他深山の蛮民の所為と認められていた多くの不思議が何でもなくなるかも知れぬが、同時に又いわゆるヒヒはそれ程

大きなえらい動物でもないと決すると、結局古来猿神などと称して人の怖れていた怪物は正真の山男を誤認していたことを知るに至るかも知れぬ。有斐斎劄記の一節にある宝暦中越後の山中で撃ち取った狒々のごときは、これを実見した人上京しての談話に、「獼猴とは類せず、別種の物ならん」というたとある。この物常に山巓に拠り大石の上などに踞まり居り、これを見た人もし頓首跪伏して通して下されと頼めばあえて害を加えず、無事に行き過ることを許したとあるなど、だいぶ山人の方に近い話である。

山の神のチンコロ

日本の動物学が未だ山の迫海の隈の総てを支配しておらぬことは、遺憾ながら既に犬神土瓶神の話についてもこれを認めざるをえなかった。出雲の人狐、伊予の犬神などは、往々路傍にその死屍を見るという話さえあるのに、見た人が常に素人で、今以て不必要なる畏怖を散ずることができぬ。拙者が畠にも大学あたりで調べていただきたい獣がだいぶいる。その一つをここへ牽き出して来てみよう。信濃奇勝録巻三に曰く「八ケ岳（諏訪郡）の麓槻木新田の上には老木の穴洞の中に小獣ありて住めり。之を名けて山神の猲子と謂ふ。鼠よりは大きく猫の子ほどにて、鼬の如くにして尾は短く脚も矮し。冬月霜の降る頃に出づ。趫捷にしてよく走るが故に、審かに其形状を視ること能はず。毛色最も麗しく淡白淡黄或は黒白の駮あり。木曾にて山神のオコヂョと云ふもの之に同じ。安曇郡に云ふ貂鼠の類なるべし」オコジョという語は何を意味するかまだ知らぬ。とにかく普通のイタチ又はテンではないらしい。木曾名勝図絵巻三には左の如き記事がある。「木曾の深山に山神の猲子と云ふ物あり。形猫の子の如くにして少しく大なり。頭は栗鼠に似て短尾矮脚、毛色或は薄白く或は淡黄にし

て腹の下白し、或は鹿の如く斑文ありて脚黒し。人を見て驚かず。三四匹づゝ群を為し、十月初雪の後山中の小屋に居れば旁に来る。之を捕ふれば山神の祟ありとて敢て捕ふる者なし」。山の神の何々と呼ぶ動物植物は随分多い。これも前に名ができて後に怖れたのかも知らぬが、とにかく山人の住みそうな深山でなければ居らぬのを見ると、今一段と深い由緒のある名称かも知れぬ。前にもいったごとく、海道では大井川の川上が山人の都であるが、そこにもこの物がいてその記事が一層幽怪である。駿河志料巻三十によれば、「駿河安倍郡井川村の山中に里人が山神の𤢖と名くる一種の怪獣あり。小さき獣にて毛色は白又は黒、或は白黒交れる斑もあり。鼠の大さなれども形は黒犬の如く、耳を垂れ尾を巻き、鳴く声も亦犬の吠ゆるに似たり。常には之を見ること無し。稀に見ることあれば杣人などは溪水に垢離を取り、山神の森に向ひて山中無事ならんことを祈る。此獣多くは山神の森に見るが故に里人かく名けし也」とある。深山にある山神の森についてはまた言うべきことがあるが、要するに霊異ありとして斧を触れない寂寞の場処であるゆえ外では見掛けぬ物も住むのであろう。同じ大井の谷の西岸、遠州上川根村千頭郷の中にも、寸股川の上流には細尾という僅か二戸の里があった。「深山昼暗く人を食ふ獣ありて住めり。俗に之を山鼬と云ふ。細尾の住民此獣の為に食ひ尽されて今は人家無し」と、遠江風土記伝巻十三にあるのは、食われる処を見たような記事であるが、恐らくは同じチンコロに負せた冤罪であろう。近世の博物図にも採録せられ、処々の見世物には勿論よく出る雷獣という動物は、拙者はこれと同じ物でな

かろうかと思っている。紀伊続風土記の産物部に、「木狗、クロンボウ、本草に俗に雷獣と云ふ。大抵形小狗の如く体細く尾長し。全身黒色にして咽の下より胸まで一道の赤黄色あり。歯爪堅利にして飛走甚だ疾し。天気隠晦し又風雨の時は其勢益甚し。其糞香ありて麝香の如し。先年より高野山奥及び有田郡山保田庄山中にて捕ふること間々あり、日高牟婁両郡の山中にも亦あるべし。土佐には他色のものありといへど未だ見当らず」とある。毛色はともあれ尾の長いというのが気になるが、クロンボウという名からかく想像する。クロンボウは又山人族の外称の一つであった。和漢三才図会巻四十に「玃、音却、和名ヤマコ、按ずるに飛驒美濃の深山の中に物あり、猿の如くにして大きく黒色長毛なり。能く立ちて行き又よく人言を為す。予め人の意を察す。敢て害を為さず。山人呼びて黒坊といふ。互に怖れざりしももし人ありて之を殺さんとすれば則ち黒坊先づ其意を知りて疾く遁げ去る故に之を捕ふること能はず」と記してあるのは、正しく山男の一つ話であって、これからサトリという別名も起こり、駿台雑話だったかにはこれに基づいた教訓譚までできている。この黒坊と紀州のクロンボウと同じ物だというのではないが、いずれ一方の名は他の一方から転用したもので、従って雷獣も山神と関係があるのではなかろうかと思う。もっとも飛州志には三才図会に「飛驒の黒坊のこと見ゆれども古のことにや今は其沙汰無し」とある。噂話には訛伝が多いから、吟味をしたら証拠不十分に帰せざるは稀であろうが、さりとて空から又書物からこんな話が起こったと断定しえない。狒々の話でもまたそうである。狒々が日本におらぬと

きまっても、狒々と誤り名づけられた猿だか人だかはいたのかも知れぬ。名前などはいずれ物識（ものしり）が後につけたものであれば、それに合わぬのはただちに虚誕（きょたん）の証拠ではない。

大人弥五郎

弥五郎という巨人があったという話は、かつて竹崎嘉通氏も報ぜられたことがある。その大要をいうと石見（いわみ）国邑智（おうち）郡田所村大字鱒淵字臼谷に三丈ばかりの滝があって、その滝壺を弥五郎淵という。昔巨人名を弥五郎という者、石臼を負うてこの地を過ぎ、誤って滝に落ちて死んだと伝え、滝の中程の岩に足跡の如き凹がある。臼谷はすなわちその石臼の流れ止った地である。弥五郎淵の水は鱒淵本村の高善寺淵と地下に通ずと称せられ、巨人の屍は地底を流れてその高善寺淵に浮かび出たという云々。これは例の大人足跡の数多い村話の一つであって、類型を諸国に求むれば限（かぎり）もなくあるが、自分の特に珍しいと感ずるのは石見でも大人の名を弥五郎といい伝えていたことである。

三国名勝図会などによれば、ずっと懸け離れた日向大隅あたりで、やはり大人弥五郎のさまざまの昔話をば伝えている。例えば大隅囎唹（そお）郡市成村大字諏訪原の二子塚（ふたごづか）は、塚というよりも小山というが当っている。平野の中に駢立（べんりつ）して一は高さ二十丈ばかり周り五町四十間ばかり、他の一は高さ十一丈周り二町三十間ほどで、相へだたること一町内外、樹木なき芝生

地である。昔大人弥五郎が草畚（簀？）で土を運んでいたところ、棒が折れてその土がこぼれ、この二つの塚になったので、片荷は土が半分残ったために少し小さいのである云々。この話も至って弘く行なわれているもので、本誌にもすでに幾つかの報告があったが、これを関東各地方の「だいだ坊」山移し譚に比べて最も著しい相異は、海南二州の大人にあっては更に重要なる後日譚の附随していることで、大人が必ずしもその非凡なる強力のみを以て名を轟かしたのでないことは、これによって少しずつ判って来るのである。毛坊主考の余論として今度はこの問題を片端述べてみよう。

かの地方のいい伝えでは、大人弥五郎は終に殺されたといっている。大隅姶良郡国分村大字野口の枝の宮という社は、弥五郎の四肢を斬って埋めかつ祀った故跡である。なお鼻面川にはかれの鼻を埋めたといい東国分寺大字福島ではその弓を埋めたと称している。同じく国分村大字上小川には拍子川という川あり、その橋を拍子橋という。土人らは昔大人隼人という夜叉のごとき者あって、ここにおいて皇軍に誅伐せられたという話を伝えている。大人隼人記という書物に曰く「大人弥五郎殿は上小川の拍子橋に於て日本武尊御討ちなされたり、其時舞躍して手拍子を取りしよりこの名あり云々」（以上三国名勝図会）。

大人弥五郎を隼人という武士みたいな名にしたのは、多分は八幡愚童訓などの八幡王子が隼人を誅戮せられたという記事に合わせたものであろう。同書下には次の如く記している。「隼人打負テ頸ヲ被レ切、故ニ悪縁トナリ依レ致ニ其難一、御幸ノ前ニ八二百人騎兵奉レ随、隼

人打取給御鉾ヲ号シテ名ニ隼風鉾一、実長八尺広六寸也云々」。即ち御大将は日本武尊ではないが、御孫の応神天皇と同じきがごとくに伝えらるる王子神であったというので、つまりはこの口碑の大隅正八幡宮即ち今の鹿児島神宮の祭と因あるものなることを示している。現今この地方の神社で大人弥五郎の故事を伝えているものはいずれも八幡である。その一は日向北諸県郡山ノ口村大字富吉字的野の円野神社、古くは的野正八幡宮と申せし社の十月二十五日の例祭に、浜殿下りという儀式があって、朱面を被り刀大小を佩いた一丈余の偶人を作りこれを大人弥五郎と称し、四つ輪の車に載せ十二三歳の童子数多これを押して行く。隼人征討の故事によるものというとある。大隅囎唹郡末吉村字中島の八幡宮十月五日の祭にも、同じく浜下りの式あって大人の形を作り神輿の先払いとする。長一丈六尺、梅染の単衣をき大小を帯び四輪車の上に立つ、これを大人弥五郎というとある。明治神社誌料には同郡岩川村大字中ノ内の八幡神社の条に地理纂考を引いて、ほとんとこれと同じ事を述べているが、二社別々であるか否かを確めえぬ。ただしこの方は祭日が十月十五日である。又大人弥五郎は武内宿禰のことだとの説もあるという。

大人弥五郎と称する人形の祭は、前にすこしく述べおいた奥州津軽その他のいわゆる佞武太流しといかにもよく似ている。旧日本両極端の地ではあるがこれは偶合であるまいと思う。しかるに季節においてもちょうど二者の中間に、地理上からいっても大隅と陸奥との中程なる、

越前大野郡のある村においてまた同種類の儀式が行なわれた。大野郡誌によると、同郡下味見村大字西河原では正月十五日の左義長に、大なる藁人形を作って両手に日の丸の扇を持たせ、左義長の火の中へ入れて共に焼く。これをヤンゴロと名づけた。昔弥五郎という悪者あって全村を焼いたのを火刑に処した。その記念ということである。ここには大太坊のような伝説は伴なわぬかも知らぬが、悪者の人形に日の丸の扇を持たせるは、兇暴によって誅罰せられた大人に梅染の単衣を着せ大小を差させるというのと同程度の不思議で、つまりは二者に共通なる弥五郎という名称の陰に、何か隠れたる仔細があるらしいのである。関東でも野州氏家と喜連川との中間旧奥州街道最初の峠の名を十貫弥五郎坂という。坂道半分上って右手の山に弥五郎の墳があった（武奥行程記）。この弥五郎などは、いかなる経歴の弥五郎か。往来からは見えぬが石碑も立っていたそうだ。ご承知の人があらば教示を乞いたいものである。

話がこれまで進んで来ると、どうしてもちょっと批評を試みねばならぬのは愛知県の県社津島神社の境内社に、弥五郎殿の社と祀らるる神の由来である。後世社家の伝うる所では祭神を弥種継命といい、あるいは又弥五郎をそのままイヤイツヒコなどとも称えていたが、塩尻の著者の説によれば、この地方の名族堀田氏の旧記に、その祖先弥五郎正泰なる者、正平元年戌の年の七月十三日に、家の高祖武内宿禰を祀ったのが最初で、これに由って社名を弥五郎殿と呼ぶのだそうである。しかし社の名は常に祭神の名に従うのが延喜式以来の旧例で、

殊に信者もしくは勧請者の名を呼ぶが如きは、なんぼ中古からの事にしても穏当でない。この社の創立のずいぶん古いことは、遷宮牒の残欠が伝わっていて、応永十三年十月以後度々の遷宮が記録せられているので疑をはさむことができぬが、しかもその堀田家の旧記というものが果してどのくらい旧いのか。今少し具体的にいえば、偽本の評ある浪合記などの出てから後のものか否か、果してこれに基づいて編述したものでないかどうか、今となってはこれを明らかにする途がほとんとないのである。尾州から出て大名になった堀田家が紀氏を称し武内宿禰を祖先としていたことは人の知る所で、弥五郎殿を武内宿禰ということは大隅にもあるが、何よりも奇異に感ぜられるのは八幡でもない津島天王の末社に、紀氏の祖神が祀られていたことである。

浪合記はもと美濃高須の徳川家にあった書で、それが世に現われたのは宝永六年の七月、その発見者はやはり塩尻の著者天野翁である。南朝の王子良王君難を避けて尾張に隠れ、堀田大橋らの土豪の援助を得て、終に津島社の神職となられたことを述べたもの、記事中に見える年号は文正元年を以て最後とするが、王子の叔父に当るという世良田萬徳丸政親が遊行上人に命を救われ、三河の松平に住して次第に家栄えたことを力説しているのを見ると、少なくとも徳川氏の天下になって後始めて筆録したものと察せらるる。しかして津島の弥五郎殿社の根源はこの書中にそっくり出ているので、弥五郎殿社本の名は佐太彦宮、堀田弥五郎夢想によってこれを崇祀し、時人願主の名によりて弥五郎という。祭神は武内大臣と平定

経、定経は地主の神也とある。この定経は塩尻に大橋太郎貞経ともあって、大橋一族の先祖らしいが、この家は源平乱後に尾張へ移住したもので、そのような新分家の初代を武内大臣と相殿に祀ったというのも、又これを地主神というのも共に受けられぬ話である。浪合記の中にはまだ幾組かの矛盾撞着が潜んでいるらしいがいちいち取り立てていうにも及ばぬ。かりに全然の虚構でないにしても、茫漠たる口碑の断片を遙か後年に綴り合わせ、つい一通りの鍔目を合わせておいたに過ぎぬらしく、善意に解したところで応永以来既に存していた津島の弥五郎社が、この社に仕えていた社家中の有力者堀田大橋の遠祖と関係があることを知るまでである。ただわれわれとして注意すべきはこの社の創立を七月十三日とすることと、その一名を佐太彦宮と呼んだ点である。大人はある地方では猿田彦のことだとも伝えている。伊勢の多度神社はこの神を祭ると称し、その末社中に三つの何々大人社がある。大人の足跡を地方によっては大の足跡といい、又神事の行列に出る鼻高の面を「王の鼻」という例は多い。因幡などでは大人の足跡を猿田彦の神跡と解する者もあったことが因幡誌に見えている。そして津島の弥五郎社のごときも、地主神とあるのが正しいとすればこれを国神たる左太彦の名に繋くるも差支がないかも知れぬ。

塩尻の天野翁のごときは右の浪合記と内容を同じくする堀田家譜の記事を信じ切っておられたゆえに、他の処々の天王社の末社に弥五郎社の多いのは甚だいわれのないことだと論ぜられたが、津島の弥五郎殿にして実際社人又は有力な氏子の祖先であったとすれば、その事

実が永く隠されているはずもなく、これを知りつつそのような特殊の末社までを勧請するはずもない。殊に地主神に至ってはいずれの地にもそれぞれ既に存するがゆえに、それを本社から移して来る者はあるまいと思う。しかるにもかかわらず弥五郎を末社とする社が往々あったというのは、何か別途の仔細があったものと考えてみるべきであった。今日でも名古屋の廣井天王（州崎神社）の境内に一の弥五郎社あり、祭神を武内宿禰と称している。元和以前に建立せられた古社である（名古屋市史社寺篇）。美濃可児郡上之郷村大字中切の牛頭天王も古い社であるが摂社の弥五郎殿社には永禄六年の棟札を伝えている。この天王もとは宝泉寺という山伏寺の鎮守神で明治の初めまでやはり真言派の法印がこれに仕えていた（明治神社誌料）。この社でも津島の天王と同じく祭礼には車楽を牽出すのが例であるが、その期日は旧暦七月十四日で、それは十一艘の飾り船を出すのに反して、ここは二輛の真の車楽を牽くことになっている。土地のいい伝えでは近郷の送木という里に昔時送木御所という人があって神鉾を献納したといい、今でもその村の者が来て鉾だけは装る例になっているというのは、何か尾張の方の伝承と異った由緒が存していたものと思われる。

津島の車楽祭は海道第一の評あるはなやかな祭であった。その期日は各地の祇園と同様に六月の十四日で、十一艘の船を飾り立てて神輿に供奉するのはいわゆる浜下りの一形式であろうが、これをしも「だんじり」というのは珍しいことと考えられていた。他に確とした旧記もないから不本意ながら浪合記を引くが、浪合記にはこの儀式の起こったのは永享中の

事で、いわゆる四家七名字の祖先の者共天王の神託を拝し、良王君に讐をなす佐屋の台尻大隅守がこの日祭を見に押し渡るを待ち受け、十艘の飾り船を以てその船を取り巻き、ことごとく大隅が一類を討ち取った。それよりしてこの日の祭には右の光景をかたどって十一艘の船を出すことになり、後世に至るまでだんじり討と囃すべしとの良王の命に従い、毎年この囃子変ることなしとある。この話の真偽如何は必ずしも佐屋に台尻氏なる者が住んでいたか否かを詮議するまでもなく、八幡の祭に大昔王子のために誅戮せられたという大人弥五郎の人形を車に乗せて曳いた例、あるいは越前西河原の兇賊弥五郎の記念祭なるものを考え合わせてみれば、測り知ることがあまりむつかしくない。「だんじり」が津島の天王だけのものならばあるいはこういう話も永く用いられうるか知らぬが、縁もゆかりもない中部諸国の神祭に、この物を牽き出して神幸を送る例は多いので、「だんじり」という語の意義こそは不明であるが、鉦鼓歌舞の花々しい歓楽の背後に、今人の感覚にはやや強烈に失する殺伐なる昔語を潜ましめていたことが、髣髴として窺い知られるというに過ぎぬことである。若狭高浜町の県社佐伎治神社などでも、以前は六月上酉日の大祭に太刀振という式あり、氏子ら刀を抜いて撃ち合いをしてのち、やはり「だいじりうった」と口々に罵ったという。この社の祭神は素盞嗚尊外二神で祇園祭には相違ないが、祭の式は津島天王と異っているのに、伴信友翁のごとき学者までがこの社の式内の神なることを主張しつつも、しかもその「だいじりうった」を尾張から模倣したもののように説かれるのは、理屈に合わぬことである。

自分の見るところでは、尾張の台尻大隅守は取りもなおさず越前又は日向大隅の弥五郎である。従って今日社家の伝うるところに合致すると否とを問わず、津島末社の弥五郎殿は必ず車楽祭の最初の目的と関係する所がなくてはならぬ。そして弥五郎が果して実在の人物であったか否かに答うる前に、是非とも一考してみねばならぬのは牛頭天王と御霊会との関係である。京都ではいわゆる八所の御霊のごとき、近世に至ってすでに儼然たる独立の社となったが、山城朝廷の初期に御霊の祭を行なわしめられたころには、時に臨んで祭場を設備し、これを古来の神々のごとく常在の社地とは認められなかったのである。御霊会が年々時を定めて繰り返さるることになってのち、すなわち祇園今宮等の社は起こったのである。これらの臨時の社がかの時代の神道に同化した道筋は非常に簡単であった。僅々百年余の間に早くも主なる宮社の中に地位を占めて、むしろ次第にその当時の諸大社を御霊化したといってもよい。しかも御霊に対する世人の畏怖は増しても減ずることがなかったゆえに、古い御霊が高い地位に昇ると共に第二第三の御霊が祭られ、ついに前述のごとき兇賊退治の昔話を発生するに至ったのである。御霊は日本の語でいえば「みたま」である。太古以来の国魂郡魂も同じことで、本意は現人神すなわち実在した人の霊を祀るというに過ぎなかったが、平安朝初期の御霊は特に冤枉を以て死んだ人々をのみ祭るような信仰に変化した。武家全盛の時代を経過して、名だたる多くの荒武者が神となったのも、つまりはこの威力の怖しさを体現した結果であって、何でも強い人が死んでなる神というところから、御霊の社とさえいえば多

くは何の五郎という人を祀ると伝えられた。美濃で落合五郎、信濃で仁科五郎、会津で加納五郎、下総で千葉五郎、相州で曾我五郎の類、勿論そんな武士はあったにしても、神と称えたのは御霊の音に近かったためである。なかんずく鎌倉では御霊の宮を鎌倉権五郎ということ、最も弘く信ぜられた説である。もと梶原村にあってかれが後裔鎌倉権八郎某なる者これに奉仕したともいうが、要するに最初は鶴岡の八幡に従属していたものに違いない。八幡はそれ自身が祇園と共に最古の御霊祭場から発達した神である。それゆえに九州などでは八幡社の末社に御霊が多く、又意外な西国の田舎に権五郎景政が建立したなどという八幡が多くある。いずれもこの神が今のように盛んになった当初の動機を暗々裡に語るもので、権五郎の権も弥五郎の弥もどういうはずみに附着したかは知らぬが、御霊即ち人間の亡霊の是非とも慰撫しかつ送却せられねばならぬことを固く信じていた人々の、やさしい心持を今日に遺しているものに他ならぬ。そしてその弥五郎の御霊という思想中に、国魂即ち先住民の代表者ともいうべき大人に対する追懐もしくは同情を包含していた例がありとすれば、いよいよ以て我邦民間におけるこの種信仰の由来古いものなることが察せられるのである。

（附　記）

信濃時事の記者中原君の話に、三河八名郡富岡の附近で、ヤハタヤゴロウ（八幡弥五郎）という神の名を耳にしたことがある。ただし軍隊にいた頃の忙しい行軍中のことで詳しい話は

知らぬという。この件誰かご承知の人はご報告を乞う。

じんだら沼記事

相模野のまん中、今の横浜線淵野辺の駅から東南へ小一里のところに大沼小沼という二つの沼がある。これが以前「郷土研究」へ報告せられたじんだらの沼であることは、他にはもう沼らしいものがないのだから推定してよかろう。あの奇抜な人を楽しましめる伝統が果して現在どういう形で行なわれているかを試すべくこの十一月末の晴れたある日落葉を踏んで訪ねて行って見た。昭和五年に出た二万五千分一図に比べると地形はもう大分変っていて、附近には開いたばかりの畑が多い。場処は正確にいえば神奈川県高座郡大野村で大字鵜野森に属する東の方の小沼は僅かな水溜りと堀とを残してあらかた一毛作の水田になっている。一方それから西にならんでいる大沼の方はことごとく蘆原となっていて、舟もなく小高いところもないから、中央に水面があるのやらないのやらも確かめることができない。ただその西北岸の大沼神社と、それから南北に連なる大沼新田の民居とによって以前の沼の位置を誤らないだけである。

大沼新田の広い通りの四つ角には、寛延の年号を刻した石地蔵がある。もうその頃から表

向きの名が大沼であったことは疑いがない。しかしこちらは面積が八町歩ばかり今一つの方も大よそ同じ広さで、これを小沼ということは少しく当っていない。単に同じくらいな沼が二つならんでいて、一方が早く開けて大沼と呼ばれることになると、勢い第二のものは口拍子でも、小沼とならなければならなかったのであろう。地図の上だけでは想像もつかぬことは、このいわゆる大沼の北に連なって街道と併行した細長い窪地があって、現在はこれが最も沼らしく青々とした水をたたえ、周囲の畠地の縁へ水苔などを多く漂着させている。その岸に住む農夫に尋ねてみると、今は水窪と呼んでいるそうだが、これが多分じんだら沼に対する、ふんどし窪なるもののことであろう。

周囲の地形を見てもよくわかるが、大沼、小沼は二つとも元はほぼまん丸な恰好をしていた。それがある時期の一部の人の間にもせよ、とにかくじんだらという名称が行なわれた原因かと思うと、独りで眺めていても思わず笑いたくなる。

関西の諸君にはあるいはわかるまいが、ジンダラはこちらの方言で尻餅をつくことである。それも後へ倒れてただ一度だけつくのでなく、両足を前へ投げ出してばたばたさせ、そのために尻のふくらみを土に印することで、すなわちまたジダンダという語とも縁を引くかと思われる。漢語で頓足というのがこれに当るであろう。口惜しくてたまらぬがどうすることもできぬという場合に、昔はあぐらでいたからこれをよくしたのだが今日はもう幼な児にもこんな挙動は見られなくなり、そのために又ダダヲコネルという複合動詞が一段と意味不明に

なっている。関西の方では尻餅と地団太とは、全然縁のないように考えられているであろうが、たった一ぺんだけ尻を土につけることを餅をつくというのも実はおかしく、立っていて足ばかり上下させるということも誰にでも可能な芸当ではない。こんな小さな常人の習癖でも世と共にいつかは変遷し、言葉は案外に長く伝わるのである。爪弾きとか後指をさされるとかいうことも今日はすでに一種の修辞であって滅多にわれわれはそういう挙動をする者を見かけなくなっているのである。

近頃の方言集の中には東国のジンダラを地団太と訳しているものも折々はあるようだが、それをどういうことをするのかと問い返してみると、恐らくは答はもう区々であろうと思う。

ところが相模野のじんだら沼では現にその痕が沼の形で残っているのだから明らかに古い方の尻餅であったことが知れる。大昔大太良坊という滅法界に巨きな人があってここへ来てジンダラを踏んだので尻の跡が窪み、この八町歩余の二つの沼ができたといい又その折に前に垂れていたものを、引きずった跡がふんどし窪になったともいうのである。私は大沼新田の村人たちが今でもこのいい伝えを保存しているか否かを知りたくていろいろの形で話を引き出そうとしてみたが、もうこの名を口にする者に出逢わなかった。元はジンダラ沼といったそうじゃないかとも水を向けてみたが、ちょうどこのふんどし窪の北側に一軒はなれて住んでいる農家の主は何だか変った表情をして知らぬと答えた。ジンダラというのはこの辺では尻を突く事だがといったのをみると全くそういう話は聴いておらぬ様子である。伝説はこれ

を信ずる者が少なくなってむしろとめどもなく展開するものだが、それも大きな背景があっての上のことで元が弱ってしまえばこれだけでは独りあるきができないものと見える。ともかくもかつて相模野の荒々しい火山灰農業に僅かな潤いを与えていた笑の伝承の一つは、もう消え去ろうとしているのである。

どうして又その大太良坊という人はここへ来てじんだらを踏んだかというとそれは「郷土研究」の報告者は聴いていなかったようだが、別に高田与清の松屋筆記の中に、この大沼の事を書いたものがある。大だら坊は富士山を背負って行こうとして、その綱にする蔓を捜したがなかった。それで腹を立てて去ったから、今でもこの附近には葛ふじの類が生えぬのだといい伝えると記している。これも関西地方の巨人伝説ではいわぬことだが、こちらでは処処にこれと似た話がある。実際に土性その他の原因からこの植物の妙に少ない野山があって、それをこういう風に戯れて説明することが、以前は流行していたらしいのである。富士山をかついで行こうとしたなども、勿論このお山の見えぬ地方では考え出せそうもない話であるが全国を通じて今も知られている巨人のいい伝えは、綱が切れたとか、担い棒が折れたとか、何か最後の一点で思い通りにならず残念がったままで行ってしまったということになっているのが普通である。まじめに理由を考えて見てもよい問題だが自分の想像ではこれは第二次的にこの国土を支配した神々の、更に立ち優れて有力であったことを説くためで、すなわち又現在の多くの旧社に巨人を統御なされたという物語があり、もしくはわざおぎの行なわれ

たのと、同じ信仰の表裏とも考えられ、むつかしい語でいえば国津神思想、あるいは地祇信仰の残留とも解せられるのである。

瀬戸内海から西の方のオオヒトは、名は巨人であっても形がずっと小さく力は万人に匹敵するようにいっていても、足跡は尋常のものからそう図抜けては大きくないらしい。それで時としては武蔵坊弁慶の逸話にも托せられ、そうでなくてもよほど人間味が多く加わっており、同じ誇張でも、関東で見るような笑い話の種にはなりにくい。これも自分の解釈は神敵観との融合があって、神の勝利の花々しい光景を胸にえがくためには、あんまり大きくては始末が悪かったからではないかと思う。しかし播磨風土記の多可郡の条には、天につかえて屈んであるいたという人の記事もあり、九州でも筑後の矢部川の奥には、谷を蹴開いたという巨霊の話が伝わっている。そういう昔語りも学者の手にかかると何とかかんとか古史の記録を調和させようとし、又は時代の常識で合理化させなければ承知しないが、文字のない人人が旧い事を伝えようとした動機には、それとは又格別なものがあったらしいのである。第一には親々の固く信じたということに同情して、それをいつまでも覚えておこうという心持ち、第二には「昔」という時の中にはどれだけ多くの神秘奇瑞があったか知れぬという一種の憬慕、さらに又現在生活の不如意と不安とを、しばしばこういう思い出によって忘れようとした、素朴な芸術欲などと、これから進んでわれわれが明らかにしなければならぬものが、まだ幾らでもあるのである。

学問がだんだんと民間に普及するにつれてこういう省みられなかったものが省みられることは、自然であり又われわれの努力を要せぬかも知れぬが、讃岐は旧国であり且つよく開けた地方であるがゆえに、大切な資料も利用者のまだ出て来ぬうちに、消えたり改まったりしてしまう懸念が多い。行く行くこの会に熱意ある会員の数を増して、互いに他の人のまだ心付かぬ文化現象に手分けをして観察の歩を進め、末には巨人の尻餅や地団太というような埋没した古い信仰の痕跡までが、一目に見渡されるようにしてもらいたいものである。学問は興味から、もしくは好奇心から入ったものが最も根強い。そういう考えに基づいて、私はこの頓狂な一つの話題を提供する。

付　大太法師伝説四種

（一）　昔デエラボッチという非常に大きな人がいた。ある時富士山を背負おうとして、相模原の原中をふじ蔓を見つけて歩いたが、どうしても山を背負うだけのふじ蔓が見付からない。それを残念がってジンダラ踏んだその跡が、今原の中ほどに在る鹿沼と菖蒲沼とである。

○ジンダラとは「地団太」というのと同じで、臀を地に下し手足を振り動かし、体を揺りつつ口惜しき表情をなすこと。

○菖蒲沼の西の端を横浜線の鉄路が通っている。鹿沼に水のたたえている時は、淵野辺の停車場で汽車の窓から見える。二つの沼の距離は三四町くらい。

（二）　相模原の中ほどに幅一町ばかり南北に長く凹んでいる褌窪という凹地がある。デエラボッチが褌をひきずった跡だそうな。

（三）　南多摩郡由井村字小比企から南、同村宇津貫へ越える所に、俗に池の窪と称する凹地がある。東西に長くて（長さ十五六間幅十間くらい）、ちょっと足跡といえばそうも見られる形をしておる。昔デエラボッチが富士の山を背負おうとして一跨ぎ踏張った。一足が駿河の国に、他の一足がここに印せられたのだと言い伝えておる。

○池の窪はふだんは乾いておるが、五月雨頃などには水をたたえて湖水のようになる。

（四）　同郡川口村山入小字縄切に、付近の山から一つ飛び離れた小山がある。これは昔デエラボッチがどこからか背負って来たのであるが、ここまで来ると縄が切れて落ちた。デエラボッチは縄を繫ごうと思ってふじ蔓を捜したが見つからなかったので口惜しがって「この山へふじは生えるな」といったから、今以て葛が生えない。背負って来た山はここに残って縄切という字の名がその由来を語っておる。

○同郡由木村にも一つ巨人に関する伝説がある。ただしデエラボッチとはいわず。（中村成文）

（附　記）

この問題に関しては「一目小僧その他」の中の「ダイダラ坊の足跡」をおよみ下さると参考になると思う。

一つ目小僧

舌切雀の重い葛籠の中へ、やたらに詰め込まれたような有り合わせのおばけにも、尋ねてみれば由緒もあり系図もあるというのは、斯道に心を寄せるわれわれに取って誠に張合のあることである。深夜に少年の笠を目深かにかぶって酒買いに行くのを、すれ違いさまによく見ると顔の真中に円い眼が一つあったという話など、今は五歳の幼童も承認せぬような事件であるが、ある時代にはこれを固く信じた人々も多かったとみえる。拙者などはこれは狸が化けるので、狸は飄逸にしてしかも智謀周密でなかったために、かかる類の妖怪を現ずるのだというように聞いていたと記憶する。しかるに拙者よりは年下の住広造氏の言によるに、飛州高山などでは雪入道と称して目が一つ足が一本の大入道の話が、同氏子供の頃にも語り伝えられていたという。雪の降る夜の明け方に出るものということである。高瀬敏彦氏の報ぜられた紀州伊都郡のユキンボも雪夜に飛びあるくとあるが、一本脚とのみあって目の沙汰は何ともない。かつ小児のような形という。前に出した熊野山中の「一本ダタラ」（郷土研究四巻）も同様に、雪の朝樹木の下などにできる円形の窪みを以てその足跡という由で世にいう

雪女又は雪の精のごとく、雪降るによって始めて現われる者とも考えられていたのでなく、雪はむしろ足跡の話についているのであろう。越中の旧事を録した肯構泉達録巻十五に、婦負郡蘇夫岳の山霊は一眼隻脚の妖怪にして、かつて炭を焼く者二人これに殺され、少し水ある蘆茅に投げ棄ててあり、又麓の桂原という里の者夫妻薪を採りに登りて殺さる。脳を吸うと見え頂に大なる穴が明いていた。山海経にいう所の独脚鬼ならんか云々とある。石川日観石川泰恵二人の話を集めたゆえに観恵交話と題してある一書にも、いずれの地方のことかまだ知らぬが次のような一条がある。曰く「左衛門佐殿領分の山にセコ子といふ者あり。三四尺程にて眼は面の眞中に只一つあり。その外は皆人と同じ。身に毛も無く何も着ず。二三十づゝ程連立ちありく。人これに逢へども害を爲さず。大工の墨壺をことの外欲しがれども遣れば惡しとて遣らずと杣ども語りけり。言葉は聞えず、声はヒウ〳〵と高く響く由なり」と。害はせずとあるが一つ目小僧が隊をなして横行したら相応に怖しいであろう。又日東本草図彙という書には挿図まで添えてこんな話を掲げている。上州の草津温泉は毎年十月八日になると小屋を片づけて里へ下る習であった。ある年仕舞いおくれ二三人跡に残った者、夜中酒を求めに里へ下るとて温泉の傍を通ると、湯滝の滝壺の中に白髪銀のごとき老女がいて、どこへ行くか己も行こうというのをよく見ると顔の正中に一つしか眼がなく、その眼が的然と照り輝やいていたので、小屋へ飛んで帰って気絶した云々。仏経などの中には捜せばこの類の鬼もいるかも知らぬが、人間泣に男女あり老幼あり、上野にも越中にも飛騨にも近江に

も土佐にも、見た聞いたという話がこう多いのには、何か又しかるべき仔細がなければならぬ。一本足で飛びあるくというに至っては何分にも手がつけられぬが、これも平瀬氏報告のごとく単に山の神はちんばというだけになれば（郷土研究四巻一一号）あり得べき想像になる。いわゆるの顔の真中に眼が一つもこれと同様の誇張で、本来は山の神が眇者であるというのを、今も用いる語法で「目が一つ」と言い伝えたとすれば、すなわちまた神の片目の一例に他ならぬ。磐城平地方で山神様はかんかちだから十月にも出雲へは行かれぬというよし高木氏の報ぜられたのは、あたかもその証拠であろうと考える。この序でにいうが、神が目を傷つけられたという昔話は、片目魚考に引かれた外にも、伯耆伊豆新島等本誌に多くの報告が見えている。又片目の魚の話の中でも殊に好参考となるのは、遠州横須賀辺で天狗が夜炬火を持って泥鰌を漁しその目を抜いて行くので、この辺の泥鰌に片目が多いという一条である。本年一月十八日の東京日々新聞に、琉球ではハブ（蛇）を捕えてその左の目をえぐって呑むと精力を増すという俗信があって今もこれをやるのを聞いて、東京の某富豪も近頃ハブの左眼を本場の琉球から取り寄せてひそかに用いているとある。これも何かの関係があるらしく思われる。

一眼一足の怪

紀伊国続風土記巻八十、牟婁郡色川郷樫原の条に、昔一踏鞴と称する妖賊ありて、熊野の神宝を奪い雲取の旅人を掠む。狩場刑部左衛門なる者三山衆徒の頼みに応じこれを退治しその功を以て三千町ある寺山を色川郷十八村の立合山にしてもらい、死して後はこの地に王子権現と祀られたとある。南方先生は曰く、右のヒトツダタラはただの泥坊ではあるまい。熊野の山中には今でも「一本ダタラ」という怪物住むという。その形は見たものがないが、幅一尺ばかりの大足跡を一足ずつ雪の上に印して行った跡を見るという。このダタラは多分かのダイダラ法師のダイダラと同じく大人を意味する語で、漢字に書けば大太郎で、すなわち元は大男の異名であったろう云々。何太郎を何ダラという例は三太郎法師をサンダラボッチ、沖縄の芝居にも京太郎と書いてキョーダラというのがある。又大力の男を大太郎というのは、宇治拾遺には盗賊の頭の大太郎、盛衰記には日向嫗岳の神の子に大太童などがある。又一足の怪ということは熊野ばかりの話ではない。安芸の宮島でも雪の晨に廻廊の屋根舞台の上などに、常人の足を三つ四つも合わせたほどの大足跡が、一丈ばかり隔てて雪の上に印してい

ることがあるといい（芸藩通志十七）土佐でも高岡郡大野見郷島ノ川の山中で、文政の頃官命を以て香蕈を養殖している頃、雪中に大なる足跡の一二間を隔てて左足ばかり続いているのを見た者がある。あるいは右足ばかりの跡もある。これは「一つ足」と称して常にある者である。香美郡にもあるという話である（土佐海続編）。宮島の方は左右の足で大股に歩いたのかも知れず、土佐の「一つ足」もただ片足で飛んだのかも知れぬが、土佐にはずっと前から隻脚にしてさらに片目なる怪物が山奥にいると伝えられ、しかもそれは山男のことだとの説もある。高知藩御山方の役人春木次郎繁則という者、宝暦元年四十歳で土佐郡本川郷の山村に在役中見聞を筆記した書物に「山鬼といふものあり、年七十ばかりの老人の如し。人に似たり、眼一つ足一つ、蓑のやうなる物を着す。本川の人『山ヂイ』と謂ふ。俗にいふ『山チヽ』なるべし。変化の物に非ず、獣の類なる由、されど常に人に見ゆること無し。大雪の時足の跡あり、丸き物なり、径四寸ばかり、例へば杵にて押したるやうに足跡あり、飛び〳〵して行くよし、足跡は見けれども其姿を見ず、越裏門村の忠右衛門といふ者の母は行逢ひたる由、昼のことなり、人の如くたこりて来ると也。忠右衛門母は行ちがひけれども、見返りたれば行方無しといふ。あまり胆を潰し家へ立帰り、行く所へ行かずやめたり、何事もなし。昨日のことゝ語りしまゝに書付け置く也」とあり、又その次には「山鬼と蛇と百足と道行くことを争ひたるといふ書あり、其書の名を忘れたり、サンキはけだもの也」ともある（寺川郷談）。この話は多分足の一本の者と無い者と百ある者との争いであろう。されば

山城八瀬村の元祖のごとくいう山鬼などと別で、この辺では山鬼は足一本ときまっていたのである。これよりは時代は大分後かと思われる土佐の怪談集の中に又こんな説もある。「或人云、此一眼の者は土佐の山中には見る者多し、其名を山爺といふ。形人に似て長三四尺、惣身に鼠色の短毛あり、一眼は甚大にして光あり、一眼甚小さし。ちよつと見れば一眼と見ゆるなり。人多くこれを知らず、一眼一足と云ふ。歯甚強き物にして、猪猿などの首を人が大根類を喰ふ如くたべ候由。狼この物を甚恐れ候故、猟師この山爺を懐け獣の骨などを与へ、小屋に掛けたる獣の皮を狼の夜分に盗取るを防がする由、土州の人の話なり」（南路志続編稿草廿三）。本川郷の山爺には身長の記事がないが、六七尺に一足跡とあるからは三四尺の小男とは到底思われぬが、それにしても杵で押したような丸い跡とあるなど熊野の話とも打ち合わず、しかも見たことはないという本物の話ばかりが一致するのも妙である。又雪の中の足跡などに右とか左とかがそう明瞭に分かるわけはないから、結局山中の怪物が片足だということは、別に何かかく想像すべき理由があったのではあるまいか。片目という方はいよいよ以て空な話のように思われる。しかしこれをいうのは土佐ばかりではなかった。阿州奇事雑話巻二の山父山姥の話は、半分以上笈埃随筆や西遊記などの受売と見受けるが、しかもその末に録した同国三好郡の深山で山父が小屋へ来て、例のごとく人の心を読んだという話の中に、その山父が一眼であったことを述べている。落穂余談巻五には又次のような話もある。「豊後の或山村の庄屋山中に猟する時、山上二三尺のくぼたまりたる池の端に、七八

歳の小児惣身赤くして一眼なる者五六人居て、庄屋を見て龍の髭の中に隠る。之を狙ひ撃つに当らず、家に帰れば妻に物憑きて狂死す。我は雷神なり、たま〱遊びに出たるに何として打ちけるぞといひけり。之を本人より聞きたる者話すと云へり」山猱一足にして反踵とは中国の書物にもあるそうだが、これら山にいる大小いろいろの一つ目が、なにゆえに一つ目と伝えられているかについては、なお研究せねばならぬと思う。

片足神

土佐山中に住む怪物で山ジイとも山鬼ともいうもの一本足であるという俗信（郷土研究四巻四七七ページ）と思い合わさるるは、南路志の同国安芸郡室戸村大字元字船戸の条に、「片足神、社は巖窟也、此神片足なりとて半金剛の片足を寄進すること古来の風なり」とあることである。土佐では岩穴の中に神を祀る例同書に多く見えており、必ずしも山の神とは定まっておらぬ。草履の類を捧げ物にする神は諸国に幾らもあり、その一二は常に片足のみ供えているが、いまだ神一足という説明は聞かぬ。秩父の横瀬川入の孤屋で自分が目撃した正月に竃神に上げるという馬の沓なども、大きいのをただ片方だけであった。書物の名は忘れたが江戸の人の紀行に、甲州の郡内某村において一足鬼形の石体を祭る社ありといい、夔という神かと記してあった（徂徠であったかも知れぬ）。山中先生の「甲斐の落葉」によれば、その地では今は既にそれを夔という神にしてしまっているそうである。しかも実物を見るとただの狛犬の片足毀れたのであるとて図まで出して笑っておられた。しかしこれを耳にうといい中国の神にしたのは法外としても、あるいは土佐の例の如く片足として尊崇する信仰がこの辺

の民間にあったのかも知れぬ。いまいちだん問いただしてみねばならぬ事である。

天狗の話

一

私が天狗を研究しているというのは無論虚名である。ただ昔の人の生活を知るために、いろいろの方面から考えている間に、自然少しくそんな点にも心ついたのである。従って天狗に関し何らの結論をも持っておらぬ。今の人は何でも普通の論理で物を討究しようとするが、おばけにロジックはないから、不理窟でも現われる。それを嬉しがる私が分からぬのか、当世人が話せないのか、何だか知らぬが、こんな話もあるということで聴いて貰いましょう。

わが国には一時非常に奇怪な物語を喜び、利口な人が集まってはいわゆる空虚を談ずるという、一種デカダン気風の盛んな時代があった。この時代をわれわれはかりに今昔時代という。天狗伝説に羽が生えて天下を飛び廻ったのはこの時代のことである。今昔時代にはただの鬼と天狗とは別種の魔物と考えられておって、各々偉大なる勢力を振っておった。その後鬼党は次第に零落して、平凡なる幽霊亡霊の階級まで退却してしまったが、これに反して天狗国は久しく隆々として、田舎及び山間を支配しておった。天狗の社ができたのはかえって

この次の時代である。今日といえども決してその領域は縮んではおらぬ。

ただし天狗道にも時代があれば従って時代の変遷がある。中世の歴史を見ても、南都北嶺の僧侶たちが大多数京師人の子弟である世には、その行ないや殊勝であったが、いったん武家が勢力を加えてその子弟を坊主にすれば、法師でも強くてあばれる。徳川時代に百姓の子が僧になれば又おとなしくなる。正法の対象であるところの魔道でも、これと同じ道理で、武家時代の天狗にもまた、武士的気風がある。元来天狗というものは神の中の武人であります。中世以来の天狗はほとんど武士道の精髄を発揮している。少なくとも武士道中の要目は天狗道においてことごとく現われている、殊にその極端を具体して見せている。すなわち第一には清浄を愛する風である、第二には執着の強いことである、第三には復讐を好む風である、第四には任侠の気質である。儒教で染め返さぬ武士道はつまりこれである。これらの道徳が中庸に止まれば武士道で、極端に走ればすなわち天狗道である。殊に高慢剛腹の風というものは、今日でも「あの人は天狗だ」などと、諺になって都会にも行なわれている。少なくも近代魔道の一大徴候としてある、王朝時代の天狗に比べると大分変えられた点がある。明治の新時代の天狗はこの上さらにいかなるアットリビュートを添えられることか、長命をして知りたいものである。この事実は一方から論ずれば又国民性の煥発とでもいうかすこぶるおもしろいことである。西洋でも北部ヨーロッパに今なお活動しているフェアリーのごとき、その発祥地であるところのケルト民族の特性をよく代表している。フェアリーの快活で

悪戯好でしかも又人懐こいような気風はたしかにセルチックである。フェアリーは世界のおばけ中まさに一異色である。これに比べると天狗はやや幽鬱である。前者が海洋的であればこれは山地的である。日本は内外人の想像しているよりも一層の山国である。山高きがゆえに貴からず、高くはないが深山ははなはだ多いのである。われわれの祖先は米が食いたさに争って平地に下った。平地と山地とは今日なお相併行して入り交らざる二つの生活をしている、従って平野居住者がまるまる天狗伝説を忘却しても、他の一半の日本における魔道の威力は必ずしも衰微したものとはいわれぬのである。

二

しかしながらこれがためわれわれ平地人にとって、いわゆる天狗道のいよいよ了解しにくくなったことはまた事実である。語を換えていわば百年の昔に比べて不可測の範囲はかえって昔より大いに拡張した。一時神道の学者は好い機会があってその一端を窺うことができたものだから、悦び勇んでその説明を試みたけれども、その効果は決して大なりとはいわれぬ。この道が学者の取扱に適せぬ理由はいくらもあるが、第一に書いた物が少ない。多くの材料は空吹く風のごとく消え易い口から口への話である。又幽冥に往来したという人の物語、これが史料としての価値はあまり高くない。神道寅吉すなわち高山平馬の話、又は紀州のある学者の筆記した少年の談話の類は五つも七つもあるけれども、その間に何ら共通の点がなく、

一つの世界の話とはいかにも受け取られぬ。なるほど虚誕ではなかろう、本人は正にかく信じたのであろう、しかしこれを以て単純なる青年の一妄想でないとする根拠に乏しい。何となればその記事は一つも学問のない若者の世間的智識ないしは想像の区域を脱しておらぬ。神道の学者は神道に片よった幽冥談をことごとく信ぜんとするけれども、仏道の方にも霊現記類の書物に仏道に片よった幽冥談のよくこれに似たものがある。続鉱石集の下巻に出ている阿波国不朽物語などはその一例であって、形式は全然これに似ている。立山の地獄、恐山の地獄の話のごときも筆者は人を欺くとも思われぬから、少なくもこれを見たという人があったのであろう。これらの話が多く出て来れば来るほどこれを信ずることは困難になる。それよりも今日幽冥に交通している極めて少数の人々が、微々として笑って何もいわないのはいくらゆかしいか知れない。しかしそれではわれわれの研究のためには全然無方便である。

誤解をせられてはこまるのは、たといすこしも研究の好材料が得られないからといって、不思議の威力には寸毫も増減するところはないのである。幽界の消息と称するものがかりに不実であったとすれば、幽界の勢力の強烈なることはかえっていよいよ深く感ぜられるのである。この世に不思議が絶えたらとか、近くは宝永年中より六十年に一度ずつ必ず現われる伊勢の御蔭参りはどうであるか、いかな楽天的学者でも単純なる社会心理の現象として説明しえられるか、御蔭参りの年には諸国に無数のお札が降る、本物のお札が空から降る、維新の際にもたくさん降った、大神宮のお祓も降れば関東には阿夫利山のお札も降った、これらは

学者の説明しえなかった事実であって、しかもまた厳然たる事実である。偶然私と貴方とがこれを見なかったからといって、一言の下に否定し得るような簡単な問題ではありません。

三

これはほんの一例、その他無数の魔界の現象があるが、これにはとうてい門外漢は手をつけられぬのであろうか、今の処では先ず然りと答えるの外はあるまい。ただここに少しばかり、私の独り心づいていることがある。昔から殊に近代に於て山中の住民が堅く天狗現象なりと信じているものの中で、どうもそうでなかろうと思うことがあります。山民は幽界を畏怖するの余に、すべての突然現象、異常現象を皆天狗様に帰してしまう。しかしその一部分は魔王のあずかり知らぬものがある。この濡衣を乾せば魔道の威光はかえってたしかに一段を添えるであろうからちょっとその話をしてみたい。それは外でもないが日本の諸州の山中には明治の今日といえども、まだわれわれ日本人と全然縁のない一種の人類が住んでいることである。これは空想ではない、当世のロジックでも説明のできることである。順序を立てていうが、第一我国は小さな人口稠密な国でありながら、いわゆる人跡未到の地がまだなかなか多い。国と国、県と県との境は大半深山である。平安の旧都に接しても、近江丹波若狭に境した山はこれである。吉野の奥伊勢紀州の境も深山である、中国四国九州は比較的よく開けているというが、伯耆の大山、出雲の三瓶山の周囲は村里が甚だ少ない。四国の阿波土

佐の境山、九州の市房山地方も山が深い。京より東は勿論の事で、美濃飛騨から白山立山へかけての山地、次にはいやな名だがいわゆる日本アルプスの連山、赤石白根の山系、それから信越より南会津へかけての山々のごとき、今日都会の旅人のあえて入り込まぬは勿論、猟師樵夫も容易に往来せぬ区域がずいぶんと広いのである。これらの深山には神武東征の以前から住んでいた蛮民が、われわれのために排斥せられ窮追せられて漸くのことで遁げこもり、新来の文明民に対しいうべからざる畏怖と憎悪とを抱いて一切の交通を断っている者がだいぶいるらしいのである。

中学校の歴史では日本の先住民は残らず北の方へ立ち退いたように書いてあるが、根拠のないことである。佐伯と土蜘と国巣と蝦夷と同じか別かは別問題として、これらの先住民の子孫は恋々としてなかなかこの島を見捨てはせぬ。奥羽六県は少なくとも頼朝の時代までは立派な生蛮地であった。アイヌ語の地名は今でも半分以上である。又この方面の隘勇線より以内にも後世まで生蛮がおった。大和の吉野山の国巣という人種は蝦蟆をご馳走とする人民であるが、四方の平地と海岸がすべて文明化したのちまで、われわれの隣人として往来しておった。新年に都へ来て舞を舞い歌を歌ったのはその中の一部であるか全部であるかは分らぬが、別に他国へ立ち退いたとも聞かぬ。播磨風土記を見ると、今の播但鉄道の線路近くに数部落の異人種が奈良朝時代の後まで住んでいた。蝦夷が遠く今の青森県まで遁げた時代に丹波の大江山にも伊勢の鈴鹿山にも鬼がいて、その鬼はときどき京までも人を取りに来たらしい。九州

は殊に異人種の跋扈した地方であって、奈良朝の世まで肥前の基肄、肥後の菊池、豊後の大野等の深山に近き郡には城があった。皆いわゆる隘勇線であったのである。故に平家の残党などが敗軍して深山に遁げて入るといかなる山中にもすでに住民が居って、その一部分は娘を貰ったりして歓迎せられたが、他の一部分はあるいは食べられたかもしれぬ。

さてこれ等の山中の蛮民がいずれの島からも舟に乗ってことごとく他境に立ち退いたということは、とてもできない想像であって、なるほどその大部分は死に絶え、乃至は平地に降ってわれわれの文明に同化したでもあろうが、もともと敵である。少なくもその一部分は我慢をして深山の底に踏み留り野獣に近い生活を続けて、今日までも生存して来たであろうと想像するのは、あながち不自然なる空想でもなかろう。それも田畑を耕し住家を建てればこそ痕跡も残るであろうが、山中を漂泊して採取を以て生を営んでいる以上は、何人に知られずに永い年月を経るのも不思議でなく、いわんや人の近づかぬ山中は広いのである。

しかし永い年月の間にはしばしばわれわれの祖先にも見られた。常陸風土記にある海岸地方の巨人の跡の話、これは珍しくもないがただ巨人とあるが注意すべきである。この蛮民を諸国で皆大人といっている。出雲松江の大人塚は雲陽志に見えている。秋田地方は今でも大人というとは小田内君の話である。飛騨の山中に大人が住んでおって猟師がこれと交易をしたということを徂徠先生が書いている。怖いから大きく見えたのか、その足跡は甚だ大きいという記事が作陽志にもある。しかし大人というよりも分りのよいためか、今日は山男山女

という方が通用する。又山童ともいう。冬は山童夏は川童という説は誤であろう。

山童に行き逢ったという話はたしかなものだけでも数十件ある。一つ一つの話はここには略しますが、すべて皆かれらは一言をも話さぬといっている。共通の言語がない以上は当然である。食物は何であるか知らぬが、やはり吉野の国巣のように山菓や魚や菌であろう。米の飯を非常に喜ぶともあり餅を欲しがったともあり塩は好まぬともある。衣服は何もないこともある。日向の飫肥の山中で猟師の罠にかかって死んでおった山女は髪長く色白く裸体であったとある。奥州は寒いから上閉伊の山中で逢った女は普通の縞を着て居ったが、ぼろぼろになった処を木の葉でつづっておった。多くは徒足だろうと思うけれども同じ山中に寝ておった大人は山笹でこしらえた大きな履物を脱いでいた。

なお大人の人である証拠はいくらでもある。屡々山の中で死んでいるのを見た者がある。寝て鼾をかいていた山男もある、杣や木樵は近世になっては食物を与えて山男を使役するという話がある。先に食物をやれば仕事を捨てて逃げて行く、人の先に立って行くを好まぬ。その無知であることは餅とまちがえて白石の焼いたのを噛んで死んだ話がある。

これらの話を総合すれば、極めて少数ながら到る処の山中に山男はいる。分布も広い上に往来も海上の外は自由なのであろう。多くの日本人はこれをしも「おばけ」の列に加えて真価以上に恐れているのである。そこで自分の考では今日でも片田舎でよく聞く神隠しということは、少なくも一部分はこの先生の仕事にして天狗様の冤罪である。かれらも人なり、生

殖の願は強い内部の圧迫であろう。山中の孤独生涯に堪えかねて、黄昏に人里へ来り美しい少年少女を提げて帰るのは、全く炭焼が酒買いに来るのと同じである、恐ろしいというのはこちらのことで、異人種は別に気の毒だがとも思うまい。夕方になると田舎では子供の外に出ているのをひどく気づかう。地方によっては女はおとなでも夕方は外におらぬ。山坂を走ることのわれわれよりも達者なことは想像しえられるが、一度捕われた男女のかえって来る者の少ないのは、いかなる威力であろうか。あるいは久しからずして皆死ぬからであろうか。もっとも二年三年の内には隠された者が必ず一度は姿を見せると信じている所もある。一昨々年盛岡では近年の神隠しをいくつとなく聞いた。岩鷲山は高くはないが物深い山である。かの麓にはこの現実の畏怖が止む時もない。雫石の百姓の娘が嫁に行くとて炬火をつける間に飾馬の鞍の上から捕えられた。二年の後夜遅く隣村の酒屋へ酒を買いに来たのがその女であった。すぐに跡から出て見た者があったが影がなかった。

私は珍世界の読者の助力でなおこの種類の話を蒐集したいと思う。旧民族の消息が明白になることは、誠に趣味ある問題といいわねばならぬ。

妖怪名彙

怖畏と信仰との関係を明らかにしてみたいと思って、いわゆるオバケの名前を集め始めてから、もう大分の年数になる。まだ分類の方法が立たぬのも、原因は主として語彙の不足にあると思うから、今少し諸君の記憶にあたってみたい。あるいは時期が既に遅いかも知れぬが。

分類には二つの計画を私はもっている。その一つは出現の場所によるもの、これは行路・家屋・山中・水上の大よそ四つに分けられる。行路が最も多く、従って又最も茫漠としている。第二には信仰度の濃淡によるものだが、大体に今は確信するものが稀で、次第に昔話化する傾向を示している。化け物があるとは信じないが話を聴けば気味が悪いというものがその中間にいる。常の日は否認していて、時あって不思議を見、やや考え方が後戻りをするものがこれと境を接している。耳とか目とか触感とか、又はその綜合とかにも分けられるが、それも直接実験者にはつけないのだから、結局は世間話の数多くを、大よそ二つの分類案の順序によって排列してみるの他はない。要するにこれは資料であり、説明というものからは

遠いのだが、出所を掲げておけば後の人の参考にはなるだろう。どうかこれに近い話があったら追加してもらいたい。

シズカモチ　下野益子辺でいう（芳賀郡郷土研究報）。夜中にこつこつこつこつと、遠方で餅の粉をはたくような音が人によって聴こえる。その音がだんだんと近づくのを搗き込まれるといい、遠ざかって行くのを搗き出されるといい、静か餅を搗き出されると運が衰える。搗き込まれた人は、箕を後手に出すと財産が入るともいう。あるいは又隠れ里の米搗きともいい、この音を聴いた人は長者になるという話もあった。摂陽群談、摂津打出の里の条にもある話で、古くから各地でいうことである。

タタミタタキ　夜中に畳を叩くような音を立てる怪物。土佐ではこれを狸の所為としている（土佐風俗と伝説）。和歌山附近ではこれをバタバタといい、冬の夜に限られ、続風土記には又宇治のこたまという話もある。広島でも冬の夜多くは西北風の吹出しに、この声が六丁目七曲りの辺に起こると碌々雑話に見えている。そこには人が触れると瘧になるという石があり、あるいはこの石の精がなすわざとも伝えられ、よってこの石をバタバタ石と呼んでいた。

タヌキバヤシ　狸囃子、深夜にどこでともなく太鼓が聞こえて来るもの。東京では番町の七不思議の一つに数えられ（風俗画報四五八号）、今でもまだこれを聴いて不思議がる者があ

る。東京のは地神楽の馬鹿ばやしに近く、加賀金沢のは笛が入っているというが、それを何と呼んでいるかを知らない。山中では又山かぐら、天狗囃子などといい、これによって御神楽岳という山の名もある。

アズキトギ　又小豆洗いとも、小豆さらさらともいう。水のほとりで小豆を磨ぐような音がするといい、こういう名の化け物がいて音をさせるともいう。その場処はきまっていて、どこへでも自由に出るというわけでない。大晦日の晩だけ出るという処もある（阿哲）。あるいは貉の所行といい（東筑摩）、又は蝦蟇が小豆磨ぎに化けるともいう（雄勝）。不思議はむしろその分布の弘い点にある。西は中国、四国、九州、中部、関東、奥羽にもおらぬという処はほとんとない。なにゆえに物は見もせずに、磨ぐのを小豆ときめたかも奇怪である。あるいはこの怪を小豆磨ぎ婆様、又は米磨ぎ婆と呼ぶ例もある（芳賀）。信州北佐久郡の某地の井では、大昔荒神様が白装束で出て、

　お米とぎやしょか人取って食いやしょかショキショキ

といいながら、米を磨いでは井の中へこぼしたと伝え、今でも水の色の白い井戸が残っている（口碑集）。この言葉も全国諸処の小豆磨ぎの怪が、口にするという文句であってその話の分布もなかなか弘い。

センダクキツネ　洗濯狐。夜になると水の岸に出て、ざぶざぶと物を洗う音をさせる怪。遠州西部ではその作者を狐ときめている（静岡県伝説昔話集）。

ソロバンボウズ　路ばたの木の下などにいて、算盤をはじくような音をさせるから算盤坊主（口丹波口碑集）。

コナキジジ　阿波の山分の村々で、山奥にいるという怪。形は爺だというが赤児の啼声をする。あるいは赤児の形に化けて山中で啼いているともいうのはこしらえ話らしい。人が哀れに思って抱き上げると俄かに重く放そうとしてもしがみついて離れず、しまいにはその人の命を取るなどと、ウブメやウバリオンと近い話になっている。木屋平の村でゴギャ啼キが来るといって子供を嚇すのも、この児啼爺のことをいうらしい。ゴギャゴギャと啼いて山中をうろつく一本足の怪物といい、又この物が啼くと地震があるともいう。

カイフキボウ　備前和気郡の熊山古城址にいたというもの。声は法螺の貝を吹くようで在りかを知らず、その貌を見た者もない。土地では貝吹坊と呼んでいた（東備郡村誌巻四）。

コクウダイコ　周防の大畠の瀬戸で旧六月の頃に、どことも知れず太鼓の音が聴こえる。これを虚空太鼓という。昔宮島様のお祭の日に、軽わざ師の一行がここで難船して死んでからという（郷土研究一巻五号）。

カワツヅミ　信州の小谷地方では、川童は人を取る二日前に祭をするのでその鼓の音が聴こえるという。それを川童の川鼓といって大いに怖れる（小谷口碑集）。

ヤマバヤシ　山中で深夜どこともなく神楽の囃子がすることがある。遠州阿多古ではこれを山ばやしといい、狸のわざとしている。熊村では日中にもこれを催すことがあって、現に狸

が腹鼓を打っているのを見たという者さえある（秋風帖）。

タケキリダヌキ　竹伐狸。夜分竹を伐る音がする。ちょんちょんと小枝を払う音、やがて株を挽き切ってざざと倒れる音がする。翌朝往って見ると何事もない。丹波の保津村などは竹伐狸のわざといっている（旅と伝説一〇巻九号）。

テングナメシ　普通には天狗倒しというが陸中上閉伊郡などは天狗なめし、ナメシの語の意味は不明である。木を伐る斧の音、木の倒れる葉風の感じなどもあって、翌朝その場を見ると一本も倒れた木などはない（遠野物語）。

ソラキガエシ　天狗倒しのことを福島県の田村郡、又会津でもそういっている。鹿児島県の東部でも空木倒しという。斧の音、木の倒れる音はして、地に着く音だけはしないと前者ではいい、他の一方でもまるで木を倒す通りの音をさせるが、たった一つ材木の端に牛の綱を通す穴をあける音だけはさせぬので、真偽を聴き分けることができるという。その音のする場所は一定している。

フルソマ　土佐長岡郡の山中で、古杣というのは伐木に打たれて死んだ者の霊だという。深山で日中もこの声を聴くことがある。始めに「行くぞう行くぞう」と呼ぶ声が山に鳴り渡り、やがてばりばりと樹の折れる響。ざアんどオンと大木の倒れる音がする。行って見れば何の事もない（郷土研究三巻四号）。

オラビソウケ　肥前東松浦郡の山間でいう。山でこの怪物に遭い、おらびかけるとおらび返

すという。筑後八女郡ではヤマオラビという。オラブとは大声に叫ぶことであるが、ソウケという意味は判らぬ。山彦は別であって、これは山響きといっている。

ヨブコ　鳥取地方では山彦すなわち反響を呼子又は呼子鳥という（因伯民談一巻四号）。何かそういう者がいてこの声を発すると考える者もある。

ヤマノコゾウ　伊豆賀茂郡では山彦を山の小僧という。駿河でも山の婆々、遠江には山のおんばアという名もある。山彦という名も山の男ということだから元は一つである。あるいはこれを又アマンジャクという土地も関東にはある。天の邪鬼とも書いて、人の意に逆らう悪徳をもつというのも、やはりこの山中での経験ではなかったかと思う。サトリという怪物があって人の心中を見抜くという昔話も、起りは口真似からそういう想像に走ったのであろう。

イシナゲンジョ　肥前江ノ島でいう海姫、磯女などの同系らしい。五月靄の深い晩に漁をしていると、突然に岩が大きな音をして崩れ落ちるように聞こえる。次の日そこに行って見ても、何の変ったこともないという。

シバカキ　夜分に路傍で石を投げる怪物だという（玉名）。シバは多分短い草の生えた処のことで、そこを引っ掻くような音もさせるのであろう。

スナカケババ　奈良県では処々でいう。お社の淋しい森の蔭などを通ると砂をばらばらと振り掛けて人を嚇す。姿を見た人はないという（大和昔譚）のに婆といっている。

スナマキダヌキ　砂撒狸は佐渡のものが著名であるが、越後にも津軽にも又備中阿哲郡にも、

砂まきという怪物がいるといい（郡誌）、越後のは狸とも又鼬の所属ともいう（三条南郷談）。筑後久留米の市中、又三井郡宮陣村などでは佐渡と同じに砂撒狸と呼んでいる。利根川中流のある堤防の樹でも、狸が川砂を身にまぶして登っており、人が通ると身を振って砂を落したという話が残っている（たぬき）。

コソコソイワ　備前御津郡円城村にこの名の岩がある。幅五尺ほど、夜分その側を通ると、こそこそと物いう音がする（岡山文化資料）。

オクリスズメ　山路を夜行くとき、ちちちちと鳴いて後先を飛ぶ小鳥がある（南紀土俗資料）。声によって蒿雀かという人もあるが、夜飛ぶのだから鳥ではあるまい（動物文学三三号）。那智の妙法山の路にも以前はよく出た。紀州は一般に、送雀が鳴くと狼がついて来るといい、又は送狼がついているしらせだともいう（有田民俗誌）。伊予の南宇和郡では、ヨスズメという一種の蛾がある。夜路にあるけなくなるほど飛んで来ることがある。そのヨスズメは山犬のさきぶれだという（南予民俗二号）。

オクリイヌ　又送狼ともいうも同じである。これに関する話は全国に充ち、その種類が三つ四つを出でない。狼に二種あって、旅犬は群をなして恐ろしく、送犬はそれを防衛してくれるというように説くものと、転べば食おうと思って跟いて来るというのとの中間に、幸いに転ばずに家まで帰り着くと、送って貰ったお礼に草鞋片足と握飯一つを投げて与えると、飯を喰い草鞋を口にくわえて還って行ったなどという話もある（播磨加東）。転んでも「先ず一

服」と休むような掛声をすればそれでも食おうとしない。つまり害意よりも好意の方が、まだ若干は多いように想像せられているのである。

ムカエイヌ　信州下伊那郡でムケエイヌという狼の話は、更にいちだんとこの獣の性質を不明にしている。送狼のように跡からついて来るのでなく、深夜山中で人の来るのを待ち受け、人が通り過ぎるとその頭上を飛び越えて、又前へまわるなどといっている(下伊那)。多分送犬の信仰が衰えてからの分化であろう。

オクリイタチ　伊豆北部でいうこと。夜間道行く人の跡について来るという。草履を投げてやればそれからはついて来るのを止めるともいう（郷土研究二巻七号）。

ベトベトサン　大和の宇陀郡で、独り道を行くとき、ふと後から誰かがつけて来るような足音を覚えることがある。その時は道の片脇へ寄って、

　ベトベトさん、さきへおこし

というと、足音がしなくなるという（民俗学二巻五号）。

ビシャガツク　越前坂井郡では冬の霙雪の降る夜路を行くと、背後からびしゃびしゃと足音が聴こえることがあるという。それをビシャがつくといっている。

スネコスリ　犬の形をして、雨の降る晩に、道行人の足の間をこすって通るという怪物（備中小田）。

アシマガリ　狸のしわざだという。正体を見せず、綿のようなものを往来の人の足にからみ

つけて、苦しめることがあるといっている（讃岐高松叢誌）。

ヤカンザカ　東京の近くにも、薬罐坂という気味の悪い処があった。夜分独り通ると薬罐が転がり出すなどといっていた（豊多摩郡誌）。

テンコロコロバシ　備前邑久郡のある地に出るという怪物。夜分ここを通るとテンコロがころころと坂路を転がって行くのを見るという。テンコロは砧すなわち衣打ち台のことだが、それに使う柄の直ぐに附いた木槌をもテンコロといっている。又茶碗転ばしの出るという場処もあった（岡山文化資料二巻六号）。

ツチコロビ　小豆洗いの正体は藁打ち槌の形で、一面に毛が生えており、人が通ると転げかかるといっている地方も九州にはあるが（郷土研究一巻五号）、これは野槌などという道の怪との混同らしい。野槌はたけの至って短い槌のような形をした蛇で、道の上を転がって来て通行人を襲うと伝えられ、中部地方の山地にはそれが出るという峠路も多かったというが（飛騨の鳥）、この空想は名称から後に生まれたものと思われる。ツチはミヅチが水の霊であると同様に、本来はただ野の霊というに過ぎなかったことは、古く学者もこれを説いている。しかし現在はこの槌形の怪は全国に弘まり、伯耆中津の山間の村でも、槌転びというくちなわがいて、足もとに転がって来て咬い付くといっている。

ヨコヅチヘビ　越後南蒲原郡の或堤防の上の路には、以前ヨコヅツヘンビ（横槌蛇）というものがいたという。頭も尾も一様の太さで、ぴょんぴょんと跳ねて動いていた云々（三条南

郷談）。

ツトヘビ　又はツトッコという蛇がいるということを、三河の山村ではいい伝えている。あるいは槌蛇とも野槌ともいい、槌の形又は苞の形をしていて、非常に毒を持ち、咬まれると命がないと怖れられていた（三州横山話）。あるいは又常の蛇が鎌首をもたげて来た所を打つと、すぐにその首が飛んで行ってしまう、それを探してよく殺しておかぬと、後にツトッコという蛇になって仇をするともいっていた（郷土研究三巻二号）。見たという人はあっても、なお実在の動物ではなかった。

タンタンコロリン　仙台で、古い柿の木の化けた大入道だという。柿の実を取らずに置くとこれになったともいうから、コロリンのもとは転がって来るといっていたのであろう。

キシンボウ　肥後では椿の木を擂木に用いると、後に木心坊になるというそうである（民族と歴史六巻五号）。古椿が化けて火の玉になったという話は、記録にも二三見えている。以前京都でもいったことである。恐らくこの木は擂木にしなかったのであろう。

ツルベオトシ　釣瓶落し又は釣瓶卸しという怪物が道に出るという話は、近畿、四国、九州にも分布している。井戸の桔槔というものが始めて用いられた当座、その突如たる運動に印象づけられた人々の、いい始めた名と思われる。この妖怪も大木の梢などから出しぬけに下って来るというので怖れられたのである。あるいは大きな杉に鬼が住んでいて、下を人が通ると金の釣瓶ですくい上げたという話もある（愛知県伝説集）。人をさらうためだけなら金

にも及ばなかったろう。何かこれには隠れた意味がありそうである。

フクロサゲ　信州大町の附近には、昔狸が出て白い袋を下げたので、袋下げといっている処がある。田屋の下の飯つぎ転ばしというのも同じ怪であったという（北安曇郡郷土誌稿巻七）。

ヤカンヅル　夜遅く森の中を通ると樹の上から薬罐が下るといっている（長野附近俗信集）。

アブラスマシ　肥後天草島の草隅越という山路では、こういう名の怪物が出る。ある時孫を連れた一人の婆様が、ここを通ってこの話を思い出し、ここには昔油瓶下げたのが出たそうだというと、「今も出るぞ」といって油すましが出て来たという話もある（天草島民俗誌）。スマシという語の意味は不明である。

サガリ　道の傍の古い榎樹から、馬の首がぶら下るという話のある場処は多い。備前邑久郡にも二つまであって、その一つは地名をサガリといっている（岡山文化資料二巻六号）。

ヌリカベ　筑前遠賀郡の海岸でいう。夜路をあるいていると急に行く先が壁になり、どこへも行けぬことがある。それを塗り壁といって怖れられている。棒を以て下を払うと消えるが、上の方をたたいてもどうもならぬという。壱岐島でヌリボウというのも似たものらしい。夜間路側の山から突き出すという。出る場処も定まりいろいろの言い伝えがある（続方言集）。

イッタンモメン　一反木綿という名の怪物。そういう形のものが現われてひらひらとして夜間人を襲うと、大隅高山地方ではいう。

ノブスマ　土佐の幡多郡でいう。前面に壁のように立ち塞がり、上下左右ともに果がない。

腰を下して煙草をのんでいると消えるという（民俗学三巻五号）。東京などでいう野衾は鼯鼠か蝙蝠のようなもので、ふわりと来て人の目口を覆うようにいうが、これは一種の節約であった。佐渡ではこれを単にフスマといい、夜中後ろからともなく前からともなく、大きな風呂敷のようなものが来て頭をつつんでしまう。いかなる名刀で切っても切れぬが、一度でも鉄漿を染めたことのある歯で嚙み切ればたやすく切れる。それゆえに昔は男でも鉄漿をつけていたものだといい、現に近年まで島では男の歯黒めが見られた（佐渡の昔話）。用心深い話である。

シロボウズ　泉州では夜分路の上でこの怪に遭うという畏怖が今もまだ少し残っている。狸が化けるもののようにいうが無論確かな話でない。狐は藍縞の着物を着て出るというから、この白坊主とは別である。

タカボウズ　讃岐の木田郡などで評判する怪物。背の途法もなく高い坊主で、道の四辻にいるという。阿波の山城谷などでは高入道、正夫谷という処に出る。見下ろせば小さくなるという（三好郡誌）。

シダイダカ　阿波の高入道とよく似た怪物を、長門の各郡では次第高という。人間の形をしていて高いと思えばだんだん高くなり、見下ろしてやると低くなるという。

ノリコシ　影法師のようなもので、最初は目の前に小さな坊主頭で現われるが、はっきりせぬのでよく見ようとすると、そのたびにめきめきと大きくなり、屋根を乗り越して行ったと

いう話もある。下へ下へと見おろして行けばよいという（遠野物語再版）。

オイガカリ　備後の比婆郡などでいう化物の一種。あるいていると後ろから覆いかかって来るものという。

ノビアガリ　伸び上がり、見るほど高くなって行くという化け物。川獺が化けるのだという。地上一尺ぐらいの処を蹴るとよいといい、又目をそらすと見えなくなるともいう（北宇和）。こういう種類の妖怪の、物をいったという話はかつて伝わっていない。出て来るのではなくて、人が見るのである。

ミアゲニュウドウ　東京などの子供が見越し入道というのも同じもの、佐渡では多く夜中に小坂路を登って行く時に出る。始めは小坊主のような形で行く手に立ち塞がり、おやと思って見上げると高くなり、後には後ろへ仰けに倒れるという。これに気づいたときは、

　見上げ入道見こした

という呪文を唱え、前に打ち伏せば消え去るといい伝えている（佐渡の昔話）。壱岐では東京と同じに見越し入道というが、夜中路をあるいていると頭の上でわらわらと笹の音を立てる。その時黙って通ると竹が倒れかかって死ぬから、やはり「見こし入道見抜いた」といわなければならぬといっている（続方言集）。

ニュウドウボウズ　入道坊主、見越し入道のことである。三河の作手村でかつてこれを見たという話がある。始めは三尺足らずの小坊主、近づくにつれて七八尺一丈にもなる。先ずこ

ちらから見ていたぞと声を掛ければよし、向うからいわれると死ぬという（愛知県伝説集）。

ソデヒキコゾウ　埼玉県西部では袖引小僧の怪を説く村が多い。時は夕方路を通ると後から袖を引く者がある。驚いて振り返ると誰もいない。あるき出すと又引かれる（川越地方郷土研究）。

オイテケボリ　置いてけ堀という処は川越地方にもある。魚を釣るとよく釣れるが、帰るとなるとどこからともなく、置いてけ置いてけという声がする。魚を全部返すまでこの声が止まぬという。本所七不思議の置いてけ堀などは、何を置いて行くのか判らぬようになったが、元はそれも多分魚の主が物をいった例であろう。

オッパショイシ　土地によってはウバリオン、又はバウロ石などともいう。路傍の石が負うてくれというのである。徳島郊外のオッパショ石などは、ある力士がそんなら負われいといって負うたらだんだん重くなった。それを投げたところが二つに割れ、それきりこの怪は絶えたと伝えられて、永くその割れた石があった（阿波伝説物語）。昔話の正直爺さんが、取り付かば取り付けというと、どさりと大判小判が背の上に乗ったというのと、系統を一つにする世間話で、実は格別こわくない例である。

シャクシイワ　作州箱村の箱神社の近傍にある杓子岩は、夜間人が通ると味噌をくれといって杓子を突き出したのでこの名があるという（苫田郡誌）。味噌を持ってあるく人もそうあるまいから、これはもと味噌を供えて祭った石かと思われる。

ヒトリマ　火取魔という名はただ一つ、加賀山中温泉の例が本誌に報告せられたのみであるが（民間伝承三巻九号）、路傍に悪い狐がいて蠟燭の火を取るという類の話は諸処にある。果してこの獣が蠟燭などを食うものかどうか。あるいは怪物の力で提灯の火が一時細くなるという石川県のようない伝えが、他にもあるのではないかどうか。確かめてみたい。

ヒヲカセ　火を貸せという路の怪が出る場処が、三河の北設楽郡にはある。昔鬼久左という大力の男が夜路を行くと、さきへ行くおかっぱの女の童がふりかえって火を貸せといった。煙管を揮って打ち据えようとしてかえって自分が気絶してしまった。淵の神の子であったろうという（愛知県伝説集）。あるいはこれとは反対に、夜分人が通ると提灯のような火が出て送って来るというような所もあった。ある村の古榎の木の下まで来ると消える。それでその古木を伐ってしまったら出なくなったという（同上）。

ミノムシ　越後では評判の路の怪であるいは鼬のしわざともいう。小雨の降る晩などに火が現われて蓑の端にくっつき、払えば払うほど全身を包む。ただし熱くはないという（西頸城郡郷土史稿二）。信濃川の流域にはこの話が多く、あるいはミノボシともいう。多人数であるいていても一人だけにこの事があり、他の者の眼には見えない（井上氏妖怪学四七九ページ）雨の滴が火の子のように見えるのだともいう（三条南郷談）。越前坂井郡でも雨の晩に野路を行くとき、笠の雫の大きいのが正面に垂れ下がり、手で払おうとすると脇へのき、やがて又大きい水玉が下り、次第に数を増して眼をくらます。狸のしわざといい、大工と石屋とに

はつかぬというのが珍しい（南越民俗二）。秋田県の仙北地方で蓑虫というのは、寒い晴れた日の早天に、蓑や被り物の端についてきらきら光るもので幾ら払っても尽きないというから、これは火ではない（旅と伝説七巻五号）。利根川図誌に印旛沼のカワボタルといっているのは、これは夜中に出るので火に見えた。これも越後のミノムシと同じものだろうといっている。

キツネタイマツ　狐火と同じものらしいが、羽後の梨木羽場という村では、何か村内に好い事のある際には、その前兆として数多く現われたといっている（雪の出羽路、平鹿郡十一）。どうして狐だということが判ったかが、むしろより大きな不思議である。中央部では普通に狐の嫁入というが、これは行列の火が嫁入と似ていて、どこにも嫁取がないからそう想像したのであろうが、それから更に進んで、狐が嫁入の人々を化かし、又は化けて来たという話も多くできている。

テンピ　天火。これはほとんど主の知れない怪火で、大きさは提灯ほどで人玉のように尾を曳かない。それが屋の上に落ちて来ると火事を起こすと肥後の玉名郡ではいい（南関方言集）、肥前東松浦の山村では、家に入ると病人ができるといって、鉦をたたいて追い出した。あるいはただ単に天気がよくなるともいったそうである。

トビモノ　光り物という言葉は中世にはいろいろの怪火を呼んでいる。この中には流星もあり、又もっと近い処を飛ぶ火もあった。茨城県北部では現在も飛び物といっている。蒟蒻玉

が飛びものになって光を放って飛ぶことがあるという。山鳥が夜飛ぶと光って飛びものとまちがえることがあるともいう。京都でも古椿の根が光って飛んだという話などが元はあった。

ワタリビシャク　丹波の知井の山村などでは光り物が三種あるという。その一はテンビ、二は人ダマ、三はこのワタリビシャクで蒼白い杓子形のものでふわふわと飛ぶという。名の起りはほぼ明らかだが、何がこれになるのかは知られていない。

トウジ　暴風雨中に起こる怪光をトウジという（土佐方言の研究）。不明。

ゴッタイビ　鬼火のことという（阿山郡方言集）。

イゲボ　伊勢度会郡で鬼火をイゲボという。他ではまだ耳にせぬので、名の由来を想像しがたい。

キカ　薩摩の下甑島で火の玉のことだという。大きな火の玉の細かく分れるものという。鬼火の漢語がいつの間にか、こんな処に来て土着しているのである。

ケチビ　土佐には殊にこの話が多い。たいていは人の怨霊の化するものと解せられている（土佐風俗と伝説）。竹の皮草履を三つたたいて喚べば近よるといい（郷土研究一巻八号）、又は草履の裏に唾を吐きかけて招けば来るというのは（民俗学三巻五号）、もとは人の無礼をゆるさぬという意味であったらしい。佐渡の外海府にも人魂をケチという語がある。

イネンビ　沖縄では亡霊を遺念と呼び従って遺念火の話が多い（山原の土俗）。二つの注意すべき点は、たいていは定まった土地と結び付き、そう自由に遠くへは飛んで行かぬことと、

次には男女二つの霊の火が、往々つれ立って出ることである。これは他府県でもよく聴く話で古い形であろうと思う。ただし亡霊火と現在よばれているのは、専ら海上の怪火のことで、これは群をなし又よく移動する。

タクラウビ　備後御調郡の海上に現われるという怪火で、火の数は二つというから起こりは「比べ火」であろう。芸藩通志巻九九に見えているがこの頃はもういわぬようである。芸備の境の航路には又京女郎筑紫女郎という二つの婦人の形をした岩の話などもあって、もとは通行の船の信仰から起こったことを想像せしめる。

ジャンジャンビ　奈良県中部にはこの名をもって呼ばれる火の怪の話が多い。飛ぶときにジャンジャンという音がするからともいう。火は二つで、二つはいつまでも逢うことができぬといい、これに伴のうて女夫川・打合い橋などの伝説が処々にあった（旅と伝説八巻五号）。柳本の十市城主の怨霊の火と伝うるものは、又一にホイホイ火ともいう。人が城址の山に向かってホイホイと二度三度喚ぶと、必ずジャンジャンと飛んで来る。これを見た者は病むというから（大和の伝説）、そうたびたびは試みなかったろうが今でも至って有名である。

ボウズビ　加賀の鳥越村では坊主火という火の玉が、飛びあるくことが有名である。昔油を売る男が悪巧みをして鬢附けを枡の隅に塗って枡目を盗んだ。その罰で死んでからこの火になったといっている（能美郡誌）。しかし油商人なら坊主というのは少しおかしい。

アブラボウ　近江野洲郡の欲賀という村では、春の末から夏にかけて夜分に出現する怪火を

油坊という。その火の焔の中には多くの僧形を認めるといってこの名がある。昔比叡山の僧侶で燈油料を盗んだ者の亡霊がこの火になったと伝えられる（郷土研究五巻五号）。河内枚岡のお社に近い姥が火を始めとしてこの怪し火には油を盗んだ話がよく附いている。あるいは民間の松の火が、燈油の火に進化した時代に、盛んにこの空想が燃え立った名残りかも知れぬ。越後南蒲原のある旧家に昔アブラナセという妖怪がいて家の者が油を粗末に使うとすぐに出て来てアブラナセ、すなわち油を返済せよといったという話がある（三条南郷談）。鬼火ではないがこれと関係があるらしい。以前は菜種はなく皆胡麻油であった。つまり今日よりも遙かに貴重だったのである。

ゴンゴロウビ　越後本成寺村には、五十野の権五郎という博徒が、殺された遺念といってこの名の火の燃える場処がある。今では附近の農家ではこれを雨の兆とし、この火を見ると急いで稲架を取り込むという（三条南郷談）。

オサビ　日向の延岡附近の三角池という池では、雨の降る晩には筬火というのが二つ出る。明治のなかばまでは折々これを見た人があった。昔二人の女が筬を返せ返したで争いをして池に落ちて死んだ。それで今なお二つの火が現われて喧嘩をするのだと伝えている（延岡雑記）。二つの火がいっしょに出るという話は、名古屋附近にもあった。これは勘太郎火と称してその婆と二人づれであった。

カネノカミノヒ　伊予の怒和島では大晦日の夜更に、氏神様の後に提灯のような火が下り、

わめくような声を聴く者がある。老人はこれを歳徳神が来られるのだというそうである。肥後の天草島では大晦日の真夜中に、金ン主という怪物が出る。これと力くらべをして勝てば大金持になるといい、武士の姿をして現われるともいった（民俗誌）。多くの土地ではこれは一つの昔話だったようである。夜半に松明をともしてたくさんの荷馬が通る。その先頭の馬を斫れば黄金だったのに、気おくれがして漸く三番目の馬を斫ったら、荷物は全部銅銭であって、それでも結構長者になったなどといっている（吾妻昔物語）。

ヤギョウサン　阿波の夜行様という鬼の話は民間伝承にも出ている（三巻二号）。節分の晩に来る髭の生えた一つ目の鬼といい、今は嚇されるのは小児だけになったが、以前は節分・大晦日・庚申の夜の外に、夜行日という日があって夜行さんが、首の切れた馬に乗って道路を徘徊した。これに出逢うと投げられ又は蹴殺される。草鞋を頭に載せて地に伏していればよいといっていた（土の鈴一一号）。夜行日は拾芥抄に百鬼夜行日とあるのがそれであろう。正月は子の日、二月は午の日、三月は巳の日と、月によって日が定まっていた。

クビナシウマ　首無し馬の出て来るといった地方は越前の福井にあり、又壱岐島にも首切れ馬が出た。四国でも阿波ばかりでなくそちこちに出る。神様が乗って、又は馬だけで、又は首の方ばかり飛びまわるという話もある。

示現諸相の中でも、最も信者の少ない妖怪のいい伝えは、実在の言葉で採録しておくよ

り他に、その形体を把捉するの途がないので、諸君の力を借り、できるだけ多くの名と説明とを集めてみようとするのである。まだなかなか続きそうなので、これからは時々中絶するつもりであるが、中絶しても蒐集をやめているのではない。五十音順にでも整理しておいて、なお続々不足を補われんことを希望する。

解説

中島河太郎

怪力乱神を語ろうとしなかった孔子は、なんといっても賢明であった。月世界に着陸し、火星の探索が進行しつつある現代の科学の進歩をもってしても、幽界や妖異については、しかと断定をくだせそうもない。

欧米では心霊科学が早く成立したが、その進展は遅々として、まだ万人を安心立命させるに至っていない。わが国でも井上圓了博士の「妖怪学」の大著があったが、それだけで従来の疑問が氷解したと思うものはいなかったにちがいない。

徐々にでも霊界の消息がわかれば、心魂の安らぎが得られるのだが、その保証がないままに、無責任なマス・コミは盲点に乗じて、相も変わらず怪異現象を俎上にし、一方ではUFO、魔の三角海域、宇宙人の古代遺跡など、新たな難題が持ち込まれて、科学者の無能が痛感されているのである。

どの宗教かに一方的に縋ってしまえば、尊崇する対象がきまり、それと対照的な邪悪なものの正体にも戸惑うことはないかもしれぬが、既成宗教の欠点だけを耳にしがちの私などは、

至って信仰心に乏しい。そのくせ、現代科学の能力の及ばぬ怪異現象については、人一倍関心が強いかもしれぬ。

著者が本書を公刊されたのは昭和三十一年十二月であった。ここに収められた文章は、せいぜい新しくて昭和十三、四年に書かれたものである。一巻に纏めておこうと決意した頃は、特に妖怪に心を傾けておられたわけではなかった。

その自序にも、「どうして今頃この様な本を出すのかと、不審に思」う人のために、断りを用意しておられる。誰かが説明してくれると、あてにしていた疑問に対して、明確な解答をしてもらえなかった不信を表白し、せめては誠実な伝聞を保存しておこうとされたこと、畏怖のもっとも原始的な形はどんなものか、その変遷結合を国人の力で究めたいという願望を述べておられる。

「私は幼少の頃からだいぶこの方面にむだな時間を費やしましたけれども、今となってはもう問題を限定しなければなりません。」という嗟嘆は、著者のような碩学であるばかりでなく、心意現象にもっとも鋭敏な感覚を具えている人でも、なお一代では説き尽くせぬ幽玄な問題であったことを立証している。

本書に収められている「幻覚の実験」は、著者十四歳の体験であった。祠の前を掘って、美しい古銭を見つけ出したあと、澄みきった青空のなかに、数十の昼の星を見たというのである。

他人に語れば、むろん幻覚として一笑に付されるたぐいだが、これが遡った時代なら、周囲の雰囲気からある種の幻覚を起こすような習性が、無意識に養われていたかもしれないし、また少童の見たまぼろしを素直に耳にとめたかもしれない。ともかく「説明のつかぬ不思議」を、素直に集録しておいて、後考を俟つというのが著者の方図であった。

それは自序にも説いてあるように、著者の父君が妖異神秘談に対し、極めて率直な態度で接し、真否を論ぜず、「気を付けていたら今に少しずつ、わかって来るかも知れぬ」という、海潤な庭訓を示されたことを受けついでおられるかもしれない。

ともかく著者の少年時の耳目に、ガタロの存在が顕著であったし、平田篤胤の「古今妖魅考」に惹かれて、天狗の実話を聴き集めようとするほど、興味を唆られている。

当時の日本の幼童なら、だれしも見聞にこと欠かなかった怪異談の由って生じた源流と、流布し持続した所以を、生涯に亙って考究し、その間の収穫を筆にとどめたのが本書である。

ここに収められた文章のうち、もっとも早いのは明治四十二年三月の「天狗の話」だが、それより先に「幽冥談」がある。三十八年九月の「新古文林」に載ったもので、民俗学上のエッセイではいちばん早いが、談話なので「定本柳田国男集」には省かれている。

公務の他に全国農事会幹事、龍土会を通じての文人との交流などで多忙を極めていたはずだが、心に潜めていたのは天狗を通じての幽冥の世界だったのである。

「外の人は怖いと云う話でも、どこか昔話でも聞くような考えで聴いている、僕はもっと

根本にはいって因って来る所を研究しようと云う傾きを有っている」ことを冒頭に述べて、覚悟を披瀝された。

天狗の名称が海外の書物に由来したとしても、元来在ったものに付けた名にすぎない、研究するのはその実質であって名称にあらずといい、なぜそんなものを研究するかといえば、どこの国民でもめいめい「特別の不可思議」をもっているから、これらを研究すれば、一面に国民の歴史を研究することができると、予測しておられるのは、民俗学の誕生を予見していたものといえよう。

平田一派ないし幕末の神道学者の事業のうち、最大の功績は幽冥のことを研究した点にある。しかもかれらが理論よりも、精を出して感得したことを称揚し、「本朝妖魅考」については、仏教に対する敵愾心からの議論で、悪僧が天狗に化したという見解には同調されていない。

「幽冥談」の骨子は、この世の中は現世と幽冥、すなわちうつし世とかくり世から成るといい、その間の交通を論じている。一つは自覚的に進んで交通する場合で、天狗になった人間の例をあげている。もう一つは偶然かどうか分らぬが、向うからするもので、それがいわゆるお化けだというのである。

私はこういう断定的なもの言いは好まないが、少なくとも日露戦争の頃に、日本人の固有信仰に着目し、それに異国の文化宗教がまつわりついて、錯雑した事象を惹き起すことを

見通しておられる識見は驚嘆せざるを得ない。

この長年に亙る妖怪研究の概括ともいうべきものが、表題に採られた「妖怪談義」である。幽霊とオバケを混同しがちの現代人に対して、明確な境界線を示して、その後の指標となっている。

その相違の第一は出現する場所で、オバケはきまっているが、幽霊は追いかけてくる。第二にオバケは相手を選ばぬが、幽霊は対象がきまっている。第三は時刻で、幽霊が丑満の頃とすれば、オバケは宵と暁の薄明に乗ずるというのである。

「誰にも気のつくようなかなり明瞭な差別」だといわれるのだが、オバケはともかくとして、幽霊には不服な連中がいそうな気配である。このほうは住所不定のようにいわれるが、ある部屋に泊まったが故に、ある場所に行き合わせたために、お目にかかれた例は遠藤周作氏をまつまでもなく、夥しい例がある。そういうものは第二に説かれる、幽霊は「これぞと思う者だけに思い知らせようとする」といったルールを無視して、行きずりの客人に怨みを訴えようとするのである。

あるいは著者の説かれるように、元来は幽霊とオバケとの間に、そういう協定があったのに、次第にルーズになったのかとも思われるが、幽霊は一概に律しきれぬ複雑な存在であって、軽々しく断定できそうもない。

お化けの出現の時刻を逢魔が刻といい、かはたれどきと名づけて、古人が恐れつつしんだ

心細い感覚や、日暮れの子供たちの挙動など、著者の筆にかかるとにわかに精彩を放ってくる。微妙な感じを捉えて、いきいきと描きだした文章が、論考に挟まっているのだから、柳田ファンにとっては無類の魅力であったし、ある種の読者からは随筆視されて、長く学界の承認を得られなかった原因の一つでもあった。

幽霊とお化けの区別ではないが、昔話と伝説に截然（せつぜん）とした相違のあることを提示されたのも、著者の功績であった。ところが同じような妖魔を対象にして、昔話と伝説が併存し、一方が人間の退治譚となり、他が人を畏服させる点にも注意を喚起しておられる。

「妖怪古意」は男鹿半島を有名にしたナマハゲの行事から始まって、妖怪の名を蒙古や元興寺に由来すると説く、学者流の講釈を一蹴された。かえって児童語で化物を意味することばを追跡分類して、起源を推定しておられるが、いわば謎解きのおもしろさに相通ずるものがある。

川童については三篇が収められているが、自序にもあるように、著者にとっては懐しい幼時の記憶とともにあるばかりでなく、「山島民譚集」ではまず川童駒引をとりあげるほどの熱の入れようだった。

私の筆名河太郎は、この川童の関西風の呼び方を無断借用した。「川童の渡り」にあるように、子供のころにはヒョンヒョンというあの啼き声がそれだと教えられたものだが、あいにく名称はガラッパで、河太郎ではなかった。

「山島民譚集」以後、川童の伝承は各地で競って集められたから、私の関心はその発達史にある。その実在を信ずるか否かは問わず、物心ついたものでカッパを知らぬものはないほどだが、この一族の誕生は決して古くはない。

中世の文献にはカッパの名称が見当たらぬが、そうするとこの種族は近世に至って台頭し、わずかの間に日本全国に繁殖したことになる。著者も「水虎考略」を引いて「諸方の見取図なるものが載せてあるが、鼻の低いもの、犢鼻褌をかいたもの、甲羅があって四つ匍いのものなどが、雑然として並んでいて、実は空想のまだ統一していなかったことを立証する」と述べておられる。

これらの写生図の矛盾が編者を困惑せしめなかったとするなら、これもまた奇怪である。いわば川童の進歩発達の段階に相違があって、ある地方では匍って歩き、別な地方では立って歩き、さらに人語を解するに至っては、猿から原始人までの相違であって、何十万年、何百万年の差があることになる。

だいいち、川童と認めて写生しているが、それがどうして川童だと分ったのか、自分で名乗ったはずはないとするなら、採集者がそれぞれの土地で川童だと判断したにすぎない。まして写生と称しながら、褌をつけさせているのなど、愛嬌がありすぎる。

川童の存在を力説しなくなった現代こそ、かえってその形態について、ほぼ統一された概念をもっている。わずか百年か二百年の間に、国民共通のイメージを成立させた背後には、

よほど一般的で強烈な信仰の絆があったにちがいない。
著者はさらに小豆洗い、狸、狐、ひだる神、ザシキワラシ、山姥、山男、狒々、大人弥五郎、一つ目小僧、片足神、天狗について触れている。妖怪として承認されていないものもあるが、「お化けを前代信仰の零落した末期現象」と見るなら、それらの神々は過渡的存在であった。

こういう著者のいたわり深い観察のお蔭で、はじめは畏れられ、やがてはやや嘲りの種にされそうになった妖怪変化の素性と生長とが、見事に説き明かされたのである。

ただ、ややもすると世間が混同しがちの幽界の消息については、気短かな断案が下せそうもない。大正六年十一月の「幽霊思想の変遷」は、相州内郷村での見聞にもとづいて、死者の近親が野辺送りの帰りに挿す竹串が、話の発端になっている。この竹串の起源は玉串と同系統で、樹枝に霊魂が依るという思想に発しているといい、竹串に霊を依らしめて、目に見えぬ亡霊の元の家に戻ることを避けようとしたことが説かれている。

すなわち、ここでいう幽霊は死者の霊魂のことであって、綿々と怨みをつらねる足許のおぼつかない仲間ではなかった。

昭和三年八月の「主婦之友」が幽霊と怪談の座談会を催して、著者は泉鏡花、里見弴、小村雪岱らと同席している。著者のもち出した話は、伯耆に伝わるもので、落城の際埋めた財宝の目印に白南天を植えたが、時に南天を刈ることがあっても、その場所が分らぬという、

遠野物語以来の伝説である。

それから林男爵の見た狐の話、「甲子夜話」にある生きている人から人魂の出る話、祖母から聴いたもので、病中蒲団に乗っていた猫を、治ったので棄てにいった老婆が、猫とともに帰らなかった話、熊本の切腹者の幽霊に一家眷族（けんぞく）を引き合わせた話が語られている。

それから幽霊に出逢ったときの参考にと、「暗闇の中に輪郭がぼんやり明るいのは曲者です。ただの人には後光は射しませんからね。それから向うから何か話しかけたら、も一度問い返してみることです。するともしよくないものだったら、二度目には必ず、一層はっきりしないことをいうそうです」とある。

だれでも幽霊と問答するだけの勇気があろうとは思えぬが、「川童の渡り」にも人間に聴き返されると、次第にことばが明確を欠くことを載せているから、どうやらこれはお化けの鑑別法であった。

白南天の話も幽霊のまったく登場せぬ財宝伝説だから、まだこの頃の著者は幽霊と妖怪の区別を意に介していなかったようである。

本書には古く書かれた短い文章が多いが、山姥、山男などについては「山の人生」に、一つ目小僧などについては「一つ目小僧その他」といったふうに、じっとテーマを温めて、熟するのを待つのが著者の学風であったから、あとで発展して実を結んだ例が多い。殊にこういう年代をばらばらにして書かれた文集では、これだけに頼らず、他の著作との関連の深い

ものがある。

分量からいえばそれほどのものではないが、妖怪学が圓了博士の専売に思われていたのに対し、これを打破するに充分であった。先に引いた「幽冥談」でも、「僕は井上圓了さんなどに対しては徹頭徹尾反対の意を表せざるを得ないのである。」といい、また「井上圓了さんなどは色々の理窟をつけているけれども、それは恐らく未来に改良さるべき学説であって、一方の不可思議説は百年二百年の後までも残るものであろうと思う。」といいきって、いわゆる合理的解釈を強い語調で却けておられる。

「妖怪学」が明治啓蒙期に果たした役割を、まったく無視するような威勢のいい発言はどうかと思うが、著者が夙（はや）くから真剣に、しかも慎重に神秘不可思議の現象に潜心しようとされた気魄が窺えよう。そしてその一端の成果がこの愉しい一巻に纒められているのである。

柳田國男（やなぎた くにお）

1875年兵庫県生まれ。東京帝国大学法科卒業。日本民俗学樹立の功績により，1951年文化勲章を受けた。1962年没。『遠野物語』『口承文芸史考』『雪国の春』『海南小記』など，その著作は『定本柳田國男集』に収められている。

定価300円

妖怪談義

柳田國男

昭和52年4月10日　第1刷発行
昭和53年9月10日　第2刷発行

発行者　野間省一
発行所　株式会社講談社
東京都文京区音羽2－12－21　〒112
電話・東京(03)945－1111(大代表)
振替・東京8－3930
装　幀　蟹江征治
レイアウト　志賀紀子
印　刷　廣済堂印刷株式会社
製　本　株式会社大進堂

0139－581354－2253（0）　（術E）

「講談社学術文庫」の刊行に当たって

これは、学術をポケットに入れることをモットーとして生まれた文庫である。学術は少年の心を養い、成年の心を満たす。その学術がポケットにはいる形で、万人のものになることは、生涯教育をうたう現代の理想である。

こうした考え方は、学術を巨大な城のように見る世間の常識に反するかもしれない。また、一部の人たちからは、学術の権威をおとすものと非難されるかもしれない。しかし、それはいずれも学術の新しい在り方を解しないものといわざるをえない。

学術は、まず魔術への挑戦から始まった。やがて、いわゆる常識をつぎつぎに改めていった。学術の権威は、幾百年、幾千年にわたる、苦しい戦いの成果である。こうしてきずきあげられた城が、一見して近づきがたいものにうつるのは、そのためである。しかし、学術の権威を、その形の上だけで判断してはならない。その生成のあとをかえりみれば、その根は常に人々の生活の中にあった。学術が大きな力たりうるのはそのためであって、生活をはなれた学術は、どこにもない。

開かれた社会といわれる現代にとって、これはまったく自明である。生活と学術との間に、もし距離があるとすれば、何をおいてもこれを埋めねばならない。もしこの距離が形の上の迷信からきているとすれば、その迷信をうち破らねばならぬ。

学術文庫は、内外の迷信を打破し、学術のために新しい天地をひらく意図をもって生まれた。文庫という小さい形と、学術という壮大な城とが、完全に両立するためには、なおいくらかの時を必要とするであろう。しかし、学術をポケットにした社会が、人間の生活にとってより豊かな社会であることは、たしかである。そうした社会の実現のために、文庫の世界に新しいジャンルを加えることができれば幸いである。

一九七六年六月

野間省一

《講談社学術文庫》

今西錦司著（解説・小原秀雄）
進化とはなにか
正統派進化論への疑義を唱える著者は名著『生物の世界』以来、豊富な踏査探検と卓抜な理論構成とで〝今西進化論〟を構築してきた。ここにはダーウィン進化論を凌駕する今西進化論の基底が示されている。

久松潜一著
万葉秀歌(一)〜(五)
著者がその解釈と鑑賞に半生を傾けた『万葉集』の秀歌九〇〇首を集大成したライフワーク。生涯『万葉集』を愛し、研究しつづけた著者ならではの深い理解と見識にみちた、古典愛好者必携の名著。（全五巻）

都留重人著
経済学入門
国際的な経済学者の著者が、国民総生産(GNP)や国民所得などの用語解説からはじまり、現代経済学の最大の課題であるGNPの拡大と福祉の問題について、卑近な例をもって説いた経済学の入門書である。

鶴見俊輔著（解説・大淵和夫）
アメリカ哲学(上)(下)
アメリカに生まれた哲学、プラグマティズムの構造や思想家を包括的に分析した本書は、最高水準の研究書であると同時に、人々が創るべき哲学のあり方をも論じた、極めて独創性豊かな名著である。

柳田國男著（解説・桜田勝徳）
明治大正史　世相篇(上)(下)
柳田民俗学の出発点をなす作品の一つ。明治大正の六十年間に発行されたあらゆる新聞を渉猟して得た資料を基礎に、明治大正の日本の社会の変化を民俗学的方法によって描き出した興味深い世相史。

笠　信太郎著（解説・小幡　操）
論理について
単なる知識の集積に終わっている学問を越えて生きるための知恵をいかにして築いていくか、日本のオピニオン・リーダーとして活躍した著者が自己の学問形成の体験に即しつつ平明に説く好エッセイ。

丘　浅次郎著（解説・渡辺正雄）
進化論講話(上)(下)
進化論の登場は人類思想史上もっとも影響力のあった思想である。本書はダーウィンの『種の起源』を著者自身のゆたかな文章力を駆使して真髄から紹介した名著であり、進化論を知るうえでの必読書である。

子どもの心理
波多野完治著（解説・芳賀　純）

多元価値の時代に生きる子どもの心をどう理解するか。そのしつけの原理はなにか。発展変化する社会の現実をみすえたうえで、深い洞察と助言を、具体的にわかりやすくのべた、すべての親や教師必読の書。

内村鑑三
森　有正著（解説・秋田　稔）

森有正氏は、内村鑑三の思想を、その構造全体の規模において、内村鑑三の思想展開に即しつつ自らのことばとして表わした。自分自身の生の深みにおいて、内村鑑三の人格と思想に触れているのである。

人間模索
渡辺一夫著（解説・二宮　敬）

人間とは何か。狂気・暴力・不寛容にとらわれやすい人間存在のありようを、透徹したユマニストの眼で鋭くえぐり、人間として真に生き通すには理性と寛容、懐疑と内省こそ不可欠と説く必読の好エッセー。

東洋の発見
岩村　忍著

中国とヨーロッパの間には、広大な大陸があり、多くの民族国家が興亡した。その障害をのりこえつつ、東西の交渉は続けられてきた。「東洋の発見」は世界史をどう変えたのか。新視点で描く東西交渉史。

旅についての思索
山本　偦著

万葉の昔から今に至るまで、日本人の旅には深い歴史がある。自ら放浪に幾多の歳月を費した著者が、旅の本質とは一体何なのか、その内面を求めて、西行、芭蕉ら先人の跡を辿りつつ綴る異色の旅の思索。

ヒトラーの時代(上)(下)
野田宣雄著

ドイツにヒトラー政権が成立した一九三三年から、第二次世界大戦のおわる一九四五年までの歴史を、ヨーロッパを中心に概観。第二次世界大戦のヨーロッパ的局面に関するコンパクトな知識を得るのに最適。

口承文芸史考
柳田國男著（解説・関　敬吾）

常民が口づたえによって伝えてきた伝説、神話、物語、歌謡、さらにその背景となっている祭礼、迷信等の研究を、民俗学の一部門として口承文芸という名を与え、新しい学問をひらいた記念碑的論文。

中国古典名言集(九)　総索引
諸橋轍次著

好評の『中国古典名言集』の件名総索引集。「人間」「人生」「家と社会」など十類に分類し、さらに各類を十数目に分ける。厖大な中国古典の中から名言を引用、あるいは検索するうえで、多大な便益がある。

日本語の変遷
金田一京助著（解説・吉沢典男）

「日本語の変遷」「規範文法から歴史文法へ」「新国語の生みの悩み」「日本語の特質」の四篇からなる金田一京助の日本語論。その日本語史観・文法改革論・仮名遣論等々は今日なお新鮮さを失っていない。

ライフサイエンスの哲学
沢田允茂著（解説・渡辺　格）

現代社会の発展はバラ色の未来だけでなく、人類生存の危機をも生みだした。本書は、ライフサイエンスの諸問題を哲学的論理的に展開するなかで、これからの〝科学の在り方〟〝人間の生き方〟を考える。

なぞとことわざ
柳田國男著（解説・高藤武馬）

昔から語りつがれた身近な謎や諺から先祖の生活の知恵をさぐり、一本の棒の話から歴史に対する新しい興味をさそい、民俗学への参加を呼びかける。著者生前の信任最も篤かった高藤武馬氏による編集解説。

深層文化論序説
上山春平著

フロイトの深層心理に対して深層文化を設定した著者が、遺物や遺跡文字を手がかりとして、日本文化の特色をあきらかにしていく試論である。書名と同名論文のほか「人間学の位置」「縄文の石笛」を収録。

目に見えないもの
湯川秀樹著（解説・片山泰久）

初版以来、科学に志す多くの若者の心を捉えた名著。自然科学的なものの見方、考え方を誰にもわかる平易な言葉で語る珠玉の小品には真実を求めての終りなき旅に立った著者の研ぎ澄まされた知性が光る。

日本の美を求めて
東山魁夷著

日本画壇の第一人者、あくなき美の探究者東山画伯が、日本の風景への憧憬と讃歌を綴る随想と講演あわせて五篇を収録する。自然との邂逅とその感動が全篇を貫いて響き、日本美の根源へと読者を誘う好著。

内村剛介著
科学の果ての宗教

「懐疑」と「不信」をこととする現代の科学主義をのりこえ、「信」に拠って生きる人間社会への転換は可能か。ソルジェニツィンに代表される現代ロシヤの知識人の苦闘の中にその契機を探る問題提起の書。

祖父江孝男著（解説・濱口恵俊）
文化人類学のすすめ

世界の諸民族の文化と本質をもとめて登場した文化人類学は、地球時代の今日あらためて注目されている。本書は斯界の第一人者が、人間の行動を文化とパーソナリティの面から論述した格好の入門書である。

高木市之助著（解説・中西達治）
平家物語の論

日本文学史上最も広範に受けいれられた『平家物語』の特質と魅力は何か。「語り」文学としての性格が民衆を文学へと解放するその経緯を論じて、エネルギッシュな中世文学の実像を浮き彫りにした論考集。

村井　実著（解説・長井和雄）
ソクラテス(上)(下)

偉大な思想家ソクラテスの生涯を、教育という視座からとらえることによって、あざやかに浮きぼりにした著者は、さらに進んで、彼の思想が今なお教育活動の不可欠の基本要素であることを明らかにする。

上田正昭著
古代文化の探究

日本各地の古代文化の姿を、史実に即して確かなる視点からとらえた本書は、読者をして古代文化にふれるよろこびと、史心を正すきっかけを与えずにはおかない。歴史を愛する全ての人に贈る古代史入門。

橋川文三著（解説・神島二郎）
柳田国男

民俗学の分野のみならず、日本の学問と思想に大きな影響をあたえた柳田国男。その生涯を通じての人となりと学問を、マックス・ウェーバーらとの対比において、世界史的な評価を試みた、画期的な評伝。

P・K・ボック著／江淵一公訳
現代文化人類学入門(一)～(四)

現代アメリカ気鋭の学者による異色の入門・教養書の完訳。原書は一貫した理論構成、明快で大胆なアプローチ、未開から文明社会をも視野にいれた具体性にとむ記述で、英米学界の声価をえている。（全四巻）

金田一春彦著（解説・平井昌夫）
話し言葉の技術

「話し言葉」に、初めてアカデミズムの光を当てた名著。ソシュール、イェスペルゼンらの学説から現役アナウンサーの正しいしゃべりかたまで、豊富で具体的な引例によって難解な理論をわかりやすく解説。

柳田國男著（解説・田中宣一）
年中行事覚書

人々の生活と労働にリズムを与え、共同体内に連帯感を生み出す季節の行事。それらなつかしき習俗・行事の数々に民俗学の光をあて、隠れた意味や成り立ちを探る。日本農民の生活と信仰の核心に迫る名著。

沢田允茂著（解説・坂本百大）
論理と思想構造

本書前半では「確実な知識を得るための方法」として、現代論理学の考え方と歴史的展開が述べられ、後半ではその新しい視点から現代文明の病が論じられる。文明の未来を眺望する視点にみちた新・哲学のすすめ。

夏目漱石著（校注、解説・櫻庭信之）
文学評論(一)～(三)

本書は、漱石が東大英文科で講じた「十八世紀英文学」のいわば講義録である。処女作『猫』と同時に進められた故もあってか至るところに『猫』的視点が光り、ユニークでユーモア溢れる名講義である。（全三巻）

経済安定本部（解説・金森久雄）
第一次経済白書

国家も赤字・企業も赤字・家計も赤字と銘うった本書は、戦後日本経済のスタートを赤裸々に記述したかけがえのない国民共有の必読書であり、新生日本のために熱情を傾けて作成された白書中の白眉である。

R・A・ニスベット著　南博訳（解説・山岸俊男）
現代社会学入門(一)～(四)

社会学は、決して専門的なむずかしい学問ではない。われわれ人間の社会行動を解明する科学だ。現代社会学の特質を明らかにし、迷路におちこんだ社会学に新視点を提唱する明快な入門書。本邦初訳。（全四巻）

樋口清之著（解説・丸茂武重）
日本女性の生活史

〝被害者としての女性史〟というイデオロギーを避け、むしろ女性の各時代に果した大きな役割や深い愛情と勇気を、率直に見つめる。豊かな学殖と暖かい目差しで織り上げた、血の通った日本女性史である。

柳田國男著（解説・中島河太郎）
妖怪談義
河童や山姥や天狗等、誰でも知っているのに、実はよく知らないこれらの妖怪たちを追求してゆくと、正史に現れない、国土にひそむ真実の歴史をかいまみることができることを示した日本民俗学の先駆的業績。

桑原武夫著（解説・山田　稔）
フランス印象記
新進の仏文学者として留学した著者が、さまざまな人々との交流や風物を描きつつ、フランスの文化と社会を如実に浮き彫りにした印象記。観察、行動、ユーモアなど著者独特の魅力に満ちた待望の名著である。

唐木順三著（解説・岡松和夫）
朴の木――人生を考える――
真・善・美という価値体系の崩壊が近代ニヒリズムの根本原因であるとの認識に立って、進歩するしか能のない科学や技術への危惧をいだきながら、折々の事象に托して静かに語る。「無」の思想形成期の作品。

柳田國男著（解説・瀬川清子）
食物と心臓
「日本人の精神生活に、食物がいかなる交渉を持つ」のか。本書は上のような問題意識の下に書かれ、我々の生活行事にともなう「餅」や「にぎり飯」という食物の習いに、日本人の生死の感情を読みとっている。

渡部昇一著
「人間らしさ」の構造
戦後の日本において自分の外にある価値体系は崩壊し、人々は「自分の内側」に価値を求めざるをえない状況にある。本書は性善説の立場から、日本人の生きがいとは何かを追求したユニークな現代文明論。

和辻哲郎著（解説・勝部真長）
妻　和辻照への手紙(上)(下)
昭和初期に留学生としてヨーロッパに渡った和辻博士は、故国の妻子へ厖大な手紙をよせられた。我々はこの手紙によって、博士の留学生時代の面影と、名著『風土』等が生まれた背景を知ることができよう。

谷川徹三著
文学入門
文芸は人間にどのような力を持っているか。日本文学は世界文学の背景の下でどう見ることができるか。古事記・ハムレットをはじめ時代時代の古典を手掛りに人間の精神の歴史に対する関心から文学を見る。

澤田昭夫著
論文の書き方
論文を書くためには、ものごとを論理的にとらえて、それを正確に、説得力ある言葉で表現することが必要である。論文が書けずに悩む人人のために、自らの体験を踏まえてその方法を具体的に説いた力作。

梅原　猛著
美と倫理の矛盾
川端文学によって思索の道を選んだ著者が、川端文学とは何か、なぜ自殺したのかを、川端康成が深い共感を示した「仏界易入、魔界難入」をその秘密を解明する鍵として、独特かつ大胆に追究した川端康成論。

倉田百三著（解説・稲垣友美）
法然と親鸞の信仰(上)(下)
本書では、法然の「一枚起請文」と、親鸞の「歎異鈔」を中心として、浄土宗と浄土真宗の信仰が平易にしかも奥所をつきつめて説かれる。倉田百三の熱っぽい語り口は、読者の心を動かさずにはおかない。

谷川徹三著
哲学案内
哲学はなぜ難解と言われるか。そこには哲学への誤解がありはしないか。本書はソクラテスから現代の哲学までの歩みを語りつつ、哲学研究に不可欠な基本的諸問題を深く掘り下げ、哲学への道を案内する。

高木敏雄著（解説・関　敬吾）
童話の研究
本書は幻の名著である。著者高木敏雄はわが国の神話学の創始者であるとともに、その該博な知識は伝説、昔話など広く口承文芸一般に及ぶ。本書はわが国最初の比較童話研究であり、時代の金字塔である。

岩淵悦太郎著（解説・大石初太郎）
日本語を考える
日本語に関心をもつすべての人々にとって、正しい言葉遣いと文章を知るための恰好の書。日本語の問題点を指摘し、言葉としての働きを高めるため、日本語をどのように発展させるべきかを論じた名著。

柳田國男著（解説・岩淵悦太郎）
国語の将来(上)(下)
国語こそ日本人の思想、感情の根基であるとする著者が、学校国語教育の現状を批判的に検討するとともに、遠く祖先の生活の中での国語教育に学びつつ、国民の将来の健全な表現を願う気持から綴った名著。

清水幾太郎著
私の読書と人生
（解説・高根正昭）

本書は、著者の《読書をめぐる自伝風の記録》であり、青年期の人間形成を語るドラマチックな物語である。知性の息吹、情熱こそが、本書の底流であり、本書を読書論の比類ない名著に仕立て上げている。

宮本正太郎著
宇宙についての基礎知識

今日の宇宙科学の発展は、めざましいものがある。本書は最新のデータをもとに、宇宙の諸現象を平易に紹介しながら、恒星宇宙や惑星の世界のしくみを探り、地球と生命の歴史までをも明らかにしていく。

関根慶子全訳注
更級日記(上)(下)

九百年前の一地方官の娘が、父母や姉にいつくしまれ、夢多い文学少女から一時は宮廷に仕えるが、やがて妻となり母となりついには未亡人となって四十余年をふり返る、美と真実に生きた一人の女性の回想録。

鎌田茂雄著
仏陀の観たもの

仏教は一体どんな宗教でありどういう教えを説いてきたのだろうか。本書は難解な仏教の世界をその基本構造から説き起こし、仏教の今日的な存在意義を明らかにする。只今を生きる人のための仏教入門書。

河合雅雄著
ゴリラ探検記(上)(下)
（解説・藤岡喜愛）

ゴリラの生態観察のためアフリカのジャングルに挑んだ著者が、身を挺してゴリラと接触し、ついに彼等の生態と社会の構造をあきらかにした貴重な探検記。日本の霊長類研究史上に輝く必読の名著である。

中村哲著
柳田国男の思想(上)(下)
（解説・柳田為正）

本書は、年少の頃から柳田国男に接し、常に敬愛の念を寄せつつも柳田民俗学に一定の距離をおいていた著者が、柳田の思想の基本的性格を古今東西の思想家の系譜上に捉えたユニークな柳田国男論である。

宮崎義一著
現代経済を見る眼

世界的規模で経済事象が展開する今日、それらを個々の出来事として把握するのでなく、いかに全体像に迫るかは重要な経済学の現代的課題である。ここには豊富な事例をもとにした〝生きた経済学〟がある。

山本七平編
内村鑑三文明評論集(一)〜(四)

内村鑑三が『聖書之研究』に書き続けた文明批評には、過去の体験と日日の経営と生活という実体があり、今もなお驚くべき新鮮さを持っている。ここに描かれているのはまさに変らざる日本の姿である。（全四巻）

坂本二郎著
知識産業時代
（解説・香山健一）

脱工業化社会といわれる今日、より人間の知的創造力が要請される大転換の時代に、新しい日本人として、文明史的飛躍をとげるためには、われわれはどのような思想をもつべきかを大胆に展開した注目の書。

井之口章次著
民俗学の方法
（解説・倉石忠彦）

柳田国男亡きあと、日本民俗学の学問体系をめぐって、主として関係諸科学から、その方法論に関する批判がなされた。本書は、久しく柳田門下にあった著者がその批判に応えて公にした民俗学入門書である。

渡部昇一著
教養の伝統について

著者は、日本の知性が深く根差していた教養の伝統を踏まえ、夏目漱石、ラフカデオ・ハーンなどに見られる近代知性の病める姿を鮮やかに描き出す。日本人に教養の意味を改めて考えさせる問題の書である。

神島二郎著
日本人の結婚観
（解説・加藤秀俊）

日本人は結婚というものをどう把えてきたのだろうか。本書は具体的な事例を示しながら日本人の結婚観の変遷を明らかにし、同時に明治以来の日本の体制が、独身者本位であったことを鋭く指摘している。

志水速雄全訳解説
フルシチョフ秘密報告「スターリン批判」

スターリンによる「粛清」の事実をあばき、彼の罪状を白日の下にさらした政治文書「フルシチョフ秘密報告」は世界を震撼させた現代史の基礎資料である。本書は、ロシア語版からの本邦初訳決定版である。

堀米庸三著
中世の光と影(上)(下)
（解説・堀越孝一）

「中世史とは、ヨーロッパの成立史だ」と考える著者が、歴史の舞台を自らめぐり、光と影に満ちた中世像を、鮮やかに浮き上がらせる。日本のヨーロッパ中世史学に、新たな視座を開いた名著。（上下二巻）

《講談社学術文庫　最新刊》

日本文化史序説(一)〜(三)
西田直二郎著（解説・柴田　實）

該博な知識と卓抜した理論で日本の文化史学を確立した西田直二郎博士の学問的な成果が結集された、昭和初期の名著（全三巻）。内容は、文化史総論・方法論（一巻）と日本文化の展開（二・三巻）からなる。

万葉集の鑑賞及び其の批評
島木赤彦著（解説・北住敏夫）

大正期アララギ派の巨匠赤彦が、永年にわたって研究した万葉集の歌二六五首をもって、歌を作す者の信条を示した個性鮮やかな歌論書で、斎藤茂吉の『万葉秀歌』とともに、ひろく一般に影響を与えた名著。

歌道小見
島木赤彦著（解説・扇畑忠雄）

左千夫没後のアララギを率いた著者が、晩年に至り得た短歌観をもって、歌を作すは全心の集中であり、鍛練道だ、と説く実作的自信に裏打ちされた歌論書の名著で、作歌への指針と保証を与える入門書でもある。

若き哲学徒の手記
弘津正二著（解説・橋本峰雄）

京都大学哲学科に在籍し、気比丸沈没事故で悲運の死をとげた著者が、愛・学問・人生を問い、それをひた向きに生きんとする青春の告白を刻み込んだ感動の手記。困難な時代を生き抜いた一つの青春の記録。

諺の研究
藤井乙男著（解説・浅田善二郎）

国民の性情や気質を表わし、道徳や信仰のあり方を示す「諺」。本書は、そのような諺の意味や効用、発生や変遷、また各国の諺との比較などを研究し尽した最高の諺研究書であり、興味津々の快著である。

近代日本の心情の歴史
見田宗介著

明治の演歌から最近のヒット曲に至るまで、四五〇余曲の流行歌を素材に、民衆の怒り・悲しみ・よろこび・孤独・郷愁・あこがれ・無常感など、百年にわたる日本人の心情の深層とその推移を鋭く描き出す。

東山時代に於ける一縉紳の生活
原　勝郎著（解説・今枝愛眞）

三條西実隆という一公卿の生活描写をとおして、東山時代そのものの姿を、格調高い文章でいきいきとよみがえらせた。歴史学の泰斗原勝郎博士の手になる本書は、歴史を志す人必読の名著といわれている。

《講談社学術文庫　最新刊》

万葉の女人たち
樋口清之著（解説・櫻井　満）

古代男女の生活や感情を、生き生きと伝える『万葉集』。著者は、その四千五百の歌詠の心を深く理解し、万葉女人たちの、健気で愛情こまやかな生活を描き出す。本書は、万葉文化史の比類なき名著である。

現代人の精神分析
相場　均著（解説・相場均研究グループ一同）

混沌とする現代社会の中で、ますます不安と孤独に追いやられる現代人は、いかに生きてゆけばいいのだろうか。本書は、現代の社会状況を鋭く分析しながら、病める現代人がよりよく生きる為の指針を説く。

大須賀乙字俳論集
村山古郷編

明治大正期の俳論家として一世を風靡し、最近再評価の気運の高い乙字の代表作三十二篇を選んで、新たに発表年順に編んだ書。俳句の本質と性格に鋭い分析を加えた諸篇は今日の俳句に多くの示唆を与える。

虫歯についての基礎知識
大西正男著

我国の虫歯発病率は、すでに第一級文明国並みにふえている。本書は虫歯の病因を解明し、治療と予防の基本について概説しつつ、フッ素利用や歯科医療費の問題について、正しい知識を与えるものである。

日本中世史
原　勝郎著

西洋史家の手になる日本中世史として、発表当時から名声をうたわれている本書は、その着眼点の良さと深い学識、流麗で格調高いすぐれた文章等によって、今日なお歴史研究者必読の名著といわれている。

日本語横丁
板坂　元著（解説・浅井　清）

本書は従来の日本語研究の表通りでは取扱われにくい言葉や用法を積極的に取り上げ、これを学問の対象とした。日本語についての尽きない興味を語りながら日本人の考え方や価値観までをも考察した好著。

日本文化史
川瀬一馬著

我国書誌学研究の第一人者が、その学問の円熟期に臨んで、自信をこめて世に送り出す日本文化史の好著。歴史の各時代は、それぞれの骨格に血肉を授与され、息吹きを吹きこまれ、明快な通史として甦った。

《講談社学術文庫　最新刊》

A・J・トインビー／池田大作著 二十一世紀への対話(一)～(四)	現代社会に於いて人はいかに生くべきだろうか。本書は卓越した歴史家と偉大な宗教家が現代人の直面する種々の問題を論じつつ、明日を担う世代に正しい「生」の選択を示唆する異色の対談集である。(全四巻)
河口慧海著（校訂、解説・高山龍三） チベット旅行記(一)～(四)	仏教の原典を求めたいという一心から、厳重な鎖国をしくチベットにあらゆる困難に打勝って単身入国を果たした河口慧海師の波瀾万丈の旅行記。チベット研究のための第一級の古典的文献でもある。(全五巻)
桑原武夫著（解説・橋本峰雄） 事実と創作	スタンダール、ラシーヌなどについての本格的評論と、富岡鉄斎や柳田國男の独創性にはじめて照明を当てた諸論を併せた不朽の評論集。一級の芸術に触れる最高の態度と方法を明らかにした会心の作である。
宮田　登著 日本の民俗学	歴史研究における民俗学の位置づけ、民俗学的視点からとらえる歴史像のあり方に関心をいだく著者が、多岐にわたる日本の民俗学の現状を概観し、独自の立場から今後の課題を提示した待望の新著である。
山本七平著 日本人の人生観	日本人は依然として、画一化された生涯をめざす傾向からぬけ出せないでいる。本書は、我々を無意識の内に拘束している日本人の伝統的な人生観を再把握し、新しい生き方への出発点を示そうとする最新作。
夏目漱石著（解説・瀬沼茂樹） 個人主義	文豪夏目漱石の、独創的で魅力あふれる講演集。漱石の根本思想である近代個人主義の考え方を述べた表題作を初め、先見の明に満ちた「現代日本の開化」、他に「道楽と職業」「中味と形式」「文芸と道徳」を収める。
[illegible]臣著（解説・寺崎昌男） 日本教育小史	本書は、我が国の教育の発展の跡を、歴史の流れに即しながら広く文化的視点から考察・吟味し、我が国の教育全般にわたる理論や制度、またその歴史を浮きぼりにした教育史学史上に輝く必読の名著である。